令和四年度海音寺潮五郎記念 文芸ゼミナール受講生作品集

令和四年度
海音寺潮五郎記念 文芸ゼミナール受講生作品集

潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

目次

巻頭言 …… 1
講師紹介
作品
希望を探して　県立甲南高等学校　一年　井上惺巴 …… 2
サイコロは転がる　県立甲南高等学校　一年　九万田心晴 …… 10
天使の誘い　県立鹿児島中央高等学校　一年　久雅永遠 …… 18
ダ・ハ・コンツェ　県立鹿児島工業高等学校　一年　南　優衣香 …… 31
ＺＥＲＯ　県立川内高等学校　二年　山口陽生 …… 38
レッド・リミテッド　県立加治木高等学校　二年　島嵜香帆 …… 53
夏の家族　県立加治木高等学校　一年　本山愛梨 …… 63
雨の籠　鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校　一年　籠夜月都 …… 70
私の中の普通　鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校　一年　竹之下真鈴 …… 84
リッテン・フリッカ、ラプトール　鹿児島実業高等学校　三年　上川路亮太 …… 91
Sky Blue Spring　鹿児島実業高等学校　一年　松元莉乃 …… 102
ただ幸せが在らんことを　鹿児島情報高等学校　三年　村山伊緒 …… 116
生徒会選顛末記　鹿児島第一高等学校　二年　五嶋　響 …… 129
世界を描く少年　鹿児島第一高等学校　一年　砂憧柊時 …… 134
空　巣　鹿児島修学館高等学校　二年　マッサン …… 146
講師からの一言 …… 150
講座の様子 …… 151
編集後記 …… 153

巻頭言

海音寺潮五郎は第三回直木賞受賞作家であることはもとより、ＮＨＫ大河ドラマとして放送され、後に映画化もされた「天と地と」の原作者としても名を馳せています。史伝作家の第一人者であり、鹿児島県が生んだ偉大な作家の一人です。

県立図書館では、海音寺潮五郎の文業をたたえ、功績を後代に伝えるとともに、本県文化振興のための学習機会を提供しようと、鹿児島県高等学校文化連盟の後援をいただき、本年度も「海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール」を開催いたしました。

受講生は、全八回にわたる講義・演習を通して、県内在住の現役作家の方から小説の執筆について御教授いただきながら、作品の完成を目指してまいりました。第五回のゼミナールでは、特別講師として第一六五回直木賞作家の澤田瞳子先生をお迎えし、執筆の際の喜びや苦労等を直接お伺いできただけでなく、受講生の作品について御指導もいただき、執筆活動への更なる意欲につながる貴重な機会を得ました。

現在、学校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、様々な教育改革や授業改善が行われています。当ゼミナールは、高校生が、講師の先生方からの御指導や他の受講生との対話をもとに、自己の考えを広げ深めながら、言葉による見方・考え方を働かせ、作品の完成を目指し取り組むという点で、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、資質・能力を獲得することができる貴重な講座であると考えます。

受講生は、学業、部活動に励みながら、執筆活動に取り組み、講座では、互いの作品を読み味わい、活発に意見を交わし、推敲を繰り返してまいりました。「小説を執筆してみたい」と志を持ち、切磋琢磨して仕上げた十五作品が、無事に、作品集として形となったことを大変うれしく思います。

当ゼミナールの実施に際し、本年度も受講生を作品完成まで温かく導いてくださいました立石富男先生、出水沢藍子先生に心から感謝申し上げます。先生方に御指導いただきましたことは、受講生にとって貴重な財産として今後の生活の中に生かされることでしょう。加えて、受講生の執筆活動に対する一層の意欲や執筆活動の道を志す可能性を更に高めていただけたのではないかと思っております。

この作品集『潮音　～若人の樹～』を読んだ県内の高校生が、一人でも多く、小説を創作することの楽しさを感じ取り、興味を持ってくれることを願っています。

令和五年三月

鹿児島県立図書館長　古川　仲二

講師紹介

立石富男　先生

枕崎市生まれ　鹿屋市在住
作家　文芸同人誌「火山地帯」主宰
九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞
「うしろ姿」第十二回南日本文学賞「知覧へ行く」労働者文学賞
「ソロモンの夏」第十五回自由都市文学賞

【著　書】エッセイ集『夢と思いと言葉』伝記『島比呂志』小説集『黄昏』『モンブラン』『石を持つ朝』『小説　島比呂志』ほか

出水沢藍子　先生

奄美大島生まれ　鹿児島市在住
作家　小説教室主宰　「小説春秋」編集・発行人
南日本新聞文芸季評　新春文芸審査委員　九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞「マブリの島」新日本文学賞
「還流」文學界同人誌優秀賞　「木瓜（もっか）」大阪女性文芸賞佳作

【著　書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふぁ）』大島紬小説集『爪』
共著『鹿児島の女性作家たち』伝記『何もいらない』　ほか

【講　演】「奄美と私と小説」「鹿児島ゆかりの女性作家たち」「内なる奄美を書く」「私を書く気にさせる作家たち」「響く文章の書き方」ほか

希望を探して

県立甲南高等学校　一年
井上惺巴

学校に向けて自転車をこぐ。目の前の赤信号に、私はブレーキを握りしめた。右腕にじわじわとした熱気を感じ、ふと見ると太陽の光が差し込んでいる。朝の七時台とは思えないほどの暑さだ。何とか建物の陰に入ろうと、自転車にまたがったまま不安定なつま先立ちでよろよろと後ろに下がる。私は夏服の袖で額の汗を乱暴に拭った。

エアコンの効いた教室にたどり着いたのは、それから十分後のことだった。教室内にいる人は少なめである。椅子に座る瞬間、暑さと雑踏から解放されて気が緩んだためか、無意味な独り言が漏れた。

「暑っ……」

「今日の最高気温は三十四度。猛暑日一歩手前です」

声のした方向を振り向く。そこには、宿題を手にした男の子がいた。黒縁メガネをかけた、一見真面目そうな男の子。

「おはよう。七月でもこんなに暑いのに、これからまだ暑くなるのかあ。本当に勘弁してほしい……ってそれ何？　君の持ってる英語のプリント」

「宿題ですよ。先週の木曜日に配られた」

「木曜日に……？　そんなの知らないってば」

「知らないではなく覚えていないの間違いです。どうせファイルの中に埋もれてるとか、そんなところだと思いますよ」

そう指摘され、自分のファイルの中を探す。悔しいが、彼の持っているプリントを確かに私も持っていた。一つ違うのは、私のプリントの方は手つかずであること。三連休だったためか記憶がきれいさっぱり消えている。

「英語の高田先生、厳しいですよ」

と言うと、涼しい顔で立ち去って行った。

彼は先月隣の席になって、仲良くなった男子だ。漫画と絵を描くことが好き。基本的には真面目で悪い奴ではないのだが、少々人をなめているところがある。さっきの最後の一言なんてほとんど脅しでしかない。それでもまあ、一緒にいると面白いため、席が遠くなった今でもなお彼との付き合いは続いている。

昼休み。本当ならば友達と談笑しながら優雅に昼食といきたいところではあるが、あいにく私には時間がない。英語のプリントを終わらせるためだ。放課後までにプリントを終わらせ、今日中に先生に提出する。

「すいません。朝提出するのを忘れていました」

という言葉とともに。使い尽くされた言い訳ではあるが、

それが私に残された道である。
一時間目休みからすべての休み時間を費やしてきた甲斐があり、プリントは昼休みの中盤を過ぎたあたりで終わった。良かった、昼食がきちんと食べられる。とはいえ、クラスメイトの大半が昼食を終えているため、席に座って一人でおにぎりを食べる。
すると、少し遠くの席でスケッチブックに何か描いている彼を見つけた。私はラップに包まれたゆかりおにぎりを手に彼に近づく。
彼はいつも通り漫画のキャラクターらしきものを描いていた。しかし、絵のタッチはいつもと少し違う気がする。
私が何を描いているのか尋ねると、鉛筆を動かす手を止めることなく答えた。
「これは、僕が今好きな漫画なんですけど、火曜日に単行本が発売されるんです。しかも特装版」
火曜日ってことは今日か。漫画に詳しくない私は質問を重ねてみる。
「へえ、特装版って？」
「通常版と表紙が違ったり、特別なおまけがついていたりするんです。今回はシナリオブックがついてくるらしくて。売り切れは避けられないでしょうから、できるだけ早く買いたいんですよね」
ささっと服のラインを鉛筆でなぞり、絵を描き終える。出来上がったのは騎士のような格好の、ぱっちりとした二重まぶたが印象的な男の子だった。
「朝の電車に一本早く乗って、本屋に寄り道するつもりなんです！」
「じゃあもう買ったってことだ」
「いやいや、火曜日発売ですから、まだですよ」
話が食い違っている。
きょとんとしてしまった私に代わって、彼が言葉を継ぐ。
「明日発売ですから、まだ店頭には並んでませんよ」
「え、火曜日だから今日じゃん」
「何言ってるんですか、昨日まで休日で……あ」
「今週三連休だったでしょ。昨日は海の日だから休日だっただけで、曜日は月よ」
ゴン、と大きな音がする。彼が頭を抱えて、机に突っ伏したのだ。周囲の視線が集まる。
人のミスを馬鹿にしていた罰が当たったな、ざまあみろと思わないこともなかったが、かなり落ち込んでいる彼を見ると気の毒に思えてきた。こんなに無口になるのも珍しい。
「あの、大丈夫かな」
「大丈夫じゃないです……」
絞り出すような声が聞こえた。
「学校終わったら探しに行こう。私も一緒に行くから」
私は必死に言葉をかける。時間を空けたら駄目だ。奈落に落ちかけている彼の心の命綱をつなぐには勢いが必要だ。
「もう無いんじゃないですかね」

「簡単に諦めないの。まだ売ってる可能性だって十分あるって。やらない後悔よりもやって後悔」
彼がやっと顔を上げた。
「そうですかね。でも、あなたを付き合わせてしまうのは申し訳ないというか」
「いいよ、どうせ暇だし」
腕を組み、考えている様子だ。
もう一押し必要だろうか、などと考えている間に彼の結論は出た。
「行きます。行きましょう」
心の中でガッツポーズをとった。
「二人で分担しましょう。それぞれの回るルートについてですが」
彼が取り出したノートを中心に作戦会議が始まった。
長い地中の生活を終えたばかりであろう一匹のセミが窓の外で鳴いている。
ロングホームルームがもうすぐ終わる。鞄の中に荷物はつめた。刻一刻と迫るその時を待つ。
学級委員の号令に合わせて席を立った。正面を向きクラスメイトが声を合わせて叫ぶ。
「さようなら！」
その瞬間私と彼は机の上の鞄をひったくるように掴んで、廊下へ向かった。同時に階段を下りる。それぞれの自転車を急いで走らせる。
正門を出る瞬間、私たちは二手に分かれた。
「じゃあ、連絡よろしく！」
「あんまり無理しなくていいですからね！」
漫画の入荷先のことを考えて、ここからは別行動だ。
彼は駅に隣接する大型商業施設の本屋。少し遠いが、入荷している本の母数も多いはずという考察をもとに、可能性が高いと推理した。
私はこのあたりのコンビニを片っ端から回る。男子高校生の人気が高いということで、この高校の周辺のコンビニにも入荷しているだろうという推測だ。
とりあえず最寄りのコンビニに入る。入口の平和ボケしたようなＢＧＭを置き去りにして、漫画コーナーへ走った。漫画の表紙と背表紙は先ほどネットで確認した。目を皿のようにして本棚を探したが見つからなかった。一応店員さんに尋ねてみると、今日の深夜に数冊入荷していたようだが、すでに売り切れてしまっているとのことだった。
そのうち、高校の近くにあるコンビニは回り尽くしたが、お目当ての漫画は売っていなかった。どこのコンビニでも入荷はしているものの、深夜か朝のうちに完売。日付を越えてすぐに購入した人もいれば、通学途中の学生が買っている例も少なくなかったようだ。
水分が欲しくなり、スポーツ飲料を購入する。休憩がてらコンビニの中のイートインスペースでそれを飲んでいると、

スマートフォンにメッセージが届いた。彼からだった。
「すみません、こっちの本屋は完売してました。僕は繁華街の方の大きな書店に行きます。道中のコンビニもチェックしますので」
そうか、無かったか。移動に時間を使ってしまう一種の賭けであったが、駄目だった。
駅から繁華街までと言ったら時間が掛かる。公共交通機関を使えば少しは短くなるが、道中のコンビニに寄るということはおそらく自転車だろう。
頑張っているのは私だけじゃない。
ペットボトルのキャップを閉め、私はコンビニを出た。

依然として自転車をこぐ足が止まることはなかった。気づけばよく知らない道に私はいた。あたりに目を配りながら、ただただ走る。
すると、右手によく注意していなければ見逃してしまいそうな細さの路地が現れた。室外機とツタの這ったブロック塀に挟まれ、近寄りがたい雰囲気を放っていた。しかし、路地の奥には「本」という小さな看板が出ているのが見える。コンビニではないが、個人経営の本屋かもしれない。自転車は何とか通る幅だったので、降りてハンドルを押した。
店の前に立ってみると、そこは古本屋のような店構えだった。出ている軒も薄汚れていて、先ほどの看板もフォントと色使いに古臭さを感じる。僅かな可能性に賭けて店へ入る。
店内は狭く、内装も豪華とは言えなかった。
しかし、目につくのは手書きの丁寧なポップや、本棚に整然と並べられた本。そこには本への愛と、客への心遣いが感じられた。それに加えて新刊も入荷している。古本屋ではなかったようだ。
そのような感想を持ったのも時間にすれば一瞬。小走りで漫画コーナーを探す。本棚の迷路を少し進んで右へ曲がると、書架整理をする女の子がいた。普通に比べて低い身長、肩につかないくらいで切られた髪、琥珀色のフレームの丸メガネ。
「さっちゃん……」
私は声をかけた。
小学校と中学校での同級生だった。私が大切にしている友達の一人。
「あ……、久しぶり」
私たちは距離が近かったわけではない。小学一年生の時に同じクラスになってから仲良くしていた。でも、私が中学で辛かった時期も、いつも変わらない控えめな笑顔で接してくれた。
「さっちゃん何でここに？」
「今、ここでバイトしてる。私の学校バイトＯＫだから、夏の小遣い稼ぎみたいな」
言われてみれば、好きで本屋の棚を整理している客なんていない。さっちゃんは本が好きだったから、天職のようなものだろう。確かに、先ほど見たポップの丸みがかった文字は

さっちゃんらしい字体だ。
「そちらこそ、わざわざこんなところまで、どうしたの？」
「うん、探してる漫画があってさ」
スマートフォンの画面を彼女に向けて、表紙を見せた。
「ああ、この漫画、人気だから小さな本屋さんには入荷してないの。駅の本屋とかに行ったらあるかもしれないけど」
「やっぱりそう簡単には見つからないか。駅ではもう売り切れててね、近くのコンビニ回ったり、繁華街の方の本屋行こうとしたりしてるんだけどねえ」
大袈裟に肩をすくめてみせる。地道に店舗を探すしか手はないのかと、内心落ち込んでいた。
ねえ、とさっちゃんが呟いた。
「こんなに一生懸命探すほど漫画好きなの？」
「いや、この漫画が好きな友達がいてさ」
「へえ、男の子？」
「うん。今分担して探してる」
「そうなんだ」
さっちゃんはあごに手を当てて考えこんでしまった。
そういえばこの本屋は冷房がほとんど効いていない。やはり設備は建物とともに老朽化しているのだろう。こんなところに長時間いて大丈夫なのかと心配したが、さっちゃんは汗一つかいていなかった。
突然顔を上げると、何かを思い出したようにさっちゃんが店の奥へ走っていった。
しばらくして戻ってきた彼女の手には一枚の紙が握られていた。
「これはこの辺りの本屋さん、まとめた地図。蛍光ペンが引いてあるのが、あの漫画も入荷してそうだなっていうお店」
その紙を両手で私に差し出した。
いいの、と目で問うとさっちゃんは大きくうなずいた。
「よかったら使ってね」
「うん、ありがと」
紙に目を落として、本屋の場所を確認していく。
「……何か、雰囲気変わったね」
「え？」
顔を上げると、さっちゃんは少し慌てたようにして、
「別に悪いことじゃないの。むしろ良いことなの。誰かのためにこんなに必死に頑張ってるのは見たことないなって思って」
と言った。
誰かのために頑張る。そうやって言葉にすると立派なことに思えてくるが、そんなに大それたことをやっている自覚はない。
でも、もし全てを自分の中に閉じ込めていた中学生のころと変われたのなら、それは喜ぶべきことだ。
「早く、行った方がいいんじゃない、その子のために」
「これ大切に使うよ。ありがとう、こんなに丁寧に」
「お客さんが本を見つけるお手伝いをするのが私の仕事だか

ら」

さっちゃんはそう言って笑った。小学一年生の時から変わらない、ほっとする笑顔だった。

あれから。

目についたコンビニに入りつつ、あの紙の本屋を片っ端から回っている。

まだ成果無し。

地図上に残された選択肢も残り三つになっていた。

そして先程彼から再びメッセージが届いた。

「書店にもありませんでした。一時間前まであったということでしたが、僕と同じ学校帰りの人がたくさんいたらしいです。もしかしたら駅より先にこっちに来ていれば間に合ったかもしれません。

もう暗いですね。遅い時間までありがとうございました」

帰っていいですよ、と遠回しに言っているのだろうか。

ただ、私を帰らせた後も彼があんなに熱心にやっていた本探しをやめるとは思えない。ここまで何時間も走り回って何の成果もなしというのは私も腑に落ちない。

要するに、帰りたくない。

とはいえ、門限まで時間がないのも事実だ。この時間から三軒はもう行くことができないかもしれない。どこか一つの店舗に、賭けるべきなのか。

この地図には一軒だけ隣町の本屋があった。遠いので後回しにしようと考えていたが、比較的人の流れが少ないのは隣町。あえてそちらに行ってみるのが正解かもしれない。

あそこなら電車を使った方が早いかな。

私はハンドルを駅の方向へ向け、自転車を走らせた。

隣町に着いた頃には空が薄暗くなり、白い無機質な光が点々とついているのが分かる。

地図をあてにしながら来たこともない道を歩く。建物の外壁に大きく本のシルエットを描いたライトがあったので、本屋はほどなく見つかった。

店内はかなり広かった。フロアマップを見てみると、オカルトコーナー、陶芸コーナー、寺社仏閣コーナーなどがあった。かなり幅広いジャンルの本を置いているようだ。

漫画コーナーは二階。入口の右側にあった階段を二段飛ばしで駆け上がる。

二階に着くと、あの、スマートフォンの画面でしか確認したことのなかった表紙が目の前に飛び込んできた。そこは売れ筋の漫画が並べられている特設コーナーで、あれほど必死に探していた漫画が拍子抜けするくらいたくさん並んでいた。

ゆっくりとその本を手に取る。昨日まで名前も知らなかったこの漫画が、今まで探し求めてきたこの世の秘宝のように思える。

とりあえずレジに向かおうと思ったが、ふと思い出したように漫画をもう一冊掴んだ。内容は知らないが良いだろう、

私にだって思い出として一冊くらい。
会計を済ませて外に出ると、いてもたってもいられず彼に電話をした。電話の向こうからは微かに街頭ビジョンの広告のような音が聞こえる。
「あったよ、漫画」
「え！　どこにですか」
今までに聞いたことがないほどの大声だった。思わずスマートフォンを耳から離す。
「隣町にある大きい本屋。結構な数あったよ」
「なるほど、それは思いつかなかったです」
「そう、私も友達に教えてもらって気づいた。明日これは渡すから。もう遅いから今日は帰りな」
「あ、そういえばあなたは何で帰ってないんですか」
「どうせ君は帰らないだろうって思ったから。君だけおいて一人で帰るのは私のプライドが許さない」
私は正直に答えた。
「本当にありがとうございました。この恩は一生忘れませんから。それでは」
電話は切れた。
顔を上げると、私は街が光で彩られていることに気づく。街灯の明かり、店の明かり、家庭の明かりが作り出す夜景は本当にきれいだった。
翌日、自転車をこぐ足は昨日よりも軽かった。額から流れる汗の量は変わらないが、そんなものは気にならない。
晴れ晴れとした気持ちで教室に入る。その瞬間、何かを思い出したような気がした。何か悪い予感が、一瞬だけ。
彼はというと、自分の席に座って、小さなメモに絵を描いていた。宿題を教卓に出したら、漫画を渡そう。
席に着き、引き出しに手を入れたところで私はさっきの予感の正体をはっきりと認知した。昨日の英語のプリントが入っている。昼休みからのあの騒動で、このプリントの存在など忘れてしまっていたのである。
黒板の右端に書かれた日付を見つめた。とりあえず先生に報告はしなければいけないが、何が起こるかは目に見えている。
私は覚悟を決めて席を立つ。友達を助けるために犠牲を払った勇者の姿を見ていてくれ。心の中で彼に話しかける。もっとも提出することを私がすっかり忘れてしまっていただけなのだが。
プリントを持って例の高田先生のもとへ行く。
「すいません、昨日の宿題のプリントなんですが」
「ああ、聞いた聞いた。友達が間違って持って帰っちゃったんでしょ」
何の話だ。
「友達、ですか。誰に聞きましたか、そんなこと」
「誰って、あなたもよく話してる彼よ」
彼って、もしかして。

「それともあれって嘘なの？」
「いや違います。その彼、ちゃんと自分で言いに来たかなと思って」
と先生の言葉に慌ててかぶりを振る。彼の厚意を無駄にしてしまってはまずい。
「そう、ならいいけど。今度からは当日の朝のうちに連絡すること。いいね？」
私は無罪放免となった。
教室に入って、早速彼のもとに行く。
「ありがとう。英語のプリントってあなたが私をかばって」
「昨日はありがとうございました。では、漫画を」
私の言葉は遮られてしまったし、ずいぶん展開が急だ。
言われたとおりにかばんから漫画を取り出す。
「はい、どうぞ」
「うわ、本当に表紙がきれいです。ありがとうございます」
眼鏡越しに見える瞳が輝いている。
「いやいや、良いよこのくらい。最初からちゃんと調べてあそこも候補に入れておけばよかったね」
「当初はこんなに頼るつもりはなかったので。見つけていただいただけで本当に感謝です」
「全然気にしないでね。ほら、こっちだって結果的に英語の宿題は助けてもらう形になっちゃ」
「昨日はありがとうございました。授業始まりますよ」
定期的に言葉をさえぎられる。今日の彼は何だか変だ。
まあ、彼は喜んでくれたようだし良いか。
昨日より少し幸せな今日が始まった。

サイコロは転がる

県立甲南高等学校　一年
九万田心晴

ソレはとても暇だった。毎日毎日適当な人間を見張って、その時の人間界の様子を調べる、そんな同じことの繰り返し。それこそ任されてすぐの時はやる気を持って働いていた。しかし今はそれに飽き飽きしていた。どんな人を見張ってもその人々の多くは今後を心配している。将来のための勉強、老後のために働く。そんな人もいれば、明日の会議大丈夫だろうか、来週のテスト不安だな、なんて考えている人もいた。そしてソレの中に、いたずらを仕掛けたいという好奇心が湧いてきた。ふと、モニターで人間界を見てみると、そこでは人生ゲームが行われていた。

「いいこと考えた」

ソレはそう言って段ボール箱を用意した。

俺は今日で二十歳になった。もう、酒も飲めるようになったし、タバコも吸える。成人は十八歳だったが、この二つができるようになって初めて大人という感じがする。高校を卒業してすぐ、俺は工場で働き始めた。将来どんな仕事をしたい、という夢がなかったからだ。

毎日同じことの繰り返し。俺はとても暇だった。親から誕生日だから一緒に夕食を食べに行こう、と誘われたがなんだか行きたくなかったため断り、俺は一人で住んでいる少しぼろいアパートに向かった。

家に着くと、ドアの前に段ボール箱が一つ置かれていることに気づいた。宛名を見ると俺宛だった。送り主の欄には何も書かれていなかった。恐怖を覚えつつ、自分への荷物なので開けよう、と決心する。部屋に入り、段ボール箱に貼られているガムテープをびりびりと破く。段ボール箱を開けると中には人生ゲームとサイコロが一つずつ入っていた。ついつい童心に帰り、人生ゲームをテーブルの上に広げる。スタート地点に人形を置いた時に俺はあることに気が付いた。それは人生ゲームに人形が一つしか入っていない、ということだ。こんなものでどうやって遊べばいいのだろう。俺には見当もつかなかった。おもむろにサイコロを転がす。出目は五だった。急に携帯電話が鳴り出した。画面には知らない人の電話番号が表示されていた。

「はい、もしもし」

携帯を取る。すると相手が、

「おめでとうございます！　宝くじの一等が当たりました！心当たりはありませんか？」

と、言ってきた。そう言えば先月、同僚に誘われ、一枚宝くじを買っていたはずだ。だが以前、電話で宝くじが当たっ

た、という連絡がくるのは詐欺だと聞いた。
「すみません、そういうのいいんで」
「えぇ!? またとないチャンスですよ!?」
ガチャリ。
相手が何か言っていたが、無視して電話を切る。誕生日に詐欺だなんて俺もついてないな。ふと、テーブルの上に置いた人生ゲームに目をやると、人形がスタート地点から動いていた。しかも、五マス分だけ。俺は触っていないのに。背筋に悪寒が走る。怖いもの見たさで、今、人形がいるマスを見てみた。そこには、詐欺に引っかかり十万円盗られる、と書かれていた。さっきの俺の状況と怖いくらい一致していた。俺は怖くなって、急いで布団を敷いてその日はすぐに寝てしまった。
次の日、テーブルを見るとそこには昨日と変わらず人生ゲームが置かれていた。昨日のことを信じたくなくて、一度サイコロを振る。出目は三だった。すると人形がゆっくりと、だが確実に進んだ。しかも三マス分だけ。俺は恐怖を覚える。そこには財布を拾って喜ばれ、商品券をもらう、と書かれていた。実際にそんなことが起こるわけがないのに。着替えて、菓子パンを口に突っ込み、家を出る。
職場までの道を歩いている途中、道に何かが落ちていることに気が付いた。それは財布だった。なんでこんなところに落ちているのか疑問に思いつつ、交番がないか見渡す。すぐ近くにそれはあった。そこに持って行くことにしよう。交番に向かうとしたその時だった。
「あのー、すみません。ここら辺で財布を見ませんでしたか？」
後ろから急に声をかけられた。もしかしたらこの財布の持ち主だろうか。
「見ましたよ。もしかして持ち主の方ですか？」
「あぁ、はい。多分そうだと思います」
悪い人ではなさそうだが本当にこの人が持ち主なのだろうか？
「あなたが本当の持ち主かどうか確認するためにいくつかの質問をしますね。すべてにしっかりと答えてください」
俺はその人にいくつかの質問をした。その人は俺の質問に正確に答えた。この人が持ち主で間違いないようだ。財布を返すことにしよう。
「疑うようなことをしてすみません。これ、返しますね」
「いえ、世の中物騒ですし、しょうがないですよ。……あの、お礼と言っては何ですが、これ、受け取ってくれませんか？」
そう言ってその人は財布の中から商品券を出した。
「いえ、結構です。俺も今拾っただけなので」
俺は必死で断る。こんなこと、何か見返りを求めてしたことではないし、それにこんなことで商品券をもらうなんて何だか申し訳ないからだ。
「でも、警察に届けた時は、拾った側はもらう権利があるって言うじゃないですか。だから気持ちだけでも受け取ってください」

そう言い込められるとこちらは何もできない。半ば渋々と商品券を受け取る。

「それじゃあ私はこれで」

そう言い残し、その人は去って行った。もらった商品券を見て、さっきの人生ゲームを思い出す。また、人生ゲームで言われた通りになった。恐怖を感じたが、それよりも疑問の方が浮かんだ。もしかするとこれは……。

三日ほど、俺はこの人生ゲームに関してさまざまな実験を行った。例えば、大雨が降り、洗濯物のほとんどが濡れる、と書かれていた日は念のために洗濯物を部屋干ししていたところ、その日は夕立が降った。他にも、先輩からおごってもらえる、と書かれていた日には先輩が夕食に誘ってくれた。しまいには、宝くじが当たる、と書かれていた日にスクラッチくじを買ったら十万円のものが当たった。俺は確信した。この人生ゲームはこれから起きる予定のことを示している、ということに。ということは、これを利用すれば何も不運な目に合わなくて済むのではないか？　それだけでなく、何ならずっと幸福なまま生きていられるのかもしれない。それどころか未来が分かるなら、競馬や、ギャンブルをしても、負けることがなくなり一生働かなくてもよくなるかもしれない。今までのことが馬鹿馬鹿しく感じる。久しぶりに気分が高揚する。これでこのつまらない日々ともおさらばだ。

「アハハハハハハハハハハハ」

自然と笑いが込みあげてくる。

男は一人で笑い続けていた。

「なんだ、つまんないの」

ソレはつぶやいた。ソレはモニターを見て何かを探していた。少し経ったのち、ソレはニヤニヤして、

「次はこの人にしよう」

と言った。

毎朝の習慣である新聞を取りに行ったとき、私はそれに気が付いた。ドアの前に段ボール箱が置かれていたのだ。宛名は私だが送り主が書かれていない。せっかちな誰かが送り主の欄を書く前に送ってしまったのだろうか。とりあえずその荷物と新聞を持って部屋に戻る。

「いったい誰が送ったんだろうねぇ」

そうつぶやくがそれに反応する声はない。

一人娘は結婚を機に三十年以上も前に家を出ていて、夫は二年前に亡くなってしまった。今この家にいるのは私ただ一人。ようやくそのことにも慣れてきた。荷物を開けるとそこには人生ゲームとサイコロが入っていた。

「あれまあ、人生ゲームかい。懐かしいねぇ」

中身のものに驚きつつ広げる。まだ小さい娘と夫と一緒にやったんだっけ。今はもうできないことを寂しく思う。今度娘がきたら一緒にやろうかしら。なんて思いながら荷物を食

卓に置き、今日の新聞を読む。
　この世には明るいニュース、暗いニュース、どちらもあふれている。私は暗いニュースが苦手だ。見ていて心が痛くなるからだが、世間が注目するのは暗いニュースがほとんどだ。少しでも明るいニュースが増えるよう、私は七年前から慈善事業をしている。慈善団体に募金をしたり、こども食堂の手伝いをしたり、小学校で地域の歴史について教えたりなど活動内容は多岐にわたる。夫が亡くなった直後は悲しみのあまり参加できなかったが、ボランティア仲間たちや子供たちの笑顔に救われて今は参加している。誰かを救いたい、と思ってボランティアに参加したのにまさか自分が救われるなんて……。あの時は本当に不思議だった。最近は地元でも暗いニュースを聞くことが以前と比べて減った気がする。しかし、それでも「子どもが交差点で事故に遭いそうになった」や、「いじめが学校で起きている」などの暗いニュースが後を絶たない。もっと明るいニュースであふれるような世の中になったらいいのに……。そんなことを新聞を読みながら考える。もっと私が何かをすることができればいいのに。
　二十分ほど時間をかけて今日の新聞を読む。悲しいニュースを見るのはやはり心が痛む。でもこれが現実なのだ。
「はぁ」
　ため息をつく。たまっていたものが外に出て行ってなんだか少しすっきりとした気分になった。
　今日は何か予定があるわけではない。何をしようかと周りをちらりと見る。先ほど食卓に置いておいた人生ゲームが目に入った。そうだ、人生ゲームを久々にしようかしら。もしかしたら以前やったのはだいぶ前だからルールを忘れているかもしれないし、確認のために一人でしてみましょう。私は人生ゲームに手を伸ばす。中身をよく確認すると中に数人分入っているはずの人形が一つしか入っていなかった。
「これじゃあ遊ぶことができないじゃない」
　私はあきれるようにつぶやいた。でも私は人生ゲームをしたい気分になってしまっていた。どうしたものかと考える。少し考えて、一旦今日はこのまま一人でやって、明日にでも新しい人形を買いに行こう、そういう結論に自分の中で落ち着いた。人形をスタート地点に置いてサイコロを転がす。コロコロサイコロが転がる様子は見ていてなんだかわくわくしてくる。コロ……　コロ……　コロリ。サイコロが止まった。出目を見ると二だった。
「さて、人形をニマス進めて……」
　そう言った瞬間人形が自分から歩き出した。あまりのことに唖然としているとニマス進んだところでぴたりと止まった。信じられない光景に思わず目を疑う。しかし実際に人形は二マス分動いており、それは目をこすっても、何度見ても変わりようのない事実だった。腰が抜けてその場にへたり込む。
「呪われている……」
　思わず口からそんな言葉が出てくる。恐ろしい。怖い。信じられない。そんな感情が噴き出てきて頭の中がぐるぐるす

る。誰かに話したい、そう思ったがこんな話、誰が信じてくれるのだろう。だからと言って片付けようにも触れることさえためらわれる。人形のいるマスを見てみようと思った。だが、そんな勇気はなかったため、見ることはできなかった。

数時間が経った。相変わらず人生ゲームに触れることはできず食卓に置きっぱなしにしてしまっていた。そろそろ昼食の時間だというのに。どうしようかしらと考えているとピンポーンと軽快な音が聞こえた。インターホンを見るとそこにはボランティアも一緒にしている仲のいい近所の方が映っていた。

「はーい」

返事をしてドアを開ける。その方は両手で小ぶりな段ボールを抱えていた。

「こんにちは、今日はどうしたの？」

「お昼時にすまないね。実はさ、娘夫婦からトウモロコシが送られてきたんだよ。あまりにもたくさん送られてきたからさ、近所のみんなにおすそ分けしようと思ってきたんだ」

そう言って彼女は段ボールを開ける。中には数本のトウモロコシが入っていた。そう言えばその方の娘さんは農家に嫁いだと言っていた気がする。

「まあ、美味しそうなトウモロコシ。本当にもらっていいのかしら？」

「いいのよ。これの何倍もの量が送られてきて、旦那と二人では消費しきれなかったから」

「じゃあ、ありがたくいただくわね」

そこで彼女とは別れた。食卓に運ぶと人生ゲームが目に入った。人形がいるマスを見るとご近所さんからおすそ分けをもらえる、と書かれていた。あまりに現実離れした出来事に鳥肌が立つ。こんなピンポイントな出来事が書かれていて、さらにそれが実際に起こるだなんて……。

私はそれから何日かに分けて何度かサイコロを振りなおしてみた。何度やっても人形はひとりでに歩き出し、マスに書いてあることと同じことが起きた。特に目の前で車との接触事故がある、と書かれていた時は怖かった。

その日はちょうどこども食堂の手伝いに行く日だった。夕方、信号のない横断歩道を一人で歩く。すると反対側から子どもが走ってきた。さらにその奥からは向かってくる車があった。ウインカーを出しており、こちら側に曲がってこようとしているようだった。走ってくる子どもは左右の確認をしていない。そのため後方から迫ってくる車の存在に気付いていないようだった。車はスピードを下げようとしているが元々のスピードが速かったのだろう。なかなかスピードは落ちない。

「危ない！」

私は何もできず見過ごすのは避けたかった。こちらに向かってくる子どもの手を握り、引っ張った。子どもは少し重い。しかし私はそんなこと関係なしに力いっぱい引っ張る。子どもを引き寄せてすぐ、車が通過した。子どもは何が起きたか

分かっていないようだった。通過した車から人が降りて私たちに怪我がないかを問う。その子どもはそこでようやく、自分が車にぶつかりそうだったことに気付いたようだ。運転手が去った後に何度もお礼を言っていた。私はお礼を言われたことよりも、一人の子どもを助けられたことに喜びを覚えていた。その時に私は決断した。この人生ゲームの力を人助けのために有効活用しようと。

その後私は何度もサイコロを転がした。誰かを助けられるように、救えるように。変な行動をしてしまうと怪しまれそうなので、あくまで自然に。そうした生活をして一か月が経っただろうか。私の生活は人生ゲームが中心になっていた。外で事件がありそうだから運動と称して外に出たり、周りの人が危険な目に遭いそうだから連絡したりそばに居たり。私はこの生活に満足していた。

ある日の朝、その日は起きた時刻がいつもより一時間遅かった。さあ、サイコロを転がそうかねぇ、そう思いサイコロを手にしたその時だった。

ガシャン！

外で大きな音がした。胸騒ぎがし、外に出てみると隣の家にトラックが突っ込んでいた。最近近所の道路の補修工事をしているトラックだった。門があった場所に頭から突っ込んでおり、そこは残骸でぐちゃぐちゃになってしまっていた。また隣の家の旦那さんが叫んでおり、周りにいたご近所さんが携帯でどこかに連絡をしていた。さらによく見ると赤い血痕が見えた。思わずそこに向かうと、隣の家の奥さんが血を流して倒れていた。手には新聞が握られていたため朝刊を取りに行こうとしてこうなったことがすぐに分かった。もし、私がもっと早く起きていたら、昨日のうちから分かっていたら……。救えなかった罪悪感で胸がいっぱいになる。あぁ、私は何てことをしてしまったのだろう。思わずその場に崩れ落ちた。

「せっかくいつもと違って面白かったのになぁ。あーあ、壊れちゃった」

ソレはモニターを見てぽつりとつぶやいた。その声からは罪の意識などみじんも感じられなかった。

「そろそろこのパターンにも飽きてきたなぁ」

ソレは何事もなかったかのようにモニターをいじる。少しして目を輝かせて、

「次はこうしよう」

と言った。

男の子が一人、夕方の公園にいた。寂しそうな表情でベンチに座っている。周りには誰もいない。他の子はもう帰ったのだろうか。秋になってきたため最近は暗くなる時間が早い。夕日の色がだんだんと赤みが増してきた。

「ねえ、君はうちに帰らないの？」

僕は彼にそう話しかけた。彼は急に僕に声をかけられて驚

いた。しかしすぐにうつむいて、
「うん、帰れないんだ」
と言った。
「どうして帰れないの？」
「お母さんに怒られたんだ。怖くて思わず逃げてきちゃったの。これじゃあもっと怒られちゃうよ」
彼の瞳に大粒の涙がたまる。僕はわざとらしいぐらいにっこりと笑って、
「じゃあ家に帰れるようになるまで僕と一緒に遊ぼうよ」
と言った。彼は心配そうに、
「君は家に帰らなくてもいいの？」
と聞いてくる。彼だってこんな公園で時間をつぶすよりも、早く家に帰った方がいいに決まっているのに。僕は彼を心配させないように嘘をつく。
「僕はまだ家に帰らなくても大丈夫なんだ。ねえねえ、人生ゲームがあるんだけど一緒に遊ばない？」
「い、いいよ」
僕の急な誘いにも彼は乗ってくれた。優しい人だな、彼は。
僕は鞄に入れていた人生ゲームをベンチに広げる。三人がギリギリ座れるぐらいのベンチは窮屈になった。僕は手際よく人生ゲームを準備する。彼は興味津々で僕の様子を見る。
「何色の人形がいい？」
「じゃあ赤で」
「なら僕は青ね。はい、サイコロを振って」
スタート地点に二つの人形を置き、彼にサイコロを渡す。彼の転がしたサイコロは四を示す。
「いーち、にーい、さーん、し」
そう言いながら彼は人形を動かす。マスには友達ができると書かれていた。
「君には友達がいる？」
彼が唐突に問いかけてきた。
「うーん、多分、いない。そう言う君は？」
「いないかもなぁ。僕が友達だと思っててても相手がどう思ってるか分からないし」
「あはは、僕と一緒だ。僕たち友達にならない？」
「ふふっ、いいかもね」
初めて彼の笑った顔を見た。
何度かサイコロを転がした後、僕は彼にこの人生ゲームの秘密を教えた。
「君にだから教えるんだけど、このゲーム、未来が分かるんだ」
これを伝えられたことが嬉しくて思わず口角が上がってしまう。すぐに直したから彼には気づかれなかった。危ない、危ない。彼は真剣な表情で少し考え込む。
「それって本当？」
怪しみながら彼に聞かれる。まあ、すぐには信じられないのが普通だろう。

「本当だよ、僕もそうやって君と会ったんだ。『公園に行けば友達ができる』って人生ゲームに書かれてたから」
　彼にそれを信じてもらうためにでたらめを言う。彼は僕の言葉を聞いて更に考え込んでしまった。五秒もしなかったと思う。彼が口を開いた。
「君はそれで楽しいの？」
「え？」
　一瞬、彼が何を言ったのか分からなかった。今までこんな風に言う人はいなかった。こんな風なことを言うなんて予想もできなかった。これだから子どもは面白い。彼は返答しない僕に更に問いかける。
「何が起きるか分からないからわくわくするんじゃないの？　自分で考えるからおもしろいんじゃないの？　先に分かったらうれしいこともあるけど分からないから楽しいんじゃないの？」
　見かけによらず大人的な意見だと思った。彼は真剣だった表情を緩ませて照れくさそうに言った。
「これ僕の考えみたいだけど、この前お父さんに言われたことなんだ。かっこよかったから使いたかったんだよね。でも、僕もこのことは思ってる。何があるか分からないからわくわくする、ってことは。だってテレビゲームも攻略本があったらすぐに攻略できるけどおもしろくないでしょ？　自分で考えるからおもしろいんじゃん」
　ほんの十分前くらいまでは涙がたまっていた瞳に、光が宿っている。彼は立ち上がって言った。
「君と友達になれたのはすっごくうれしい。でも僕はもうこの人生ゲームはできないや。未来が分かったらつまらないからね」
　いつの間にか薄暗くなってきた公園に誰かを呼ぶ声が響いた。その声は名前の主を探しているようだった。
「お母さんだ。僕もう帰るね」
　彼は言い残し去って行った。

　公園でソレはたたずんでいた。手元には先ほど男の子と遊んだ人生ゲームがある。ソレは感心したようでその場を去って行った。
「分からないから面白い、か」
　ソレのつぶやきは夕闇の中に溶けて行った。

天使の誘い

県立鹿児島中央高等学校　一年
久雅永遠

屋上から椿が落ちてきた。

彼女の細い四肢はあらぬ方向を向き、純白の制服は、彼女から溢れ出す鮮血によって染まっていく。

桜はためらいなく彼女へと花びらをはらはらと落としていく。

生徒達の幾多の悲鳴が響き渡る。

私はその中で呆然と立ち尽くしていた。

聖天使学園（せいあまつかいがくえん）。

名前の通りこの学園は天使に異常な程までに執着している。校舎のあらゆるところに四大天使（ウリエル、ミカエル、ガブリエル、ラファエル）の銅像がある。そして、朝は必ず、神に対してではなく、天使に対して「お祈り」を行う。こんな異端ともとれるようなことをするのはこの学園くらいだ。

そして、この学園には、「屋上から飛び降りると天使になれる」という伝説がある。

誰がそんな御伽噺のような伝説を作ったのかは分からない。でも、この学園にもう一つ、いわくつきの伝説があることをあなたは知っているかしら？

「以上をもちまして、第六十八回、聖天使学園、入学式を終了いたします」

「一同礼。解散してください」

春。出会いと別れの季節とよく言われる。

私と彼女の出会いもまさに春であった。

「ここ……どこ……？」

ここは『聖天使学園』。

生徒・教師の全てが女性の完璧な女の園だ。校舎はどこも白塗りで、令嬢が多く入学してくることから、とても広い。壁も大理石でできていて、装飾はステンドガラスなどが施されており、高級感の塊のようである。入学式が終わって数週間経ったが、私には不慣れなことの連続で、終いには校舎内で迷ってしまった。

お昼休みが終わるまでにまだ時間はあるが、今自分がどこにいるのかさえも分からない。

見慣れない景色が広がる中で、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「どうされました？」

振り向くと、艶のある長い黒髪、切れ長でまつ毛の長い、

儚さを含んだ目元、そして赤みのあるピンク色の唇。
　生徒会長の藍川椿だ。入学式で挨拶をしていた。美人の令嬢がたくさんいる中で、飛び抜けて端正な顔立ちをした人がいるなと思っていたことを思い出した。
「あ、あの、迷ってしまって」
「では案内します。えっと、何年何組ですか？」
「一年ウリエル組です」
「分かりました。ではこちらです」
　藍川さんを前に私は彼女のあとをついていく。
「入学したばかりで大変よね。特にうちの校舎はほかに比べてとても広いし」
「おかげで迷っちゃいました。藍川さんに助けてもらわなかったら今頃どうなっていたのか……」
「ところで、名前を聞いてもいいかしら？」
「あ、はい。白鳥薺（なずな）です」
「薺……いい名前ね」
「祖母がつけてくれたんです。どんな環境でも生きていける薺のように、強い子であってほしいって思いがあるらしくて、私もとても気に入っているんです」
「私も。気に入ったわ、薺さん」
「嬉しいです」
「私あなたともっとお話がしたいわ。放課後時間ありますか」
「は、はい。是非！」
　そこでちょうど教室に着いた。
「あ、ここね。ではまた放課後に。生徒会室へきてくださいね。何かあったら三年ラファエル組に」
「はい。ありがとうございました！　ではまた放課後に」
　藍川さんの背中を見送っているとクラス全員がどわっと集まってきた。
「白鳥さん、『女神様』とお知り合いなの？」
「さっきお話していたわよね!?」
「どんな事お話していたの!?」
　いきなりクラス全員に囲まれ、あらゆる方向から質問が飛んでくる。
「え、えっと、女神様？　て何？」
「白鳥さん知らないの!?　生徒会長、藍川椿さんがそう呼ばれていること。二年生の頃から生徒会長を務めていらっしゃって、才色兼備で皆の憧れの的じゃないの」
　確かに。彼女のあの美貌、そして人当たりの良さ。それは天使を超越する、『女神』と呼ばれても申し分ない程だ。
「それで、何を話していらしたの？」
「あ、えっと」
　クラス中の視線を浴びた私は、尋常ではない圧を感じ、名前のことや、放課後誘われたことは言えなかった。
「校舎内で迷って、道案内してもらっていただけよ」
「なーんだ。びっくりした。てっきり仲良くなったのかと思ったわよー。それに迷うなんて、白鳥さんってドジなところもあるのねっ」

「そ、そうかな？」
咄嗟に嘘をついてしまったが、学園の憧れの的である人から誘われたという優越感が私の口を閉ざしたのかもしれない。
生徒会室へ向かう。
ドアをノックすると、「どうぞ」という返事が返ってきたため、そのままドアを開ける。
「失礼します」
「薺さん。よくきてくれたわ。さ、そこにかけて頂戴」
「ありがとうございます」
だだっ広い部屋の中には、ドラマに出てくるような企業の社長が座る白い椅子、それに合わせた白く広い机。その上には〈生徒会長〉という札が置いてあった。
白色の机と椅子、壁、床。
清廉潔白を重んじるこの学園にふさわしい生徒会室だった。
そこで、私はあるものに目が留まった。
いや、正確には鼻が留まったと言った方が正しい。
私たちの着ている純白の制服とは正反対の、黒々とした三輪の花。
「この花は何ですか」
「あぁ。それは黒百合よ。綺麗でしょう。ずっと前からこの生徒会室には黒百合が飾られているのよ。伝統みたいなものかしらね」
「へぇ。なんだか……惹かれるものがありますね」
一瞬言葉に詰まってしまったのは、その鼻につくような独特な匂いと、すべてを飲み込んでしまいそうな黒さを持つそれを不気味に思ってしまったからだった。
しかし、藍川……いや椿と話すことがあまりにも楽しかったから、どんなことも些細に思えてしまったのだろう、そんなことはすぐに忘れてしまった。
『女神様』なんて呼ばれて神聖視されているようだけれど、彼女はとても気さくな人で、私からしたら女神というより、ただの美少女だ(勿論良い意味で)。
「下校の時刻になりました。生徒の皆さんは――」
「あら、もうそんな時間になってしまっていたのかしら。早いわね」
「あの、とっても楽しかったです！　また椿さんとお話したいです」
「ええ、勿論よ。いつでも生徒会室にきて」
「はい。それでは失礼します。またきますね」
「楽しみにしているわ」
そう言いながら彼女は私に微笑んだ。
彼女の微笑は、本当に『女神』だった。
ドアを閉めてお暇すると、なんだか視線を感じた。
「まあ気のせいか」と思い、そのまま立ち去った。
彼女は気づかなかった。背後からの視線に。

あくる日の朝、登校し自分の机を見ると花瓶が置いてある。飾ってある花を見て、私は戦慄した。
「菊。それに薺……」
まるで私を弔う、いや、弔ってくれるような人がこんなことするはずがない。私を『亡き者』としたい者がいるのだ（なんて古典的ないじめだろう……）。
周りのクラスメートは目を伏せている。昨日のマシンガン攻撃のような質問攻めをしていた人たちとは思えないほどに暗く、重い表情をしていた。
何か知っているのか。それとも関わりたくないのか。
花瓶を見ていると、その下に紙が一枚挟まっていることに気づいた。
『放課後、生徒会室へ。必ず。』
達筆な字であった。それに生徒会室って……。一瞬、椿の顔が浮かんだが、「そんなはずはない」とすぐに考えるのを止めた。

放課後になり、私は生徒会室へ向かった。ノックをすると、
「入りなさい」
少しきつめの声が返ってくる。椿ではないことは確かであるらしく、少しホッとする。
部屋に入ると、少し茶の入った髪を一つに束ね、やや眉を吊り上げた綺麗な少女がいた。
どこかで見たことあるような気がするが、気のせいだろうか。
「きてくれて感謝するわ。ご機嫌いかが？」
「いかが？　じゃないです。今朝のアレ、あなたが置いたのですか」
「え？　あ、ええ」
「どういうつもりであんなことを」
彼女はすっと深呼吸をしてから言った。
「単刀直入に言います。藍川椿に近づかないで」
その時、ふっと私の記憶は彼女を写し出した。
彼女は、生徒会副会長二年の八条蓬（よもぎ）だ。確か入学式で司会をしていた。
「あなた、副会長ですよね。こんなことをしてもいいのですか。バレたらまずいのでは？」
「つ、椿……様を、椿様を守るためですもの」
なぜか彼女は声も体も震えていた。それに『様』って。
「私が椿さんと仲良くしていたって、あなたに何か関係がおありで？」
「も、勿論よ。わ、私は椿……様をこの学園の象徴の一つとして神聖化するつもりなの。あなたのような一般生徒が、庶民が、軽々しく馴れ合うべきではないの！」
興奮しているからだろうか。時々声がうわずっていたり、震えたりしている。
そう言えば、私が椿にクラスまで案内してもらった時、クラスメートが騒いでいろんな話がもみくちゃになっていたが、

その中で、
――「副会長なんか、会長に特に心酔してらっしゃって、会長に近づく者は排除して、会長の神聖さを保とうとしているとか！」――
　彼女の言う通り、私はこの学園の中では庶民の域に近い家柄だ。だからと言って、そんな差別みたいなこと許されるわけがない。
「あなたおかしいわよ。なぜそんなに彼女を」
「お願いよ！　私の言う通りにして！」
　すごい剣幕だ。それに急にお願いだなんて、どういうことなの？
　しかし、この場を収めるために、とりあえず形だけでも飲み込むしかないようだ。
「分かりました。ただ、あんな嫌がらせだけはもう止めてください」
「あ、え、ええ。わかったわ」
　私は彼女の言動に違和感を覚えつつも、その場を後にした。
　そして彼女はまた、視線に気づかなかった。
　翌日、私は椿に再び放課後誘われたが、断った。一旦は約束を守っておかないと、また何か言われそうで面倒だったからだ。
　しかし、嫌がらせはなくならなかった（最初の時のように周りに知らしめるようなものはなくなったが）。翌週になっても続いたものだからさすがに我慢できず、「今度こそ文句を言って止めさせてやる」と彼女の教室、二年ウリエル組に行こうとすると、
「ねぇ、白鳥さん？」
　クラスメートの赤麻（あかそ）に呼び止められた。
　彼女は瞳と同じ深い黒色のボブカットを揺らし、ニコニコと貼り付けたような顔をしている。その顔は、市松人形を連想させた。
「ごめんなさい。後ででもいいかしら。これから行くところがあって」
「副会長のところ？」
「そうだけど。どうしてそれを？」
「悪戯を辞めてもらうための抗議でしょ？」
「どうして知っているの」
「彼女はやってないわ」
「え？　でもあの人が自分でやったって言ったわ」
「八条さん、嘘ついていますもの」
「じゃあ誰がやっているのか、あなた知っているの？」
「ええ、まあ」
「誰なのか教えて！　もううんざりしているのよ！」
「私よ」
「……は？」
「聞こえませんでした？　私ですよ。赤麻。私がやったんで

す」
「何言ってるの？　じ、じゃあ、あなたが犯人だとして、どうして私が八条さんの所に行くってわかるのよ」
「うーん。それは秘密です。天使たちのお導きとでも言っておきましょうか」
「えぇと、あなた私に何か恨みでもあるわけ？」
「いえ、別に何もないですけど」
「じゃあ、益々あなたの意図が分からないわ」
「私はただ……」
その瞬間、彼女は血相を変えて教室を飛び出そうとした。
私は咄嗟にその腕を捕まえる。
「ちょ、ちょっとっ！　どこに……」
「約束があるの。続きはまた明日」
「な、なに言って」
「では」
「あ、ちょっと待っ――」
彼女は私の手を振りほどき、ものすごいスピードで駆けていく。すぐに見失ってしまった。
仕方ない。事のあらましをとりあえず椿に話そうと思い、生徒会室に向かう。
あちこちにあるステンドグラスの窓は夕焼けを反射して私に熱を浴びせる。
はあ。ここのところ災難しかない。唯一の幸運といえば椿と仲良くなれたことだろうか。
それに……蝉の音が忙しくなってきている。
椿と出会ってから日は浅いはずなのに、季節のめぐりが早く感じる。
なんてことを思いながら、廊下を歩いていた時だった。
甲高い悲鳴。
どさっと何かが落ちる音。
な、なに？
廊下や校庭からも沢山の悲鳴が聞こえ始める。
何なのよ。
私は速足で校庭へ向かう。校庭には人だかりができており、それを分け入る。
「ひゅっ」と息を吸い込んだ。
私の目が捉えたもの、それは、赤麻の姿だった。
弁明をしていた口は、最後の呼吸を終えた後のようで半開きになっており、シルクでできた清浄な白い制服に、じわじわと彼女の鮮血が染みこんでいっていた。手足は関節と逆方向を向いており、さっきまで機能していたとは思えない程であった。
遠くから救急車のサイレンが聞こえる。
私はその場にへたり込んでしまった。
赤麻は学校に二度とくることはなかった。
そして、彼女の机には菊の花が置かれた。

「薺さん大丈夫？　体調悪そうだけど。もしかして、この前のあの場に居合わせていたの？」
一週間ほど経ち、学校が再開された。その日の放課後、私は生徒会室にきていた。誰かに話さないと、耐えられなかったのだ。それに、こんな時に頼れるのは、椿しかいなかった。
「実は……」
私は彼女にこの前のことと嫌がらせの一件を話し、椿に泣きついた。
「私、もうどうしたら……。か、彼女、私と話している途中で『約束がある』って。きっとその時屋上にいったんだわ。学校は事を荒立てたくなくて自殺で片付けようとしているけれど、きっと彼女は、彼女は誰かに……」
「もう、考えるのはよしなさい」
椿は私の身体をぐっと引き寄せて抱きしめ、頭を優しく撫でた。
「大丈夫。大丈夫よ。彼女、きっと気がおかしくなっていたのよ。それに、嫌がらせのこと、気づけなくてごめんなさい。怖かったでしょう？」
私は思わずばっと身を起こし、
「椿さんが謝ることないです！」
「でも」
「こうやって、椿さんが慰めてくれたので、少しは元気になったかも」
椿は嬉しそうな顔をして、「よかった」と微笑んだ。
彼女の微笑は以前よりも輝きを放っていた。
私の頭の中には、『女神』の文字が浮かんだ。
椿に慰められ、数か月経ったからか、心がだいぶ軽くなったように感じる。嫌がらせも止まっていた。
あれから頻繁に、私は椿の元を訪ねている。
しかし、私に元の平穏は訪れない、らしい。
「白鳥薺さん、いるかしら」
八条蓬が私の教室を訪れた。
席に戻り、大きな溜息をつく。
――「放課後、二年ウリエル組にきなさい。話さなければならないことがあります」――
何よ今更。嫌がらせの正体は赤麻でした、なんて言うのかしら（赤麻は八条蓬では無いと言っていたけれど、信じられないし）。あの女神のような椿の優しさに救われたから良かったものの、本当にあの時はどうにかなってしまいそうだった。
椿が私を救ってくれたのだ。
そうだ。八条蓬からの話が終わったら、また生徒会室に行こう。椿と話をしよう。そうすれば、きっと嫌なことも忘れられる。忘れさせてくれる。
椿と過ごすであろう時間を糧にして、私は二年ウリエル組

に向かうことにした。

コツコツ……階段を上る度に、音が空間にこだまする。

今日はどこも部活動が無いようで、校舎はしんと静まりかえっている。少し肌寒くなる季節になってきたため、空気が澄み始めていた。

二年ウリエル組は階段を上がって左手にある。

クラスは、ウリエル組・ラファエル組の他にミカエル組とガブリエル組があり、対の力を持つ天使の組同士は、合同授業は禁止されている。なんでも、縁起が悪いだの、互いの力を弱めてしまうだの、いろいろな理由があるらしいが。

教室に着いた。ドアは閉まっている。

「入りなさい」

あの時と同じ声色。八条蓬に違いなかった。

教室の中に入ると、

「ドア、閉めてください」

微かに震えた声で彼女は言った。

彼女の言う通りにドアを閉め、向き直る。

「今日は何の件で――」

「白鳥さん」

「何ですか」

「あなた、赤麻さんとあの日――赤麻さんが亡くなった日、赤麻さんと何か話されました？」

「あ、はい。って、それが何ですか。赤麻さんをそそのかして嫌がらせしたのではないのですか。あなた」

「ちがう」

「え？」

「ちがうの。私ではないの」

「じゃあ誰――」

「椿よ」

「はあ？　何を言っているのですか。椿さんがそんなことするはずないでしょう！　それに彼女は『女神』で――」

「彼女は女神でも何でもない。悪魔よ！」

「あ、悪魔？」

急に椿とかけ離れた言葉が出てきたものだから、間抜けな声が出てしまう。

「あの人は気に入った子を見つけては、嫌がらせをするのが趣味なの。おもちゃのようにね。勿論、直接手を下さない、彼女らしい、人に手を汚させる方法を使って。あなたの場合、赤麻さんを使ったのよ」

「そんなの、そんなのありえない！　だって椿さんは」

「いい加減目を覚まして！　嫌がらせだって、彼女と関わってから始まったでしょう？」

「それは……」

本当だ。でもそれは私と椿の仲を羨ましく思った、八条蓬の仕業だと思っていた。それに、椿は私のことをとても懇意にしてくれていたから、疑う余地なんてなかった。

「嘘、嘘よ、信じないわ」

だって椿は私を受け入れて、心配してくれて、私を抱きしめて「大丈夫」と言って励ましてくれた。
そんな椿が私を……？
「嘘じゃない。私だって、私だって信じたくなかった」
八条蓬は唇を震わせ、目に涙を浮かべていた。
「私も彼女をあの時までは信じていた！」
「あの、時？」
「一年前、私もあなたと同じ境遇にいたのよ。彼女を慕い、憧れ、追いかけて、生徒会にも入ったわ。でも、彼女と関わり始めてから嫌がらせが始まった。あなたのように花瓶を置かれたり、教科書をゴミ箱に捨てられたり。酷い時は、引き出しの中に鳩の死体が入っていたわ。私はいつも、それを椿に相談していた。そして椿はいつも話を聞いて私を励ました。でもね、全部嘘だったのよ。嫌がらせも、私と同じクラスの生徒を駒のようにして毎日毎日。私は椿に言ったわ。なんで、どうして、信じていたのに、と。でも彼女はあの微笑を浮かべてこう言ったのよ。
〝あら、バレてしまったの？　残念だわあ。でもね、あなたの言うことは誰も信じない。この学園での私は、まさに絶対的な存在なのは言うまでもないでしょう？　だって私は皆に慕われる生徒会長で、『女神様』だもの。それにこれは私に課された義務なのよ。そして、これにはあなたも逃げられない。お分かり？〟
その時の彼女の雰囲気は、普段とは違い、狂気的なおぞましいものだった。それから私は彼女が恐ろしくてたまらなくなった。彼女の言動の全てが怖くて怖くて……。きっと椿が赤麻さんを殺したのよ！」
その時、私はやっと彼女がずっと必死に腕を抑え、組んでいた理由が分かった。それと同時に、私は全てを理解した。
「でもそれって、あなただけではないのですか」
「え……？」
「だって椿さんは優しくて美しくて本物の『女神様』ですよ？私が赤麻さんに恨まれることをした覚えはないけれど、椿さんがそんなことするはずないわ」
「あ、あなた私の話聞いていたわよね？」
「勿論です。でも、私は椿さんに友達として心から愛されている自信と確信がある。だから椿さんは私にそんなことをしない、おかしいですか」
私は八条蓬の話を聞いて、一つの結論を出した。それ――八条蓬の話に出てきた人物――は「椿」ではない。椿はそんなことをする人間では無い。だって、『女神様』だから。その説明だけで十分だ。
それに赤麻を飛び降りさせたのが、もし椿だったとしても、きっと彼女は赤麻を救おうとしたのだ。この学校の伝説の通り、『天使』にしたのだ。
「おかしいわよ！　どうして」
「あなたは椿さんに愛されていなかっただけではないのでしょうか。鬱陶しかったのではありませんか」

「そんなわけない！　私と椿は信頼し合う友人で、互いの一番だったのよ！」
「では、嫌がらせはあなたがやっていないとおっしゃるなら、赤麻さんが私を羨ましがってその結果嫌がらせに繋がった、そういうことなのではないかと。椿さんの仕業なんて到底思えません」
　私がそう言い切ると、八条蓬は膝から崩れ落ちた。
「全部、全部事実よ。私がさっき言ったこと。それを信じないの？」
「信じるも何も、私は椿さんの方を信頼していますし」
「――駄目ね。誰も救えないじゃないの。これじゃあ……」
「私は椿さんに救われましたよ？」
「……ごめんなさい」
「何がですか」
「……いえ、もういいわ」
　そう言うとゆっくり八条蓬は教室から出ていった。時計を見ると、下校時刻の刻限が迫っている。椿の所にいきたかったが、話せそうな時間は無い。
　仕方がない、明日にしよう、そう思い私も教室を後にした。
　ひたりと、一粒の水滴が落ちる音が廊下に響く。
　パタパタと誰かが走り去っていった。
　月日はあっという間に過ぎていった。コスモスが風に揺れる季節を過ぎ、牡丹が雪の中の紅一点になる季節を過ぎ、桜が舞い散る季節になった。
　あの日以来、椿はなぜか学校にこなくなった。私は、椿に会いたいという意志さえも伝えられる手段を持っていないことに気づき、絶望した。八条蓬を頼る選択肢は無かった。
　彼女は私を見かけると、一瞬ばつが悪そうな顔をした後、すぐに俯いて速足で去るようになった。
　目の前で椿は絶命している。彼女の優美な身体・容姿は跡形もない。しかし、私にはそれが酷く美しく映った。『女神』が息絶える姿は、まるで天使に誘われるような穏やかさだった。桜は、彼女の別世界への門出を歓迎するかのようであった。
　彼女は意味ありげに一輪ずつ、椿と黒百合を右手に握っていた。
　休校が終わったその日の朝、私は真っ先に屋上へ向かった。「立ち入り禁止」と書かれたテープなんてお構いなしだ。鍵がかかっているのは想定内だったため、予め作っておいた合鍵で扉を開ける。
　さあっと風が吹き抜ける。私を祝福しているのだろうか。
「椿さん」
　縋る気持ちで呼んでみる。
　もう二度と、彼女は戻ってこない。彼女のことを八条蓬は

「悪魔」と言った。でも、少なくとも私にとって彼女は『女神』。それは間違いない。私は天使でも女神でもない、ただの凡人・平民風情だ。せめて、同じ天界にいかなければ、私は彼女を追いかけられない。

屋上の柵を乗り越える。

「私も、天使に」

私の身体は一瞬宙を舞う。

その一瞬、ラファエルと目が合った。

涙が零れる前に、私の身体は重力によってその場に叩きつけられた。

夜、少女が自室のベッドでまどろんでいると、携帯電話の通知がメールの受信を告げた。

送り主は、『女神』だった。

翌朝、少女は静かに生徒会室の扉を開ける。おもむろに生徒会長の机に近づき、鍵のかかった引き出しを開ける。横に細長い、薄い桃色の封筒を取り出し、中身を開いた。

蓬さんへ

まず、このような形で全てを終わらせてしまってごめんなさい。

この手紙を貴方が読んでいる時には私は既に天使になっているのでしょう。この学園の伝説に則って言えば、の話ですが。

私は生徒会長になってから、自らの意に反することばかりしてしまうようになりました。

貴方を次期生徒会長として推薦してしまったこともです。信じられないかもしれませんが、あなたに対して惨い行為を行っていたのは私ではなく、私の中の別の人格だったのです。

まず、この文献を読んでください。

『黒百合の呪い』

聖天使学園に古くから伝わる呪い。

ラファエル組で会長になった者は誰しもこの呪いにかかり、「愛おしい」と思った対象に対して、通常とは真逆の行為――この場合では俗に言う「いじめ」や「嫌がらせ」――を行うようになる。

なお、これは黒百合がラファエル組兼生徒会長になった者の人格を乗っ取って行うため、その行動自体、本質的には本人が行っているとは言えない。

しかし、当人の自我は無い状態でも、黒百合であった記憶は残る。

ただ、困難ではあるが黒百合の支配から抜ける手段が無い訳ではない。

だが、その具体的な方法がある訳ではない。そのため、偶発的な事象が起こらない限りは、有り得ない。

この呪いは、「聖天使学園の屋上から飛び降りると天使にな

れる」と同時に生まれた呪いである。

〈起源〉

昔、ある代の生徒会長が同じ学園の女生徒に恋をし、二人は一度結ばれた。しかし、その高貴な家柄や、それによる許嫁問題、そして、美しく聡明な生徒会長を憧れとしていた他の女生徒からの相手生徒への凄惨ないじめで、二人は引き裂かれた。

相手生徒はその壮絶ないじめに耐え切れず、屋上から飛び降りて自殺を図った。

それを知った生徒会長もまた、後を追うように屋上から飛び降りて亡くなった。

その後、二人は神の導きによって天使となり、永遠の愛と神への忠誠を誓った、と言われているが、根拠となったものは、その二人の女生徒が亡くなった場所で発見された正体不明の羽のみだという。

しかし現在、その羽の所在は不明となっている。

それから生徒会室ではその生徒会長が生前から好きだと公言していた「黒百合」を飾ることになった。彼女たちの弔いのために。

しかし、その黒百合に乗り移ったその生徒会長の遺恨は、自分と彼女を悲劇へと向かわせたこの学園を、生徒を許さなかった。

この学園で友愛でも恋愛でも愛し合うことを、封じたのだ。

特に生徒会長はその的になりやすい。そのためか「呪い」と呼ばれるまで発展してしまったのだと思われる。

しかし、黒百合自体に惹かれてしまう者も、勿論少数だが存在する。

その場合、黒百合はその者たちを利用し、対象に対して危害を加えることが多い。

この文献の通り、私は黒百合の呪いに、生徒会長になった二年ラファエル組に在籍していた時から支配されていたのです。

なぜ自我を乗っ取られていた私がそのことに気づいたのか。引き金となったのは、赤麻さんを死なせてしまったことでした。

彼女は黒百合と屋上で落ち合う約束をしていました。

彼女もまた、黒百合に惹かれる一人で、黒百合はそんな彼女を今までで一番上手く手駒として扱えていたつもりだったのです。

でも、赤麻さんは暴走してしまいました。彼女は薺さんに手駒であることを話してしまったのです。黒百合の許可なしに。黒百合は激怒し、感情をコントロールできなくなり、あのような凶行に走ってしまいました。

黒百合が、赤麻さんを殺めてしまったという事実に気づいたことによって、私の自我が顔を出せる隙間がようやくできたのです。

そこからはいろいろと調べたわ。さっきの文献は、何代か

前の生徒会長がうまく支配を抜けられたようで、資料をまとめてくださっていたの。
私は調べるほど、自分がしでかした事の重大さに気づき始めました。
もう罪の意識とこの学園の縛りに耐えられなくなったの。
薺さんにはあなたから、
「酷いことをしてごめんなさい。私は、あなたに慕われるような人間ではないの。私を追いかけるのはもう止めなさい。あなたには、その名前の通り、強い人になって欲しい。私のことは忘れて、あなたは、あなた自身でいて」
と伝えて。
蓬さん、あなたをこの呪いに絡ませてしまって、巻き込んでしまって、本当にごめんなさい。
あなたは自分を忘れちゃだめよ。
あなたを心から愛しているわ。

椿

少女は泣いた。
五月蠅いと耳が訴えていると自覚したとき、彼女は初めて自分が声を上げて泣いていることに気づいた。
藍川椿がいた生徒会室でその場に崩れ落ち、言葉にならない声を上げて、赤ん坊のように涙を、声を、枯れるまで零した。
恐れ、それでも愛した人、救いたかった人、その全てを失ったことに痛哭し、絶望した。

聖天使学園新年度始業式。校長の挨拶はいつも通り長い。
「――今年度から、多数要望のあった学年のバッジを配布します。えぇと、一年生は赤色、二年生は縁取りが黒の白色、三年生は――」

「蓬さん、生徒会長就任おめでとうございます。何組でしたか」
「――三年ラファエル組よ」
微笑を浮かべながら、言う。彼女の瞳には一つの輝きさえ、無い。
胸元のスペードのバッジには黒い輝きが宿っていた。

ダ・ハ・コンツェ

県立鹿児島工業高等学校　一年
南　優衣香

寒い。夏の中旬だというのに。今は夜なのか。時間の感覚があやしいし、腹が減った。喉もかれている。脱水で体がだるい。決して清潔とは言えない麻布の上に体を横たえ、おさまることのない空腹と苦痛にただただ耐えていた。

耐え難い我慢の終わりが一旦訪れる。僕を呼ぶ、大酒飲みと喫煙者特有のだみ声が聞こえたのだ。留守から戻ったみたいだ。じっとしているより、苦痛は紛れた。

呼ばれた僕は横たえていた身をなんとか動かす。真新しい体中のアザが床に擦れて痛い。関節という関節の悲鳴が聞こえる気がした。すぐに起き上がらなければ、またアザが模様を連ねてしまう。でも、思うようには動かない。体は限界だった。すぐそこに見慣れた赤毛が月明かりに照らされ、かすかに見えた。僕の心臓と心がびくりとはねた。まずい。早く起き上がらなければ、あの太い腕がまた僕をぶつ。

しかし、僕の心配は珍しくも外れた。僕をぶつ前にむこうが口を開いたのだ。赤毛を持つだみ声は真っ直ぐに僕を見ず、言った。

「ぼうず、いつもごめんなァ」

僕は戦慄した。恐怖とも言える悪寒が背中から首筋にかけて電気のように走った。こいつが謝罪の言葉を口にするなんて初めてのことだった。

右手に古ぼけた黒鞄。僕の祖父が生きていた頃使っていた、学生鞄だ。その間から紙の束が見える。左手には、刃物。

「ち……？」

かすかな月明かりを頼りに、それでもはっきり見えた。重い体をどうにか反らせ、さらに見てみると、手にも顔にもべっとりとそれが付いていた。だみ声は、その巨体ですすり泣いていた。

五里霧中である。全身の痛みを忘れ去り、北のボロ屋で僕は、これからのことに怯えていた。

このあとまもなくだみ声は逃げるように荷をまとめて小屋を去り、かわりに上等な絹服に身を包んだ男女三人が小屋へやってきた。哀れむように見られていたことは、幼いながらも感づいていた。言葉は分からなかったけれど、僕は素直にその弱りきった体を抱えられ、小屋をあとにした。

男は狭いじめりとした路地を大股に進んでいた。詐欺師のこの男は、先日、若い青年から五十万ネガほど金をだまし取った。

仕事が上手く行った男は、歓喜していた。

「よ、し。おまわりはきてないな。今回の依頼人は自殺して

死んじゃったけど、まあ僕に金が入ればそれでいいんだよねー」

口角を吊り上げ、笑う。この一件で人が死んでいる。間接的ではあるものの人を殺したのは初めてだった。ターゲットを自殺に追いこんだのは他でもない、この男だ。

警察は今回の事件でさらにこの男を血眼になって追いかけている。若くして警察お墨付きの詐欺師。しかも今回は人が死んでいるので、警察はなんとしても尻尾をつかみたいことであろう。

今いるここらの地域はかなり昔に戦地となり、敵国が軍事侵攻を開始する上での通り道となった。敵対している国同士の国境沿いに位置していたためである。時間がたっても復興されずに、半ば政府からほったらかされた地域だ。

さびれた住宅街に出た。時が止まったかのように家々は黒く横たわっている。

屋根の瓦がとび、壁の塗装もはがれてすすでまっくろになっている。中には家の原型をとどめないものもある。その中でもかろうじて、きれいに残っている洋館の前へきた。

男はすすで汚れた目の前の扉を三回ノックする。五分ほどしてようやく中から人が出てきた。背の高い老人だった。

男も背が高かったが、それ以上だった。ツルツルとしたたまご頭。背が高い分、手足が長い。老人にもかかわらず、曲がるためしのない腰。歳の割に姿勢がいい。その色白な顔には深いシワが刻まれていた。

老人は男に目を留めた。老人の顔に、驚愕といった表情が浮かび上がる。大きな目がさらに開かれ、なにかを探るかのようにじろじろと男を見る。その目先の大半は、男の赤毛だった。

そんなことに、男はまるで気づいていない。男はただ、気味が悪いと思っていた。

「……若いもんがここを利用するとは。オレの商売もこっちの業界じゃ広く知られたものだな」

老人がぽつりと言った。それを聞いた男は赤毛の髪をかき上げて、得意そうにニヤついた。

老人は首を振り、ふう、とため息を一つ、男を洋館へと入れた。

洋館の中へ入ると、外が古い割に館内は案外きれいにされていた。患者は男を含め、三人とかなり少ない。男以外の二人のうち一人は眉間から鼻背、鼻翼にかけてガーゼが当てられ、またもう一人は顔の左エラからあご、右エラにかけてテーピングがされていた。

男は診察室、ではなく診聴室と汚い字で書きなおされた部屋へ案内された。小さな部屋だ。医学の分厚い本やら、医療関連の資料やらが机上に散らかっている。

もちろん、床にも本や何やらが置いてあり、足の踏み場がない。そこを器用に避けながら、老人は部屋の奥にある丸椅子にたどり着いた。ゆったりと座り、足を組む。その手前にあしの錆びた丸椅子があったので、男は座った。何度か床の

資料を踏んづけてしまった。
「お前さんが何をしたのか聞こう」
老人が問いかけた。男は口をひらき、語りだした。
「僕はネットで捕まえた青年をターゲットに金を稼いだ。それがその子、そのまま泣き寝入りで自殺しちゃったんだよ。だって貧しかったのに借金してまで僕の売りつける商品を買ったんだもの」
それをさも楽しそうに男は語り、
「でさ、僕って結構有名じゃん？」と続けた。
「ポリ公をまくにしても、この顔だと商売がやりにくい。僕はやつらに顔が知られているからね。なあ、逃げ延びるために、頼まれてくれるか？」
老人はゆっくりと首をまわした。太い枝を折ったような音がした。
「整形師を続けて何十年。お前さんほど若い犯罪者はいまだ訪れた試しはない」
ゆったりと首をまわして、老医師はつぶやいた。
とても悲しそうな顔だった。まるで何かを、思い出すように。対して男は、まるで影を塗ったような暗い微笑を浮かべていた。
長い年月の中で犯罪者たちは逃げ延びるために、この老医師に整形手術を頼んできた。
「犯罪者整形師」
老医師が始め、彼しかいない政府非公認の「犯罪者のための」整形師である。
男は用意された部屋のベッドにダイブした。手術は明日の朝だ。男は鼻と、目を変える。それも、一日ではできないので、しばらくここにとどまることになりそうだ。金はヤミ金から払うことにした。
「ん……？」
顔を上げると、目の前の壁に何かが彫られていた。そのキズを男は指でなぞる。かなり古いものらしい。
「あ……！」
男は勢いよく体を起こした。引っ掻いたような文字はこの地域の文字ではなかった。無論、この地域の者に書けやしないし、読めもしないはずだ。しかし、男は知っていた。
「ユーズリの文字だ……」
ユーズリとは、この地域よりはるか北に住んでいる民族たちのことである。
かつて『父』に教わった、その文字を男は見つめた。
昔、戦争があったとき。この洋館がある地域は明らかに火の海となったはずだ。
先ほど、看護師に聞いたが、ここはもともとさる富豪の屋敷であったようで、家の造りが他と違い、丈夫な分、かなり大きい。だからなのか、こんなにもここの洋館は異常にきれいな形を保ち、残っていた。
この国の敗戦から時が経つに連れ、ここらの地域は政府か

ら捨てられた。敵国の軍事侵略が進んで、この小さな地域にかける余裕はなかったのだ。そしてやがて、犯罪者たちの巣窟となった。

洋館の医療器具は、老医師がかつてやっていた病院から壊れていないものを運んだそうだ。

次の日の夕時。鼻翼縮小手術をおえた男は館内のロビーのソファでうたた寝をしていた。痛みはひいておらず、笑うと皮膚がつっぱってさらに痛い。

鼻だけではそんなに顔は変わらないようで、昨日と違和感はあまりない。

警察に面が割れていないとは、犯罪者にとってなんとも都合のよい状況であることだろうか。しかも、整形を「してもらう」ということほどうまい話はない。警察から逃げ延びて自由に生きる他に、この男は何を望むだろうか。いや、逃げ延びる他に何も望みはしないだろう。

たとえ、誰にもこの男が誰なのか分かってもらえなくなったとしても、男にはなんら支障はない。悲しむ人はいない。むしろ好都合である。そして、金さえあればそれでいいのだから。

あの壁に、男の故郷ユーズリの文字が刻んであった。あの文字はユーズリの者でないと書けない。つまり彫ったのはユーズリの人間だ。

「ダ・ハ・コンツェ」

男は部屋で見た文字を流れるように言葉として反芻した。

愛しい人、親友、身内に使うユーズリの言葉だ。「愛している」、「大切」。そのような意味がたくさん込められている。ふと、『父』には一度も言われたことがないな、と思いながら、自分に虫酸が走る。

あの生活環境下で言えるものか、と。男は、言われること自体に期待もしていなかった。自分で手一杯のなか、他人にまで気にかけて、「愛している」と口にするなんて、人生に余裕のある奴らのセリフだろう。果たして彼を父と呼んでいいのか、男には分からなかった。朝、起きては殴られる。蹴られてぶたれて、親子らしいことは何一つなかった気がするからだ。いや、なかった。母が生きていた頃も『父』との交流は少なかった。

「そもそも、僕は愛されてなどいなかっただろう」

あいつが生き延びるためには、自分は邪魔な存在。それだけだったのだ。それでも捨てなかったのは、肩身の狭苦しい日々蓄積されて行くものを、自分より弱いもの、つまり息子にぶつけて、束の間の快感を得るためにすぎない。

あの小屋はまだあるだろうか。ここからはるか北、ユーズリのスラム街に建つ小屋。血まみれのあいつ、だみ声、つまり『父』が帰ってきたボロ小屋。あいつが出て行ったあと、男は保護という形で引き取られた。上等な絹服に身を包んだ彼らは、児童保護施設の役人だった。親が育児放棄し、スラム街に放置された子供を引き取っているのだ。犯罪者の子供。

表面上は天涯孤独の可哀想な存在として手厚く育てられた。しかし一方で、施設の人間から一定の距離を置かれていたと思う。男の身内が殺人鬼であることを嫌悪し、心の内では恐れ、皆見えないバリアを、自立もできていない小さな子供に対して張っていた。

『父』を失うかわりに、男は衣食住を得た。暴力から解放された。いつまでも愛情は知れなかったが。

しかし、とくにあの頃は、ユーズリ人の迫害が酷く、彼らはろくな仕事にも就けなくて金もなかった。男はその現実を社会に出て目のあたりにした。ことさら自分の人種で差別をされた。

唯一、その迫害から逃れ、誰とも悟られず稼げる仕事があった。幼い頭をいっぱしに使って考えついたのは。

詐欺だったのだ。

「ダ・ハ・コンツェ、か……ふ。意外と覚えてる」

自然と苦笑がもれ、皮膚がつっぱって痛い。痛さに顔をしかめて男は再びまぶたをとじた。今日は疲れた。

同刻夕時。老医師は奥の部屋で資料やらカルテやらに目を通していた。昔に、今回と同じく赤毛の男がここを訪ねてきたことがある。

「あいつを殺って、生活のために金を手に入れて。だけどっ、後悔が頭の中で渦巻いて……だから人生をやり直すために死にたい。けど、俺はまだ死ねない」

赤毛の男が言った。強盗殺人を働いたようだ。赤く腫れたまぶたが、夜中泣き続けたことを物語っていて、見るのが辛かったのを覚えている。ひどくやつれており、衣服に赤茶げたシミが点々としていた。さては事件を起こしてそのままここへきたか。シミは血と見た。殺人の類だな。よほど急いでいたのか、衣服からむき出しの腕や脚に擦り傷がたくさんあった。この大男、森の中を突っ切ってきたのだ。

「俺はまだ、逃げなくてはいけない。逃げ延びるために、顔を変えてほしいんだ」

そのまなざしは痛いほど哀れだった。

「逃げ延びるために、頼まれてくれないか」

殺人鬼ともあろうものが、深々と頭を下げ、しまいには膝を折って這いつくばった。しばらく顔を上げなかったのは、老医師の返事を待っていたからだろう。

「彼はまだ、生きているのかな」

部屋での仕事を済ませ、老医師はソファに腰掛けた。ふと、うたた寝をする目の前の赤毛の男を見た。

老医師は、ロビーの手術前に必ず犯罪者たちに何を犯したのかを聞き、ある程度の生い立ちも聞く。それでも深掘りすることはなかった。そう、深く聞くものではない。それは分かっていた。彼らの事情を一つも把握せず、おもむろに手術を開始するのは、老医師の中の人情が拒絶した。

あの赤毛の客は、与えられた部屋のベッドの上でうずくまっていた。その背中ににじんでいたのは、きっと後悔だった。
整形をした後、彼はここから西の港町に向かうようだった。職を見つけたのだと言っていた。去り際に彼は言った。
「レイキリ・センザ・ダ・ハ・コンツェ？」
その言葉を聞き、老医師は驚きつつ、答えた。
「ええ、もちろん」
その後の消息は知らない。まだやることが残っているから、死ねないと言ったのだろう。やらねば死ねないと言うほどの用事は終わったのだろうか。どちらにせよ、人道を外れぬ真っ当な職であったのなら、感慨無量だ。彼が言ったように、『彼』が言ったように、『彼』が殺した貴族にも大切な人がいたのだ。

若い赤毛の男が全ての手術を終え、洋館を出て行く日がきた。老医師は男に問いかけた。
「さっき言ってたお前のその保護施設の金は払い終わったのか？　その保護施設は、後からになって今までの食事代やらなんやら、金を請求してくるらしいが」
男は思い出したというように言った。
「うわ、それさ善意の裏返しというかなんというか、聞いたとき呆れたよ僕。まあ、愛情や優しさの一つ一つがどこか上辺で、居心地の悪いところだった。でもあそこは僕のただ一つの帰るところ、帰れるところなのは変わらないんだけど」
ふう、とため息を一つ。これでも一応、命つないでもらった身だけどさ、なんて言っている。
「だけどね、食費、衣服代、その他生活費の請求額が全部０ネガだったんだ」
それを聞いて老医師はハッとしたのだった。
『彼』が、なんのために生き急いでいたのかを理解した。目の前のこの男は、やっぱり金を払う必要はなくて、もともとタダだったのかも、なんてぼやいているが。
老医師の心境は露知らず、男は口を開いた。
「それはそうと、僕も聞きたいことがあるんだけど、いい？」
顔が近づく。最初に会ったときと顔がだいぶ変わった男に老医師は物悲しさを覚える。
「あなたはなぜ、この仕事をやっているんだ？」
興味で目が光を帯びているようで、老医師は男に若さを感じた。
仕事のきっかけ、その質問に老医師は仰天した。別にこの男が知っても意味はない。しばらく沈黙が続いた。下を向いていた老医師はようやく顔を上げる。すると真っ直ぐに赤毛の男が老医師を見ていたのだ。
……やはり似ている。
「はは。ごめん、言いたくないなら、僕も無理に聞きたくない」
ついで、にかっと笑って男は言った。

「ありがとう」
そんな若い男は西の港町へ向かうそうだった。男は手を振ったあと、歩き出す。
生きていれば彼らは会うことであろう。顔は違えど、その赤毛は変わらない。やはり『彼』にとってはただ一人の愛しい身内だったのだ。『彼』は捕まるのを覚悟して、息子の保護施設へ金を送っていたに違いない。ちゃんと、働いて手に入れた真っ当な金を。もしも殺人の末に盗んだ金を整形代にあてることが最初から目的だったのだとしたら、赤毛の大男が起こした事件はあの息子の為に、あったのかもしれない。安定した生活を息子に与えるために。犯罪者の父親が家から逃げ出して、そこへ取り残されたところを保護してもらえるように。父親から、解放してあげるために。
たとえ、やるべきことが終わったとしてもかつての赤毛の客が生きていて欲しいと老人は願った。
「イレイ・ゼザンクェッティダ・ハ・コンツェ」
願わくば……昔の赤毛の客とその息子が会える日を。
あの日、印象的だった赤毛の客。彼が去り際に放った懐かしい言葉。それを老医師はあの部屋の壁に彫ることにした。思い入れのある、部屋だった。『彼』のことを、覚えておきたくて残した。
「どうしょうもない、やっても仕方のなかった犯罪もこの世にはある。どうしてそうなったのか、そうなってしまったのは仕方のないことだったという場合もある。しかし、犯罪なんてやるもんじゃない。やってはいけない。しかし、それを肯定し、犯罪者に荷担しているこの仕事が、間違いだとは思わない」
今日も誰かが色んな事情を掲げ、逃げまわっていることであろう。もしかしたら、誰かに顔を変えてもらって。そんな都合のいい場所を、逃げ道を、老医師はつくった。ここから彼らがどう進むのかもまた、見ものなのだ。老医師は決して、患者にまた犯罪を繰り返して欲しいとは思っていなかった。それでも、生きるために必要ならば仕方のないことだとも思う。
なぜ、ここが存在しているのかを。老医師以外は誰も知らない。知る必要はないのだ。
老医師は男を見送り、静かに洋館へ戻って行った。

ZERO

県立川内高等学校　二年
山口陽生

「こちら第八アジト、応答願う」
「こちらエリア二十七。帝国軍は現在も我々に対して攻撃を続行中。弾薬も残り半分を切りました」
「了解。今からヘリでそちらに運びます」
「どのくらいかかりますか？」
「急いでも三十五分ぐらいです。大丈夫ですか？」
「大丈夫です。お願いします」
「了解。健闘を祈る」
　僕は無線を切った。あと三十五分……自分にそう言い聞かせて銃弾を放った。
　僕たちは今、奪われた第六アジトを奪還する為に侵略者－もとい帝国軍と戦っている。こちらの軍勢は約三十人で旧式のマシンガンとそれぞれの持つ武器で戦っている。しかし敵は二百人弱で最新型のビームガンとマシンガンで狙ってくる。敵の銃弾は仲間を一人、二人…と貫いていく。
「大丈夫か？」
「う…う…」
　隣で戦っていた仲間が命を落とした。悔しい。悔し過ぎる。何故、神は我々に味方をしてくれないのだろう…そう思いながら再び銃口を敵に向けた時、
「ここか。うるさいクズ共が喚く所は」
　まさか、ＰＡＳ装着者!?
　パワードアーマースーツ、略してＰＡＳ。帝国軍が開発した人間装着型殺戮兵器。これを装着することで生身の十倍以上といわれる力で敵をねじ伏せてしまう。まさしく人間が生み出した醜さそのものだ。
「クズ共、今すぐ銃を降ろして手を上げて出てこい。骨だけはお仲間さん達に返してやるよ」
　僕たちは黙殺した。
「脅せばいけると思ったけどダメか…しかたなねぇ…装着」
　酷い捨てゼリフを吐いて左腕に巻いているブレスレットを引っ張って装着した。頭に鋭い角、両腕には切れ味抜群の短剣。重そうだけど動きやすいアーマー。これはＰＡＳ七号機だ。見るのは二回目だが恐怖で鳥肌が立ってしまう。
「どこにいるんだ…出てこいよ」
　そう言いながら七号機は辺りを見回している。僕たちは息を潜めて隠れている。しかし、
「見つけた」
　仲間の一人が見つかってしまった。片手で首を掴み、締めている。

「や、やめてくれ」
「うるさいんだよ、黙れ」
仲間が地面に叩きつけられた。全身傷だらけになっている。僕は助けなければと銃を向けようとするが恐怖で体が動かない。七号機は再び首を掴み、
「じゃあ、ね」
子どもが葉っぱを木の枝に刺すようにお腹に短剣を突き刺し、抜いてから首を離した。仲間は立ち上がることは無かった。
「貴様！」
僕は怒りのあまり立ち上がって七号機に向かって連射した。
「お前、いい度胸だな」
ゆっくり近づいてくる。もうダメだ。死んでしまう。そう思った時、背後から飛んできた一発の銃弾が、七号機に命中した。その直後、後ろからバイクがバッタのように飛んできて七号機を轢き飛ばした。
「いてて、お前は……誰だ」
バイクの主は降りてピストルを七号機に向けながら近づいていった。
「お前に名乗る必要などない。今すぐ帰れ」
「そうか、邪魔だから死ね！」
「ならばお前を倒す。装着」
するとバイクの主は革ジャンの中に隠れたベルトのレバーを左から右に倒し、装着した。灰色と銀色のボディに血が染み付いている。ゴツいアーマーの右肩には尖った装甲が付けられている。
「ふぅん、やってやろうか、ボロアーマー野郎！」
七号機はパンチを繰り出すがビクともしない。
「嘘だろ」
「よそ見するなよ」
隙をついてバイクの主は七号機の頭を殴った。七号機はさっきの仲間のように吹き飛ばされた。
「コノヤロー！」
七号機は両腕の短剣を向け、バイクの主に向かって突撃した。
「剣には剣だ。装着交換」
ベルトに小さいビデオテープのようなものを差し込むと騎士風のアーマーを身につけた。右手には大きな剣を持っている。突撃してくる七号機に剣を突き刺した。
「う……」
装着解除された七号機は苦しんでいる。
「これで終わりだ」
そう言って七号機のブレスレットを刺して破壊した。そして何の躊躇もなく首を刺し、ゆっくり引き抜いた。剣にはトマトジュースより真っ赤な血がついている。その光景を見た他の帝国軍兵士は一目散に逃げていった。
「ありがとうございます。お名前は何ですか？」
「ああ、名前は……知らない方がいいだろ」

「え、何でですか？」
「知らない方が幸せだろ？　じゃあな」
「え、ちょっと待っ……」
バイクの主はどこかに行ってしまった。
その後ヘリが到着し、弾薬を降ろす時にふと思い出した。あの姿、アーマーを状況に替えて戦うスタイル。そしてバイク。そう、謎の多いＰＡＳ零号機、通称ＺＥＲＯだ。

そう遠くない未来、日本はシクレア帝国に侵略されていた。シクレア帝国は突然、世界侵略を宣言。その最後の地が日本となった。政府は最初は抵抗していたが政府内の裏切り、シクレア帝国軍のＰＡＳ本格導入などによって壊滅状態に陥り、侵略開始から二年後、降伏した。しかし、それに反発する一部の政府官僚や自衛隊隊員、多くの国民が立ち上がり結成されたのが復光団。それぞれからシクレア帝国軍を日本から追い出す為に出来ることを能力に応じて戦う組織だ。

「龍陽、こっちの荷物を地下の倉庫に運んでくれない？」
「分かりました。すぐ行きます」
僕の名前は桜坂龍陽。二十歳だ。第十一アジト所属の歩兵部隊隊員兼力仕事係だ。
「隊長、これで全部ですか？」
「ああ、ありがとう。お礼にやるよ」
「ありがとうございます」

僕は壁に背中を預けてコーヒー缶の蓋を開けた。そして一口飲む。ブラックだから苦い。もう一口飲む。やっぱり苦い。少し曇っている空を見ながらふと思う。ＺＥＲＯは一体何者なんだろ。アジトの仲間達に聞いても知る者は誰もいなかった。分かっているのは声が渋い。それだけだ。彼も帝国軍と戦っているけど復光団に所属していないのはどうしてだろ。そして何故ＰＡＳ零号機を持っているのだろう。謎が深まるばかりだ。ふとコーヒー缶を振ると、もう空になっていた。近くのゴミ箱にコーヒー缶を投げ捨て、大きく背伸びをした瞬間、
「隊員総員に連絡、第四アジトーＣ地区が襲撃された。今から応援に向かうので至急、準備してくれ」
片耳に付けているイヤホンから指令が下った。
「了解」
僕は大急ぎで準備して、仲間達と共に戦場へ向かった。

「マスター。いつもの」
俺は馴染みの喫茶店に入ると、カウンター席の端に座った。
「どうぞ」
注文したものが届いた。いつものコーヒー。横には小さいコップにミルクが入っている。一口飲む。やはり苦い。ミルクを入れスプーンでカラカラと音を立てて混ぜて飲む。ミルクの甘さが苦味を和らげる。一息つくと、天井のもう回らないファンを見ながら考える。出会いたくなかったが出会って

しまった。そして声を掛けられた。俺は一人で戦うと決めたんだ。あの連中と関わる必要はない。むしろ関わったらあの連中が可哀想だ。俺に関わった人間は不幸になる。だから関わらない。しかしあの男は何か違う。いつもは話しかけられても無視するが反応してしまった。あと少しで名前を言ってしまうところだった。何でだろ。脳裏にある人の笑顔が出てくる。もしかすると……その時、脳が何かを感じた。誰かが帝国軍に襲われている。助けないと。中途半端にコーヒーを残して、路地裏に隠していたバイクに跨がり、感じた方へ走らせた。

僕たちがC地区に近づいた頃は第一ラインは突破されていたが、まだ建物には侵入されていない。

「こちら第四アジト―C地区。挟み撃ちでいけますか？」

「こちら第十一アジト応援部隊。大丈夫です。いけます」

乗っているトラックに搭載しているビームキャノン砲からビームを放った。帝国軍に大ダメージを与えることができた。そのままトラックから降りてマシンガンを撃ちまくっていく。よし、もうすぐでいける。そう甘く考えいると、

「負け犬ども…調子に乗りやがって、装着！」

帝国軍の一人が装着した。胸に大きな大砲、両足にはガトリング砲を装備している。これはＰＡＳ五号機だ。

「おりゃー！」

一心不乱にガトリングの弾を放っている。仲間達が倒れていく。負けずにマシンガンで連射するが薬莢がコロンコロンと下に落ちていくだけでビクともしない。

「これで終わりだ」

大砲にエネルギーを溜めている。諦めかけた時、ふと思った。大砲の砲口を狙って撃てば封じ込めるのではないか。僕はすぐにトラックに乗り、備え付けのビーム砲を五号機の砲口に合わせて、

「いけ――！」

ビームを砲口に発射した。見事命中し、砲口を破壊することに成功した。

「中のエネルギーが……」

五号機は中のエネルギーを放出させることが出来ずに爆発した。この爆発で多くの帝国軍の兵士が巻き添えになり戦死した。それと同時にC地区の建物が崩れかけた。

急いで瓦礫をどかして中にいる人達を救助する。

「大丈夫ですか？」

一人一人声をかけ、怪我がないか確認しながら、自分の身のことも考えている。

「助けて……誰か……」

向こうから声が聞こえる。駆けつけると自分と同年ぐらいの男が瓦礫に埋もれている。

「今から助けますから待ってください！」

重い瓦礫を必死にどかして手を差し伸べると男は少しずつ這い出てきた。

「ありがとうございます。あと彼女を……」
彼が言いかけた時、建物がゴゴゴゴゴと大きな音を立てた。ヒビが入っていく。
「早く逃げましょう！」
「いや、彼女が」
「いいから早く！」
彼とい一緒に逃げようとしたその時、
「見捨てるのか、バカ野郎！」
怒鳴り声がした。前を向くと零号機が走ってきた。
「何してるんですか!?」
「そんなこと言ってないで助けろよ。その人の彼女を！」
よく耳を傾けると、
「う……う……」
うめき声が聞こえる。声がするところの瓦礫を動かすと自分と同年ぐらいの女の人が傷だらけで倒れていた。二人で瓦礫を動かして救助した。急いで避難して命は守られた。
「さっきはありがとうございました」
「礼はいい。よく聞け。こういう場面では自分の命より他人の命を優先しろ。もし男の人だけ助かっていたらその人が悲しみだけでは言い表わせない感情に一生陥る。愛する人を失うことがどんだけキツイか分かっているのか」
そう言って零号機は装着解除せず帰っていった。僕はハッとした。そう、あの日のことを思い出させるぐらい。

シクレア帝国侵略から約一年後の夏、まだ日本政府が降伏していない時、僕は幸せの絶頂にいた。
「お誕生日おめでとう！」
「ありがとう」
「これ、誕生日プレゼント。開けてごらん」
袋を開けると中にはずっと欲しかったとあるロボットアニメの完成品フィギュアが入っていた。
「これめっちゃ欲しかったやつだ！　ありがとうお父さん、お母さん」
「いいのよ。息子の喜んでいる顔を見るだけで幸せだから」
「ちょっと待ってよ、お姉ちゃんには？　これ私が買ってきたのよ！」
「ごめんごめん、お姉ちゃんもありがとう」
『も』って何よ、私が一番龍くんのこと見ていたんだからね！」
どっと笑い声が響く。
「龍ももう十七か～将来はどうするのか？」
「うん～調理師かなぁ？」
「龍くん、お料理するの好きだもんね」
「うん。だから今度専門学校の見学行ってくるよ」
「私ついていくよ。お父さん達忙しいでしょ」
「ああ、お願いするよ。けど、お前らは小さい頃からずっと仲良しだな」
「いやいや～それほどでも」
「お父さん、今日地下室で寝ていい？」

「いいけど何で？」
「落ち着くから」
それから両親と姉に「おやすみ」と告げて地下室に布団を敷いて寝た。

翌朝起きて、一階に上がると、
「何があったんだ」
そこには両親がゾンビ映画に出てくるような人のように血だらけで倒れてる姿だった。
「大丈夫！？　しっかりして！」
声をかけるが反応しない。母の胸に手をあてるが、鼓動は止まっていた。父にも同じようにしようとしたとき、
「う……」
「しっかりして、お父さん！」
「ああ、大丈夫だ。」
しかし、父のパジャマは真っ赤な血に染まっていた。
「ぅっ」
父が吐血した。そしてそのまま倒れてしまった。
「父さん！」
父は息を切らしながら僕に話しかけた。
「龍、お前がまたこんな状況にあったら逃げるなよ。そして他人を守ってあげなよ」
そう言って父は死んだ。涙が溢れ出した。その時、姉がいないことに初めて気づいた。
「お姉ちゃん、どこいるの!?」
家中で叫ぶがどこにもいない。恐る恐る姉の部屋に入ったがいなかった。それが分かった瞬間、赤ん坊のように叫びながら泣いた。今、僕は一人なんだ。けど姉はどこかで生きている。そう思い聞かせると自然に泣き止んだ。

二日後、急に姉からＬＩＮＥが来た。それを開いた瞬間、僕は絶句した。送られてきた映像は姉が人としての尊厳を失う過程をありのままに映したものだった。姉が嫌と言ってもそれは止まらない。そして映像の最後を飾った言葉は、「龍陽って…誰？　それよりこの人達といる方が楽しいや」
ショックのあまり僕はスマホを外に投げ捨て、姉の部屋に火をつけて姉の名前を叫びながら家を飛び出し、無我夢中で走り続けた。そのあと復光団の人に拾われて今ここにいる。

僕は今日のようなことは二度と起こさせない。そう決心し、再び建物の中に入っていった。

俺は夢を見てる。あの平和な時代の頃の思い出が蘇る。幸せだなぁと思った瞬間目覚める。そして現実に戻った時が一番嫌いで好きだ。生きている。そう感じることが一番の幸せになってしまったのはいつからだろう。もしかするとあの日からかも知れない。

俺は大学卒業後、消防団に所属しながら、市役所で働いていた。大きな事件が起きない日々に少し飽きたりもしたが楽しく過ごしていた。そんなある日、

「修哉くんいる～？」

「は～い、え、何で睦美がここに？　大学で工学部の先生してるんじゃないの？」

「そうだけどね、今はＰＥＡＣＥって会社に出向してるの」

「ＰＥＡＣＥって確か兵器作ってる会社だよね？　何してるの？」

「何って新しい兵器の開発をしてるのよ。それでさ、今度ここに実験施設を兼ねた研究所を作るのよ。それで被験者探してるんだけど、なってみない？」

「何で俺なの？　全国から集めることできるじゃん」

「極秘裏に進められてるからムリなのよ。それで体力あって筋肉モリモリの人が近くにいないかぁ～って考えて思い出したのがアンタだったのよ。だからお願い！　お給料今の仕事の七倍出すから！」

睦美は俺の唯一の幼馴染と言っていい存在だ。そして俺の初恋の相手でもある。そんな相手の頼みを断ることは出来なかった。

「いいよ」

「ホントに！　じゃあ明日、ここに来て！」

そして俺は仕事を辞め、ＰＥＡＣＥの研究員として働き始めた。彼女に案内され研究室に入ると、そこにはダイビングスーツとロボットを合わせたようなデザインのパワードスーツが飾られていた。

「何これ？」

「これはパワードアーマースーツ、通称ＰＡＳ。最先端の技術で作られたパワードスーツだよ」

「これを兵器にするのは危なくない？」

「大丈夫。私はこれを災害の時に役立てる為につくっただけだから。とりあえず腰についてる箱みたいなのを外してくれない？」

俺は言われたとおりに外すと一瞬でパワードスーツが箱の中に収納された。

「スゲェ」

「これを自分の腰につけて」

腰につけると自動でベルト帯がでてきて巻き付いた。

「そして『装着！』って言ってレバーを左から右に倒して」

「装着！」

そう叫んでレバーを倒すとさっき飾られていたパワードスーツが身体を包んだ。意外と重い。あまりの重さに耐えられず、その場に倒れた。

「大丈夫？」

「ああ、ぐはぁ！」

血を吐いてしまった。身体中が痛い。

「い、痛い、ぐはぁ！」

また血を吐いた瞬間、俺の意識は途切れた。
「大丈夫？　修！」
目を覚ますと、そこには涙目になって俺を見ている睦美の姿があった。
「うぅ…ここは、どこ？」
「実験中にＰＡＳの重さと副作用で倒れて病院に運ばれたのよ。」
「そうか」
彼女は俺の手を握って話した。
「この仕事危険だし、命を落とす可能性もあるけど続けられる？　無理しないでよ」
俺は迷わず答えた。
「続けるよ。もう役所辞めちゃったからね」
嘘をついてしまった。本当は命を落とすのは怖いし、さっきのも本当に死ぬかと思った。けどこんなことを言ってしまったのはなぜだろう。彼女の顔を見ながらそう思った。そのモヤモヤした気持ちを残したまま退院し、ＰＡＳの仕事に戻った。

あの日から二か月後――。
「新しいメイン研究員が来る？」
「そう。今まで私と修だけがメイン研究員だったけど人手が足りないからね」
「へぇ」

研究室のドアを叩く音がした。扉を開けると紳士的な佇まいをした人が立っていた。
「こんにちは。私は犀川肇。新しく赴任したメイン研究員です。よろしくお願いいたします」
「こちらこそよろしく。それでは施設の中を案内します。修はここに残ってて」
「ああ」
それから二人は談笑しながら研究室を後にした。その様子を見て俺は心のどこかでモヤモヤした気持ちがした。
机にほお杖をついて待っていると睦美が戻ってきた。
「犀川さんは？」
「犀川は所長に挨拶に行ってるよ」
「そうか」
この時、俺は何故か不思議な安堵感を得た。ふと彼女を見る。上品な雰囲気が漂っている薄い茶髪の艶のあるポニーテール。ポニーテールで隠れていた美しいうなじが見え、少し色気が出ている。ぱっちりとした目、美しいピンク色の唇、二次元キャラのような整った顔。目線と下に向けるとすらりとした長い足にモデルのような肉付きをした体。それを隠す白衣がさらに彼女の魅力を引き立てる。俺は彼女を直視することが出来なくなった。

その帰り、たまたま会った小学校時代からの友人と居酒屋で呑んだ。お互いの近況報告や昔懐かしい思い出話を咲かせ

ながら俺はつい話してしまった。
「あのさ」
「どうしたの？」
「最近さ、睦美といるとどうにもモヤモヤしてしまうことが多いんだよね」
「どんな時に？」
「う～ん、睦美が他の知らない男と一緒にいたり話していたりするのを見たりしたときかなぁ。それを見ると時々仕事にも支障をきたす時があるんだよね」
「なるほど、それは恋だよ」
「恋？」
「そう、恋だよ。他の男と一緒にいるのを見てモヤモヤするのは自分と彼女の間に他の男がいるのが許せないからだよ」
「そうか、どうすれば治るの？」
「自分から告白して付き合っちゃえばいいんだよ」
「告白か……けど、な～んか出来ないんだよ」
「まだあの時のことを引きずっているのか」
小学生の時、睦美が転校してきて、僕は小学生らしからぬ彼女の美貌に惚れてお友達になろうと話した。彼女はすぐにＯＫをしてくれて、それから一緒に秘密基地を作ったり、鬼ごっこをしたりして学校の内外を問わず遊んだ。しかし時が過ぎるにつれて彼女に対して恋心を抱いてしまい、思い切って秘密基地で告白したが、
「ごめんね。無理。けどお友達なら続けていいよ」
それから睦美との距離は離れていき、中学に進学する頃には彼女の存在さえ忘れかけていた。
「けどよ、そんな過去のトラウマを恐れて告白しないよりも、今の自分の彼女に対する気持ちを彼女にぶつけた方が気分スッキリするよ」
「そうか、分かった。俺、明日告白するよ」
「その意気だ。頑張れよ」

次の日、
「飲みに行こうって修から誘ってくるって珍しいね」
「たまにはね」
「てか、何か企んでいるでしょ」
「そ、そんなこと、な、ないよ」
「慌ててんじゃん。いいよ。仕事終わったら他の人も連れて行こうか」
彼女が言うと、俺は嫉妬心全開で返した。
「いや、二人でじっくり話したいんだ」
「そうなの？　分かった。二人で行きましょ」
そして俺は定時で帰れるよう仕事のスピードをいつもの一・五倍で進め、どうにか終わらせることができた。
「それじゃ、行こうか」
「うん」
俺は彼女を海沿いのビアガーデンに連れて行った。
「ビアガーデンとか結構いいセンスしてるじゃん」

「そう？　ありがとう」
「とりあえず乾杯しようか」
「うん」
「乾杯」
　それからビールを飲みながら絶品料理に舌鼓を打った。そして少しお酒の酔いが回りかけたときに俺は勇気をだして言った。
「話があるんだ」
「何？」
「最近、睦美が他の男といるのを見ると凄くモヤモヤするんだ」
「ふむ」
「それで考えたんだ。これは嫉妬だなと」
「ふむふむ」
「その嫉妬の原因も考えてたんだ」
「それで？」
「・・・・俺は君のことが好きなんだ」
　そして俺は席を立ち、恥という言葉を知らない人が出すような大声を出した。
「俺は君のことが好きだ。大好きだ。大好きだ。俺と、つ、付き合ってくれませんか！」
「え・・・・え？　つ、付き合ってくれ？」
「そうだ。俺は君のことが好きだ。好きだ。大好きだー！」
「ちょ、ちょっと声がデカいって。その、ホントに私のことが、す、好きなの？」
「ああ、そうだよ」
　俺は自信満々の顔で答えた。
「はぁ～　し、仕方ないわね。その、あ、あの。つ、付き合ってあげるよ。私もちょっと修のこと、き、気になってたし」
「あ、ありがと！」
　俺は嬉しさのあまり、彼女に抱きついた。
「ちょ、ちょっと、ビックリするじゃない！　もう」

　こうして俺たちは付き合い始めた。しかし、意外な問題が起きてしまった。それは彼女との距離感だ。今までは幼馴染の延長戦の友達のような感覚だったが、恋人となるとお互い意識をしてしまい、いつも微妙な空気になってしまう。そんなことで悩むことが増えたある日、
「今度の休みさ、い、一緒に、で、デートし、しない？」
　この時、俺は返事を躊躇ってしまった。
「早く返事してよ～」
　彼女がネコのように甘える感じで左腕を掴んだ。横目で見ると涙目になっていた。
「分かった。行こ。どこ行きたい？」
「実はね、もう決まってるの。修も好きそうなところだよ」

　そしてデートの日、俺は藍色のデニムに白色の半袖Tシャツ、水色のスニーカーというなんともいえない恰好で集合場

所の駅前広場の噴水の前でドキドキしながら待っていた。すると、
「おまたせ～」
ウェーブのかかった髪に白色のワンピースという夏らしい恰好で走りながら彼女がやってきた。俺にとってあまりにもどストライクすぎる見た目だ。
「ごめん、メイクに時間かけすぎて遅れちゃった」
「べ、別にかまわないけど。そ、それよりその格好、か、可愛いね」
「ありがと。それじゃ行こ」
それから俺たちは電車に乗って大きな街に向かった。車内では向かい合って座ったが、お互い視線も会話も交わすことなく着いてしまった。
「これからどこ行くの？」
「とりあえずついてきて」
駅から十分ほど歩いて着いたのはオシャレなラーメン屋だ。
「デートなのにラーメン屋でいいの？」
「だって修ラーメン好きじゃん。好きな人に好きなもの食べさせてあげたいの」
彼女はニッコリと笑った。その笑顔に胸がドキッとした俺は照れながらラーメン屋に入った。
流石、俺の彼女が選んだラーメン屋だ。俺の好きなポイントを的確についたラーメンだった。
「ふぅ。おいしかった」
「俺もおいしかったよ。よく俺が魚介系醤油ラーメンが好きだと分かったね」
「伊達に修の彼女やってませんから」
それから俺たちはゲーセンに行ってクレーンゲームをしたり、カラオケでお互いの好きな曲を歌ったり、パンケーキ食べたり、ウインドウショッピングしたりした。彼女といると俺は胸がドキッとした。
その帰り道、
「今日は楽しかったね」
彼女は「そうだね」と言って俺の肩に頭を預けた。その瞬間また胸がドキッとした。その時、俺は思った。恋人ってこういう距離感でいいんだ。日常のちょっとしたことでドキッてすることができる距離感で。
それから俺たちはちょうどいい距離感で付き合い始めた。
いろんな所に出かけたり、お互いの家に泊まりに行ったり。長期休暇が出たら旅行にもいった。そして心だけではなく身体も繋がった。そうして愛を少しずつ育んでいった。それと同時にＰＡＳの開発も順調に進み、ようやく実用化しても問題ないレベルまで到達した。
「修、あ～んして、あ～ん」
「人前じゃ恥ずかしいよ～」
「え～いいじゃん」
「はぁ～仕方ないな～」

「随分仲がいいですね。お二人さん」
「お疲れ様です。犀川さん」
「そういえば来週ですね、発表会」
「そうですね。発表レポート早く完成させないと」
「そう焦らずに。気持ちを落ち着かせてください」
「そう言われても、実は赤ちゃんがお腹の中にいるんです。だから開発も落ち着かないですよ」
「そうですか。おめでとうございます。それでは」
俺はこの時何か嫌な予感がした。

発表会前夜、
「手を上げろ」
怪しいスーツの集団が研究室に入ってきた。俺と睦美は手を上げて反撃の意思は無いと示した途端、タオルで押さえつけられて倒れてしまった。
「う、う……ここは、どこ？」
俺は地べたに寝ころがされ、横を向くと睦美が倒れていた。
「睦美！　大丈夫か！」
駆け寄ろうとするとガラス張りの壁に遮られ、跳ね返された。
「うぅ…修!?」
睦美も駆け寄ろうとするがダメだった。
「すまないねぇ、うちの部下達が」
「犀川、どうしてこんなことする！」

そこには犀川が嘲笑う姿があった。
「この企画自体、私が立ち上げたものだ。しかし私には才能が少しばかり足りなかったようでね。だから工学の天才、睦美を呼んで開発させて、その発表は私がする事で、まるで私が作ったように見せる。だから今睦美は用済みだ」
「何で私だけなの？」
「彼には働いてもらわないとね。シクレア帝国の下僕として。元々私が日本に来た目的は日本の技術で我が国の兵器を開発することだからね。ということで睦美、ありがとう。そしてじゃあね」
犀川は壁についてるボタンを押した。睦美の部屋を毒ガスが少しずつ満たしていく。睦美が倒れた。
「大丈夫か、睦美！」
「ごめんね、修。こんなことに巻き込んでしまって」
「ううん、睦美は悪くない。こんなに愛しあえたから」
「最後にキスしよ」
俺たちは壁越しのキスをしようとした。しかし壁に辿り着く前に彼女はまた倒れてしまった。
「睦美！」
「修……生き……て」
俺にそう言って睦美は死んだ。
「睦美」
「最後の別れは済んだね。さぁ、シクレア帝国へ旅立とうじゃないか」

「断る。睦美を返せ」
「お断りだ」
「ならば実力行使だ。装着」
俺はこの時自分の意思で装着し、ガラスを割った。弾の集中砲火を浴びるがどうでもいい。そのまま睦美を横抱きで連れて帰った。
そして火葬する前、睦美の服を脱がせていると一枚のメモが落ちた。そこにはこう書いてあった。
『過去に別れを告げてこそ人は強くなる。
これがＺＥＲＯを強くする方法。その場所は……』
その場所はとは一体、あれからもう何年も経つけど分からない。そして俺は未だに過去に囚われている。

ある日、俺が裏路地を歩いていると、
「貴様、ＺＥＲＯだな」
「何か用か？」
「貴様を殺す。装着」
これは……一号機。
「だったらこっちも、装着」
ひたすらパンチとキックを交互に繰り出して戦うがいつものように圧倒できない。むしろ押されている。
「これで終わりだ」
渾身の一発を決められてしまって、装着解除されてしまった。
「ぐふっ」
その場で俺は倒れてしまった。

ある日、僕は命令でアジト近くの路地裏で何か異変がないか見回っていた。すると人が血を流して倒れていた。
「大丈夫ですか？」
声をかけると
「う」
と反応した。危ないのですぐに近くの空き家に入った。とりあえず寝かせると腰のところにベルトがついている。これはもしかしてＺＥＲＯ？
「う、ううん」
起きた。
「お前、見たなベルトを」
「はい。すいません。あなたがＺＥＲＯだっんですね」
「こんな形でバレるとは恥ずかしい」
僕は意を決して言った。
「お願いです。仲間になってください」
「断る」
「本当にお願いします」
「嫌だ。断る」
「だから本当に……」
「断るって何度も言ってるだろ！　黙れ！」
彼は怒り、治療していない左腕を押さえながら出ていった。

その時、何かが彼のポケットから落ちてきた。
「メモ？」

それから数日後、僕はまた見回りに出かけていた。
「何もなさそうだな…」
そう呟いてアジトに帰ろうとした時、後ろから銃弾が飛んできた。振り向くと帝国軍の兵士がこちらに銃を向けていた。そのまま銃撃戦になりお互いに弾を撃ち合う。しかし、すぐに弾が切れてしまった。どうしよう。もうダメかもしれない。そんなバカな考えが浮かんだその時、
「装着」
兵士の後ろからＺＥＲＯが現れ、一発チョップをお見舞いして倒した。
「あ、ありがとうございます」
「ああ」
「お願いです、仲間に」
「断る」
「なんで嫌なんですか!?　教えてください」
「教えてたくないんだよ。話したくないだよ」
「だったら僕が先にこれまでほとんどの仲間に言ってなかったことを言いますから教えてください！」
そして僕は両親を殺され、姉を誘拐された日のことを喋った。何も包み隠さず。しかし、彼は「そうか」としか言わなかった。

「なんで仲間になることを拒否するんですか！　シクレア帝国を追い出すという目的は一緒なのに」
「お、俺は一人で戦う方が好きだからだ」
その声はなにか強がってるような気がした。
「ＺＥＲＯさん、なんで強がっているんですか！」
「お、俺は強がってはいない」
「嘘つけ！　声が震えてる」
「う……」
「強がる必要なんてありません。変なプライドなんていりません。話してください。なんでそんなに嫌がるんですか？」
「俺は昔、復光団の団長として日々戦っていた。しかし、ある時、シクレア帝国軍の基地を奇襲攻撃する作戦に団を率いて出たんだ。しかし、作戦は失敗。しかも俺の独断行動と統制ミスで俺以外みんな死んでしまった。その時から俺は一人で戦うって決めたんだ。みんなに迷惑かけないために」
「そうですか。けどいつまで過去に縛られ続けるんですか。もうやめましょうよ」
俺はこの言葉を聞いて涙を流した。すると彼が抱きついてきた。
「いいんですよ。泣いて。意地を張らないでいいんですよ。助け合っていきましょう」
「ああ」
心置きなく泣いた後、ふとポケットに手と突っ込むとあの

メモがないことに気づいた。
「メ、メモがない」
「もしかしてこれですか？」
彼が胸ポケットから取り出したのはまさしく探していたメモだった。
「ああ、ありがとう」
メモの文面を読み直すと俺は分かってしまった。『その場所』が。そして俺はいつもの喫茶店の近くに止めてるバイクへ向かった。
「ＺＥＲＯさん、どこいくんですか!?」
「知りたいんならついてこい」
そして彼を乗せて『その場所』へ走り出した
俺は近くの草むらにバイクを停めて、睦美と一緒に作った秘密基地、もとい『その場所』に向かった。
『『その場所』ってどこなんですか？」
「もうすぐさ」
草むらの中を進むと、コンクリートブロックが二つ置かれていた。それをどかし、掘り返すと一斗缶のような形をしたお菓子の入れ物が出てきた。それを開けると中には手紙とフォームキーが入っていた。
そして俺は手紙を一語一句読んだ。
『修君へ
いつも研究手伝ってくれてありがとう。修君は頑張り屋さんで真面目で可愛い子だよ。けど、一度失敗するとそれをずっと引きずるタイプだからそこが治ればもっといいよ。もし私に何かがあっていなくなったら、手を差し伸べる人がいたらちゃんと応じてね。それができるようになったらこれ使っていいからね。
最後に一言、大好き大好き大好き大好き大好き大好き大好き
あなたの彼女より』
俺は涙を流した。この手紙をここに置いたのは睦美が俺の本性を知っていたからかもしれない。
「君、ありがとよ」
俺はフォームキーをベルトにさして「装着！」と叫び変身した。
「ＺＥＲＯさん、カッコいいです」
「ありがとよ。あ、俺の名前は朝香修哉だ。よろしく」
「こちらこそよろしく。僕の名前は桜木龍陽だよ」
「そうか、いい名前だな」
俺らは笑い合った。
これからも戦いは続くだろう。しかし、勝ってみせる。俺は一人じゃない。仲間がいる。この仲間たちとともにこの国を取り返してやる。そう決心し、再びバイクを走らせた。

レッド・リミテッド

県立加治木高等学校　二年
島　嵜　香　帆

ピピピピ、ピピピピ。

目覚まし時計は今日もいつもと同じ時間に、けたたましく鳴り響く。覚醒しきらない頭を無理やり起こして時刻を確認した。

「マジか」

表示されている数字は、俺に一限の遅刻が確定したことを告げた。ああまたやってしまったと頭を抱えながらも、仕方がないと起き上がって朝食を食べる。トースト、コーヒー、ヨーグルト。そんなおしゃれなものが用意できるわけもなく、ただシリアルに牛乳を注いで頬張った。高校時代あれほど夢見た華やかできらきらした大学生活。そんなの俺にできるわけがないし、憧れって憧れで終わるもんだよな。なんて、諦めるにはまだ早いだろうか。なんとか二限には間に合いそうだと、男子大学生の最低限の身なりを整えて支度を終える。

日常に入り込んだ異変に気づいたのは、駅までの道のりを歩いている時だった。通り過ぎてゆく人の頭上に、何かが見える。あれは……数字か？

42、7、3805、661、視界に飛び込んでくるそれらは全てバラバラで統一性がなく、情報量の多さに眩暈がした。数字の下になにかがあるが、小さすぎてよく見えなかった。電車に乗れば更に数字は増える。一人に一つの数字が例外なく頭の上に浮いていた。全て黒字で、ある程度時間が経つと減っていく。どんな規則性で、どんな条件で数字が減っていくのかは分からない。でも確実に変わっていた。

目の前がぐるぐると回る。襲ってくる吐き気に耐えるように目を閉じると少し症状が和らいだ気がして、そのまま大学最寄りの駅まで目を閉じ続けた。今日一日くらい現実から目を背けても許されるはずだ。……そもそも、これは現実だろうか？　疑問に思った俺は漫画の主人公よろしく、頬をつねった。

「は、痛い」

これ、一回やってみたかったんだよな。思いっきりつねった頬がヒリヒリする。冷たい風に晒されるせいで、じんとした痛みが更に広がった。じゃあ、やはりこれは夢じゃないのか。

「成沢、何ぼーっとしてんだよ」

「お、木下おはよう」

友人の木下が俺の肩をたたく。振り返ると、木下の頭上にも数字が見えた。67、これは一体何の数字なんだ？

どんなに不安を抱こうが時間は俺を待ってはくれない。仕方がないので講義に集中しようと、切り替えるために軽く頭

を振った。講義を受ける学生たちにもそれぞれの数字が見えた。もちろん、教授の頭上にも。５１１。
少しずつ動く時計の秒針と、減っていく数字を見ながらだらだらと過ごした。やる気と希望に満ち溢れて入学したあの日がとうの昔のことのように思えてならない。中だるみってやつだろう。あ、あの人、あくびした瞬間に数字が減ったな。いや、あの人はあくびしてるけど数字は減ってない。数が減る法則性を考えながら、講義終了の合図を聞いた。
講義室から出てスマホを取り出したところで、ちょうど侑から連絡が来る。
「明日はいつものカフェで待ち合わせでいい？」
自然と緩む頬を右手で押さえて、スタンプを返した。よくわからないキャラクターが手で大きな丸を作りながら、トークルームの中で左右に揺れ動いていた。
大学での一日を終え家に帰ろうと校門を出たところで、突然見知らぬ人に話しかけられた。上から下まで真っ黒な衣服に身を包んだ長身のその男は不思議なオーラを纏っており、この世界に馴染んでいるとは到底言い難かった。何もしなくても、その場にいるだけで目立ってしまいそうな風貌だ。
「数字であふれた世界には慣れましたか？」
「は？」
「大丈夫。しばらくすれば慣れます。吐き気がしたら目を閉じる、あなたの解決方法は的確です。そのまま進めてください」
「そのまま進めてください？」
「素敵な能力を、授かりましたね」
「ちょっ、待てっ！」
男は不気味な微笑みを浮かべ、次の瞬間にはもう視界から消えていた。周りを見渡しても何処にもいない。突然目の前から人が消えたというのに、驚いているのは俺だけのようだった。まさか本物の怪異の類かとも思ったが、馬鹿馬鹿しくなってそれ以上考えるのは止めにした。あまりに現実的でなかったからだ。
翌日。約束の時間にいつものカフェに行くと、侑は既に席で待っていた。侑はいつも穏やかで優しくて、おひさまみたいな匂いがする。
「ごめん、遅くなった」
「今きたとこ」
「何か食べる？」
「朝ご飯まだなんだけど、食べてもいい？」
「ん、いいよ」
ずっと友人であった侑とは、交際を始めてから大体一年と半年が経つ。テンポよく続く会話が心地よくて、俺の心を軽くしてくれる、そんなところが好きだ。
「今日のために俺は一週間頑張ったんだよ」
そう言うと侑は嬉しそうに笑っていた。表情をくしゃっと和らげて笑うその癖が、俺にだけの特別に見えて可愛かった。

ふと、頭上の数字を見上げる。
「5……？」
「ご？　どうかした？」
「いや、なんでもない」
今まで見た中で、最も小さな数。みんなの数が減っていくところを見ると、0になると何か起こるのだろうか。侑にもうすぐ、一体何が？
頭の中で思考がぐるぐると音を立てて巡っていく。頭と体が切り離されたようで、手が震えて呼吸が浅くなった。
『吐き気がしたら目を閉じる、あなたの解決方法は的確です』
あの奇妙な男の声がした。悔しいが今はそれに縋るしかない。そっと目を閉じると、頭の中がクリアになる。深く息を吸うと新鮮な空気に肺が膨らむ。大丈夫。俺は現実世界を生きている。何も変わったことなんてないんだ。だってほら、目の前の侑はいつも通り可愛いだろ。
「功拓？」
「あぁ、ごめん」
「功拓も何か頼む？」
「じゃあ、紅茶で」
「すみませーん！」
侑が店員さんを呼ぶ。やってきた女性の頭上の数字は、6359。どうしてこんなに数にばらつきがあるんだ？
届けられたサンドイッチセットを頬張る侑を見ながら、俺は紅茶を啜る。今日くらい考えるのはやめにしよう。折角のデートなのだから。
「あ、すみません……」
侑を駅まで送り届けた帰り、侑のことばかり考えていたせいで人とぶつかってしまった。そのはずみに落ちたスマホを拾い上げる。画面が割れていないことを確認し、ほっと胸を撫で下ろした。
「ってぇなぁ」
上から降ってきた低い声に顔をあげると、そこにいたのは分かりやすい「ガラの悪い兄ちゃん」で、思わずもう一度「すみません」と謝罪を入れた。チッ、と舌打ちして去っていった彼の、赤く染められた髪と浮かぶ数字が脳にこびりついて離れなかった。怖えなあ、と思いながらスマホに目を向ける。
「帰り着いたよ！」と侑から連絡が入っていた。ビックリマークの後ろについたにこちゃんマークが可愛かった。侑は最近、この絵文字を気に入っている。
家に帰った後は、今日の思い出を振り返りながら風呂に入り、早めにベッドに入った。明日は今日撮った写真を整理しよう。それだけで、明日もいい日になるような気がした。侑からのおやすみの連絡でスマホが光るのを見届けて、眠りについた。胸の真ん中が温かった。
朝。しっかり時間通りに起きられた自分を絶賛しながら牛乳を飲む。いい子だ目覚まし時計。やればできるじゃないか。

いつもよりスッキリした目覚めに気分が良くなった俺は、変わったことがしたくなってテレビをつけた。ニュースが流れている。違う、俺はもっと楽しい番組が見たいんだ、とチャンネルを変えようとしたその時、気になる情報が目に飛び込んできた。

「あれ、この人……」

そこに映っていたのは、俺が昨日ぶつかった赤髪の兄ちゃんだった。驚きのあまり頭が回らない俺を置き去りに、ニュースはその事件の詳細を淡々と伝えていく。場面が切り替わると、キャスターのお姉さんが言った。

「死亡推定時刻は二十時五十分」

「え」

ちょっと待ってくれ。兄ちゃんとぶつかって、スマホを拾って、俺から連絡が来て、それは何時だった？　汗ばんだ手でトーク履歴を確認する。

「二十時半過ぎだ」

ならば、あの彼の頭上の数字はなんだった？

右下に書いてあったのは英字だった。燃えるように赤い髪が印象的で、その上に浮かぶ黒がよく目立っていたから覚えている。あれは、確か。

「Mの、20……、20minutes？　いやいや、まさか」

考えすぎだ。そう言い聞かせてみるものの、どうも落ち着かない。そわそわと指先を擦り合わせる。焦った時に右手が動くのは幼い頃からの癖だった。

もしも、俺の推測が合っているとしたら？　そうであるとして、俺の数字の右下には何と書かれていた？

Mはない。俺はカフェで数字を見た五分後も俺と一緒にいた。H、hours？　いや、五時間後も一緒にいた。

「おはようございます、時刻は午前――」

「やっぱい」

せっかく余裕を持って起きたのに時間がギリギリだ。その場にあったリュックサックをひったくるように取って、バタバタと家から飛び出した。電車に揺られながら考える。きっとあれは偶然だ。あの男だけ、偶然、たまたま運が悪かっただけだ。たった一つの実例だけで、これが真相だと決めつけるのは良くない。

しかしこの日の講義終わりにかかってきた電話で、朝の推測はそれほど的外れでもなかったと気付かされる。

大学を出たところでかかってきた俺からの電話。人の邪魔にならないところに避けてから受話ボタンを押した。けれど、スマホから聞こえるのは俺の声ではなかった。

「もしもし？　功拓くん？」

「え？」

「いきなりごめんね、駿です。斎藤駿」

「俺の、お兄さん？」

違う。だってちゃんと俺の名前を確認してから電話を取ったはず……そうか、お兄さんとはいつも俺を通して連絡を取っていたんだと思い出した。右手がまた忙しなく動き始める。

朝のニュースの影響で、俺の手先は電車の中や講義中でも動き続けていた。

「あのね、落ち着いて聞いて欲しいんだ」

なんだか嫌な予感がした。頭の中で警報が鳴っている。朝のアラームとはまた違う不快感に背中を冷や汗が伝い、手には汗が滲んだ。

「侑が、事故に遭って」

周りの音が聞こえなくなるってこういうことを言うんだと思った。視界が真っ暗になって、でもお兄さんの声だけがうるさいほど頭に響く。

「今、オペ室に入ってるんだ」

お兄さんが侑について更に説明を加えていたけれど、全部音として聞こえるだけで意味が認識できなかった。そのまま何一つ頭に残ることなく、右耳から流れ出ていく。俺が言葉を飲み込めていないことを理解してか、お兄さんは電話を切ったらしい。ツーツー、と音が鳴っているのにも気がつかなかった。あぁ、数分前に通話は終わっている。

ホーム画面に戻るとお兄さんから連絡が来ていた。冷え切った指先を擦り合わせながらその内容を確認すると、侑は飲酒運転のトラックに轢かれたこと、手術が上手くいくかどうかは分からないこと、手術はまだ終わりそうにないから、面会に来るなら明日以降がいいということが書いてあった。何度も何度も読み返して、少しずつ意味を理解する。大切な人を失うかもしれない、そんな状況は初めてで、俺はただ震える体を抱きしめることしかできなかった。念の為にもう一度と目を向けた時、丁度お兄さんから病院の住所が送られてきた。

白で統一された部屋の中、病院独特の匂いとピッピッと単調な機械の音がした。侑には沢山の包帯が巻かれており、様々なところからチューブがのびている。この一つ一つがなんとか侑の命を繋いでいるのだと思うと、胸が痛んで仕方なかった。

包帯が巻かれた彼女の頭の上には、数字の3が浮かんでいる。目を凝らせば見えてしまう、右下の英字はD。事故に遭ったということ、二日前とは全く違う痛々しい姿、規則的に音を立てる機械。信じたくなくても信じざるを得ない。彼女はおそらく、三日後に死ぬ。

一命を取り留めたという連絡が来た時、俺は心底ほっとした。いつ目を覚ますか分からないと聞いた時も、俺は侑なら大丈夫だと根拠のない自信があった。このまま順調に回復して、また日常に戻れるのだと大きな勘違いをしていた。やはりあの男はたまたま運が悪かっただけだと。

俺は昔から、考えが甘いとよく言われてきた。「功拓はそういうところがよくないんだからね！」と頭の中で侑が言った。おい、今そういうこと言うのやめろよ、泣きたくなるだろ。目の前で眠り続ける侑の手をとって握りしめる。たった数日で変わるわけがないのに、腕は更に白く、細くなるように感

じられた。このまま静かに消えてしまう気がして、握っていた手により一層力を込めた。
　もちろん次の日も面会に行った。頭上の数字は2になっており、目の前で減っていく数字にどうしようもない焦りを覚えていた。あの男はコレを「素敵な力」だと言ったはずだ。大切な人の時間が溶けてゆくのをただ黙って見ていることしかできない。その無力さが痛いのに、一体これの何が、何処が素敵な力だと言うんだろうか？
「俺はどうしたらいいんだろうな」
　侑は目を覚まさない。面会終了のチャイムが鳴ったので、俺はもう一度侑の手の感触を確かめてから立ち上がった。頬に手を添える。温かかった。
　病院からの帰り、暗くなった道を一人で歩く。今日の数字は2だった。明日はきっと1だ。……このまま命の灯火が消えていくのを、黙って見ておけというのだろうか。目の前の一本道は永遠に続いていて、出口なぞないようにも思えてくる。両脇に立つ街灯が不気味さを引き立てていた。立ち込める不快感に顔を顰めた時、奥に何か黒いものが見えた。止まっているであろう「それ」は、俺が歩みを進めるごとに大きくなっていく。目に入れぬように下を向いて通り過ぎようと思ったが、それは突然肩に置かれた手によって阻まれた。
「数字で溢れた世界には慣れましたか？」
　黒い塊はいつの間にか人の形になって、俺にいつかと同じ台詞を投げかけてくる。
「素敵な力を授かりましたねって？」
「えぇ」
　淡々とした口調でうすら笑いを浮かべたこの男に、俺は腹が立って仕方がなかった。腸（はらわた）がぐちゃぐちゃに煮え繰り返って、体が大きく震える。
「何が素敵な力だ、ふざけんなよ！　侑が死ぬのを黙って見ておけって？　最期の瞬間が分かって嬉しいですねって？」
　胸ぐらに掴みかかろうとしたがすんでのところで止めた。頭の中で侑がまた「功拓はそういうところがよくないんだから！」とぷりぷり怒っていたから。男はさらに表情を緩めて言う。
「目を閉じればいいじゃないですか。そうすれば逃げられるでしょう？」
「逃げたらどうなる？　俺が目を背けているうちに侑は死ぬ」
　そう、こうやっている間にも侑の残り時間は減っているのだ。砂時計を一度ひっくり返したら、落ち続ける砂を止めることはできない。それと同じだ。始まったカウントダウンを、俺は止められない。
「あと、一日しかないんだ」
　この目で見た。だから分かっていた。でも声に出してしまうと、誰かに話してしまうと、どうも現実味が増してしまって、事実だと認めることしかできなくて、苦しい。
「辛かったから逃げていたら、死んでしまいましたって？　そんなの、そんなの……」

次の思いは言葉にはならなかった。喉の奥がツンと痛んで目の前が滲む。ただ力のない息だけが漏れた。男は急に無表情になってゆっくりと瞬きをしてから、じっと俺の目を見つめて言う。

「あの方を繋ぎ止める方法なら、幾らでもありますよ？」

光を灯さない真っ黒な瞳に吸い込まれそうになった。繋ぎ止める方法。侑を生かす道がある？

「ええ。そういうことです」

俺の思考が読めていたかのように男が言った。黒い目がますます俺を吸い込もうとする。

「貴方の一部をあの方の時間に変換するのです。血、肉、眼、腕、なんでもいい。量や数の少ないものほど価値があり、その価値の分だけあの方の時間が延長されます」

「延長」

「人は必ず死にますからね。それまでの猶予が与えられる、というだけです」

この男が本当のことを言っている保証はなかった。傷ついている俺を揶揄って、面白がっているだけかもしれない。

落ち込んでどうしようもない時、侑はいつも沈んだ俺を救い上げてくれた。特別何をするでもない、何気ない日々が幸せだった。それはきっと他の誰でもない、侑とだから築けた。幸せにしたいと思った。それが俺の役目じゃなかったとしても、侑の幸せが一番だと思った。侑の時間が買えるのならば俺の答えは決まっている。今にも落ちきってしまいそうな砂を、食い止める方法があるというのなら。

「変換に一番時間がかからないのは？」

「貴方の時間、でしょうね。ただ、どれくらいがあの方に捧げられるかは私にも分かりません。全ては神の匙加減というわけですが」

「それでもいい」

俺は侑に生きてほしい。そのためにはこの男を頼るしかないのだ。例え目に見えない、確信のない力だったとしても。

「かしこまりました。変換を開始します。本当に、よろしいですか」

「はい」

男の手が伸びてきて俺のおでこに触れた。そのままふっと力が抜けて、俺は意識を手放した。

目が覚めると俺は自室のベッドに横たわっていた。もう空は赤く染まっている。体が少し軽いくらいで他に異変はなかった。おでこにはあの男に触れられた感触がまだ残っているが、あたりを見回しても姿はない。俺は軽くシャワーを浴びると、いつものように病院へ向かった。周りの人の頭には変わらず数字が見えるし、変わらず数字は減っていった。

病室には侑が眠っていた。様子に大きな変化はない。頭上の数字は1。その下に書いてあった小さな英数字の羅列を読み解くと、一時間三十二分五秒と書かれている。頭の中では一つの考えが浮かび上がっていたけれど、あえて言葉にはし

なかった。言霊の力は大きいと思うし、何より俺自身が信じたくなかったからだ。まだ分からない。奇跡だって起こるかもしれない。何度も自分に言い聞かせる。あの男を、信じるしかない。

病室で過ごしていても侑の頭上の数字が増えることはなかった。残り数分になってもカウントダウンは止まることなく進む。侑はもう目を覚まさないのではないかと怖くなった。俺、もう一度ちゃんと侑の笑った顔が見たいな。くしゃって笑う顔が可愛くて好きだと、本人に伝えたことがあっただろうか。だって、こんなに突然奪われてしまうものだとは思っていなかったから。ずっと続くものだと、そう勘違いしていた。

「こんなの言い訳だよな。そういうところだよってまた怒る？」

視界が滲んで目の前の侑がよく見えない。髪を整えてやりながら唇を噛み締めた。

「もっとちゃんと見せてくれよ、最期かもしれないんだから」

涙を止める術がなかった。ただただ、俺は侑にいかないでほしくて、侑に生きてほしくて、だから。

「頼む、頼むよ」

3、2、1。音もなく、静かに数字がゼロになった。じんわりと滲んでから溶けるように消える。

「……え？」

侑の心臓の動きを記録する機械はそのまま止まることなく動き続けていた。面会終了のチャイムが鳴って、名残惜しい気持ちで立ち上がる。侑はしっかり息をしていた。明日は目が覚めるだろうか。そうしたら、俺は侑に何を話そうかな。いや、なんでもいいや。とにかく侑が俺の目を見て笑ってくれたら、まずはそれだけで幸せだから。

病室を後にして、いつもの道を一人で歩いた。いつも通り道は暗いけれど、昨日とは比べ物にならないくらい足取りが軽かった。

「っ」

声にならない音が漏れる。「侑が意識を取り戻したと病院から連絡が入りました」病室で会った時に連絡先を交換した駿さんから、そう連絡が入ったからだ。俺が病室を出た数分後だったらしい。明日は侑と何を話そうか。まずは、眠っていた間の三日間のお話をしてあげようかな。そんなことを考えながら、戻ってきてくれたことへの嬉しさに涙が止まらなかった。

だから、気付かなかった。自分が横断歩道の上で、歩みを止めていたことに。トラックが蛇行しながら、こちらに向かってきていることに。そのトラックが人の姿を捉えてもなお、加速し続けていることに。

目が眩むような強い光と、鼓膜を破る勢いで鳴るクラクションの音がして、次の瞬間、体が跳ね上がった。

地面に打ちつけられる。飲酒運転のトラック、どこかで聞いたことがある響きだと思った。遠のく意識の中で、ああそ

ういえば、自分の数字は一度も見たことなかったな、なんて他人事のように、やけに冷静に思うのだった。

地面に横たわる男を、一人の男が見つめている。その目に感情はなく、温度もない。まるで機械のようだった。

「だから言ったでしょう。本当に、よろしいですか？ と。もっと気を付けて生活してもらわないと困りますねえ。特に、車の近くでは」

ぶつぶつと独り言を言った後で、右手を天に高く突き上げる。パチン、と指を鳴らすと、二人まとめて消えてしまった。

目が覚めると、俺は自室のベッドに横たわっていた。もう空は赤く染まっている。あれ？ 俺、車に撥ねられたはずじゃ？

そう違和感を感じつつも、軽くシャワーを浴びると、いつものように病院へ向かう。周りの人の頭には変わらず数字が見えるし、変わらず数字は減っていった。

病室に入ると、侑はベッドの上で眠っていた。頭上の数字は2になっている。俺の時間が変換されたのだろうか。だとしたら、俺は侑の時間を二日しか延ばしてあげられなかったのか。あの男は、全ては神の匙加減だと言っていた。だから抗いようのないことなのだ、と自分に言い聞かせる。それならば、早く目覚めてほしい。俺には話したいことが山ほどあるんだから。

けれどその日、侑は目覚めなかった。面会終了のチャイムが鳴る。明日はまた1になっているだろう。結局俺は彼女に何もできないまま、時間だけが過ぎていく。

病院からの帰り、暗くなった道を歩く。一本道の真ん中に、あの男が立っていた。

「数字で溢れた世界には慣れましたか？」

「え？」

「あの方を繋ぎ止める方法なら、幾らでもありますよ？」

あの日と同じ台詞。俺を吸い込もうとする真っ黒な目。

「言ったでしょう、全ては神の匙加減だと。しかし、時間を分け与えた相手と同じ被害に遭う、という説明が足りていなかったと上から申告がありまして。やり直し、です」

男はどこからかバインダーを取り出して、胸の前で構える。目が内容を辿ってきょろきょろと動いていた。

「また同じ選択をしたら？ 他の物を与えたら？ もし、何もしなければ？ どんな未来が待っているかなんて、私にも分かりません。……今度こそしっかり説明しましたので。さて、どういたしましょうか」

ふと空を見上げた。月も一つの星もない大きな闇が少しずつ下がってきて、そのまま俺を喰らってしまいそうだと思った。同じ選択、違う選択、未来がどうなるかは分からない。右手の指先を擦り合わせる。「功拓は手が冷たいからさ、こうやって繋いでると、体温を分けてるって感じがしていいよね」体温の高い侑は、俺の手を取ると決まってそう言った。もう少しで飲み込まれそうだっていうのに、こんな時も思い出す

のは、やっぱり侑のことだ。
「俺は、――」

例えばある日突然、貴方の世界が数字に溢れたとして、それが誰かの残り時間だったとして。貴方は大切な人のために、どこまで犠牲にできますか？
さあ、貴方の選択を。

「本当に、よろしいですか？」

夏の家族

県立加治木高等学校　一年
本山愛梨

母が泣いている。蛍光灯の、夜には強すぎる光が目の奥を刺す。光に慣れない視界の中でかろうじて捉えた時計は午前三時を指していた。母の不安定なリズムで刻まれる息が狭いリビングにこだまして、昨日とも一昨日とも変わらない夜だった。

父が家を出て一ヶ月が経とうとしている。母は毎晩、父の分の夕飯を作っては捨てる。習慣化して行くその行為は精神を蝕み、いつしかヒステリーを起こすようになった。

母が短い悲鳴と共に手元のティッシュ箱を投げる。カコン、と軽い音が鳴って、うるさい、と姉は言った。寝起きの喉が鳴らす声は掠れていて、母には届かなかった。母はまだ大げさに息を切らしていて、一角が潰れたティッシュ箱が姉の手で持ち上げられる。そしてそれを、姉もまた強く真下に投げ付けた。

「うるさい！」

姉の綺麗なボブがくしゃりと乱れた。細長い指で、頭を抱えるように耳をふさいでいる。母の動きは止まるが、かすかな嗚咽は止まない。姉も、唇を噛みしめて泣き始めた。

リビングは一気に静かになった。そこで初めて、私は雨が降っていることを知った。弱い雨の音と、二人の嗚咽が夜の静寂を埋めている。七月、汗と涙と雨が作り出した夜は湿っぽくて重かった。うめくように、母が父の名前を呼んだ。姉は耳をふさいでいた手で顔をぬぐって、しゃくりあげながら私の手を取った。

「出よう」

しゃっくりが姉の肩を縦に揺らす。涙で潤んだ姉の瞳を、蛍光灯の眩しさに慣れた目がしっかりと捉えた。私は少し迷って、姉の瞳をもう一度見つめて、うなずいた。延々と繰り返されるこの夜から出て行きたかった。私もまた、母に疲れていた。

雨は穏やかに降り続いている。アスファルトは湿り、その凹凸に踏切を照らす防犯灯の光が反射する。ビニール傘から透けて見える姉の背中を追い、駅に着いた。家のすぐ近くの小さな駅だ。

一人で電車に乗れるようになったのは、高校生になってからだった。まだ気丈だった母が、入学式前日に一緒に乗ってくれたのを憶えている。思い出す記憶は現実のどの景色よりも鮮やかで、まるでホログラムを散らしたみたいにキラキラしている。

「どこに行くの」

大学生の姉が長財布から二千円を取り出して二人分の切符を買った。
「遠くに行きたい」
駅に停車している電車に乗り込む。まだ四時になったばかりの始発の電車は空いていて、ぽつぽつと、眠たげなサラリーマンが猫背になって座っている。
湿気のこもる空気は重たい。隣に座る姉の首に薄く汗が噴き出ている。唇をきつく結び、ひじ掛けに頬杖をついて黙ったまま。横揺れのひどい電車のガタガタとした音が車内の静けさをあざ笑うように目立たせて、ときどき姉と私の肩が触れた。
一駅が過ぎ、二駅が過ぎ、私の高校の最寄り駅を過ぎ、姉の大学の最寄り駅を過ぎた。見慣れた景色を通り過ぎ、やがて知らない景色が車窓を流れ出すと、雨が止み、姉は立ち上がった。まだあと二駅分残っている切符を無人駅のボックスに入れて、知らない道を迷いなく進んで行く。私も横に並ぶと、姉はぽつりと言葉をこぼした。
「なんて？」
「誰のせいなのかな」
それは今にも消えてしまいそうな声で、私は傘を地面につきながら歩くのを止める。お父さんのせいだよ、と言えたらよかった。けれども私には、この家族の崩壊を誰かのせいにできる資格がなかった。
父と母の仲が、もともとよかったわけではない。けれどもその仲の悪さに、拍車をかけたのは私だろうと思う。
電車に乗り込む足が動かなくなったのは、高校に入学してわずか一ヶ月が過ぎた頃だった。駅のホームの屋根が役目を放棄して、日焼け止めを塗り忘れた顔に朝日が照り付ける。二車両目に乗るメンバーもだいたい確立してきた五月に、その日、私は電車に乗れなかった。足が動かなかったのだ。駅員の声も他の学生のいぶかしげな視線も見えないふりをしてホームに立ち尽くし、何となく、出発した電車の後ろ姿を見送って身をひるがえす。駅の改札を出て、きた道を戻る途中、よく分からない汗がこめかみから流れて寒気がした。
家に帰ると仕事に行く寸前の母がちょうどテレビを消したところで、忘れ物？　と言った。優しい声だった。その瞬間に体の内側からこみ上げた罪悪感が、涙に変わって流出した。
「学校行きたくない」
母は怒った。県内有数の進学校に入学した私に誰よりも期待していたのは母だったからだ。母が言葉を続けようとして、そこから逃げるように私は部屋に閉じこもる。母は大きなため息をこぼして仕事に出た。求めていた対応と違う態度に涙は溢れて止まなかった。
学校に行かない日が増えると、母は諦めたように優しくなった。父は干渉すらすることはなく、部屋のドアを一枚隔てた外側で、父と母の話し合う声だけが私を責める。
いつからか、父は帰ってこなくなった。父がひきこもる私

に話しかけたことは一度もない。そのときすでに、父の姿を見ることはなくなっていた。

「お父さん今日も帰ってこないね」

夕食のとき、ふとこぼした姉の言葉に母は黙っていた。誰にも返事をされない姉の言葉の余韻が気まずくて、かき消すように私はテレビの漫才に笑う。突然、母が箸をお椀に置いて、スマートフォンを触り出した。電話をかける。相手は私も姉も分かっている。

ひどく長い時間だった。漫才も、その笑い声も聞こえないほどに、スマートフォンと母の耳の間に鳴るコール音を聞いていた。しばらくして、既読は付くのだと母は言った。

「返事をしないのよ。それでね、ストーリーはあげてるの。インスタの、あれ。あれ焼肉だった。会社の人たちと焼肉してた」

六時になった。鬱屈した雲の下を吹く風が姉の茶色の髪を優しくなでる。これまで姉にかかった負担はきっと想像もつかないほど大きかったのだろう、目の下にあるクマは呑まれてしまいそうなほど黒く、深い。

横断歩道を渡ると、小さな喫茶店が見えた。

「入る？」

姉は喫茶店を指さして聞く。うなずいて二人で店に入ると、柔らかいソファに座って初めて、足の疲れを知った。ほとんど家から出ることのない頼りない足から力が抜けて行く。

「朝ごはん食べたいね」

姉は上機嫌に言った。もしかしたらそれは、無理に取り繕っているだけなのかもしれない。

「お腹空いたね」

私も笑ってメニューを開く。運ばれたサンドイッチはレタスがシャキシャキと軽やかな音を立てて口の中でほどける。店内にはクラシックが低く流れている。少しずつ熱が冷め、冷静になると、途端に不安が押し寄せてきた。

「お母さん、大丈夫かな」

「大丈夫だよ」

「本当？」

「きっと今頃、いつも通りテレビ見てるよ。部屋もちゃんと片付いてるし、いつも通りだよ、きっと」

静かに散らかった部屋を片付ける母を想像した。ゆらゆらと立ち上がり、涙がこびりつく頬を気にしながら、床にばらまかれたものをひとつずつ片付けて行く。きっとあのティッシュ箱も定位置に戻されていて、部屋はまるで何もなかったようにきれいになっているのだろう。

「疲れたな」

深いため息と同時に姉の眉間にギュッとしわが寄る。ぷくりと膨れた涙袋が濃いクマをさらに目立たせた。

「お昼ごはんいらないって、連絡しとこうか」

姉はカバンから取り出したスマートフォンのキーボードを打ち始めた。右手の人差し指と薬指の間から何かが垣間見え

て、目を細めるといつかのチェキだった。
「それ、懐かしい」
姉は私の視線の先を辿ってそれがチェキだと気付くと、ようやく笑った。
「ああ、懐かしいでしょ。いつ撮ったっけ」
「私の十歳の誕生日だよ、五年前」
十歳の誕生日は休日だった。窓から夏を匂わせる日が差し込む五月、私がピクニックに行きたいと言ったのだ。
「公園行きたい。近くにないかな」
姉がスマートフォンの裏に挟まれたチェキをなでて言う。地図アプリで検索すると、近くに一つだけあった。
「あったよ」
「じゃあ後で行こう、ちょっと休憩してからね」

交通量の増えた大通りの横をスマートフォンの地図を頼りに歩く。雨に降られた車がつやつやと光りながら通り過ぎて行く。やがて狭い道に入るとすぐに芝生が見えた。
公園のベンチに座って思い出す。春と夏が混ざり合った五月の風の匂いがいまだに鼻の先にくっ付いているような気がした。
「あの日さ、お母さんが怒ったの覚えてる？」
姉は笑いを含ませて言った。記憶の中から五年前を引っ張り出すと、そう言えば、と思う。
「あったね、そんなこと」
「スーパーのお惣菜ばっか食べて、どうして私の卵焼き食べないのって」
「しかもさ、お母さん怒ると黙るから、私たちずっと気付かなかったんだよね」
「そうそう。言われなきゃ分かんないのに」
姉はそれから、少しの間何も言わなかった。滑り台が一つあるだけのだだっ広い公園に浮かぶ沈黙が気まずくなり始めた頃、
「なんで学校行かなくなったの」
遠慮がちに、姉は聞いた。考えても言葉にしづらい、曖昧なものばかりが浮かんでは消えた。
「別に、大したことじゃないんだよ。五月病、とかよく言うじゃん。何か特別なことが起こったわけじゃない、ただ何となく行けなくなった」
納得が行かないのか、姉は口を閉じたままでいる。私もこれ以上の言葉が見つからなくて、再び沈黙が生まれる。
制服も通学路も何もかもが新しくなった四月、履きなれないローファーで何度も靴擦れを起こした。持ち合わせの少ないコミュニケーション能力を最大限に発揮してもうまく行かない友達作りに焦りが募った。そういう、時間が解決してくれそうな問題が幾重にも重なって電車に乗り込む足を止めた、ただそれだけの話だった。私は思っていた以上に弱かったのだろう。
「お母さん、本当に心配してたんだよ。いじめじゃないかっ

て学校に乗り込もうとして、お父さんが止めたの」
姉は湿った芝生で汚れた靴の先を見ながらぽつぽつと話す。
「私も心配だった。ずっと心配してた」
「私に直接聞けばよかったのに」
「聞けるわけないじゃん」
私たちそこまで強くないよ。だんだん弱々しくなる姉の声を懸命に拾う。母も父も強くなかった。私も姉も弱かった。気が付けば、話せていないことばかりだった。

父と母の喧嘩は、いきなり激しくなる。溜まりに溜まった愚痴や小言が急に爆発するからだ。それはずっと前のことから最近のことまでたくさんで、あのときも俺は、なんて聞こえてきたりする。じゃあなんでそのときに言わないの、と言う母も同様で、古い記憶を引っ張り出してはお互いを否定する。
なぜ、言えないのだろうと思う。伝え損ねた言葉の数だけすれ違うことを、本当は誰もが知っていた。伝えられなかった思いは溜まり、体の内側に積もって、いっぱいになったときに鋭くなって溢れ出す。その度にみんなが傷ついて、それでも許して、納得の行かない終わり方で、だんだんと距離ができて行く。
悲しいと思ってしまったらもうだめだった。目の奥が熱くなり、鼻の先が痛くなる。溢れそうな涙を唾と一緒に飲み込むと、ただひたすらに戻りたかった。

姉のスマートフォンが震えた。
「雨、また降るって、お母さんから」
「そっか」
「帰ってきた方がいいよって、何でもないようなラインきたよ。多分気付いてないね、逃げ出したこと」
「お母さんは、そうだろうね」
きっと私たちがちょっとした買い物にでも出かけたと思っているのだろう、笑った絵文字付きの文章が私たちの状況にあまりにも不似合いだった。
「帰りたい」
口をついて出た言葉に、姉はうなずいた。
「帰ろうか」
立ち上がって、姉の隣を歩く。父も帰ってきてくれないだろうか。
信号が赤になったとき、私は自分のスマートフォンを取り出した。気付いた姉も私のスマートフォンを覗き見ている。ラインを開くと、私の「どこにいるの」の吹き出しに既読が付いて終わっていた。
キーボードを打つ。「帰ってきてよ」とただ一言を送るのにずいぶん時間がかかってしまった。

電車の席はもう空いていなかった。昼前の車内は家族や学生で密度が増している。

雨が降り出した。強い雨だった。家の最寄り駅で電車は運転見合わせになった。二人で降りて踏切を渡る。傘で防げなかった雨に濡れた私たちを母は風呂へと促し、その間にお昼ご飯を作ってくれた。

「お母さん」

風呂に入り、ご飯を食べた私たちはきれいになったリビングに座る。話し合おう、と姉が言う。母の表情が一瞬こわばって、そしてふっとほどけた。

いつしか雨は上がり、父は帰ってこなかった。いつも通り十二時まで待った母は、姉に促されて静かに寝た。

それぞれが自室に戻る。電気を消した部屋で寝がえりを打つ度に掛布団のこすれる音がやけに大きい。疲れているはずなのに眠気は襲ってこない。一時間で止まるように設定したエアコンが止まった頃、家の外で、車が砂利を踏む音がした。

身を起こす。立ち上がろうとしたとき、暗闇の中で青白い光が浮かんだ。スマートフォンの通知だった。強い光に目の奥が一瞬痛む。数回瞬きをしてからロックを解くと、ラインが届いている。父からだった。

「怒ってるか」

ただそれだけのメールが、私の「帰ってきてよ」に続いている。

「怒ってないよ」

すぐに既読が付いた。帰ってきてるの、と送る。

「家の前にいる」

庭に出ると、父の車があった。随分久しぶりに見た白い車が、月明かりの下で弱々しく佇んでいる。父は運転席にいた。キュッと結んだ唇は、私を捉えても崩れなかった。

エンジンがかかって、窓が開く。

「中に入れば」

私の言葉に反応はない。

「みんな待ってたのに」

「今更帰れないだろ」

こんなに低かったっけ、と父の声を聞いて思う。

「別に、大丈夫だよ」

「一ヶ月だぞ」

「そうだけど」

前を向きなおした父の頑固な態度がまるで子供みたいだった。

「じゃあどうするの、このままたどこかに行くの」

カエルが鳴いている。父は何度もハンドルを握っては手を膝に置いた。

家族で出かけるとき、私の位置はいつも助手席だった。母が父の後ろで、姉がその隣に座るのが定位置となっていた。

「ドライブ行こうよ」

もどかしい沈黙を破ったのは私だ。父は黙ったままだった。私は助手席のドアを開けた。

「今日はさ、三人で少し話したんだよ。今までのことも、これからのことも」
「うん」
「なんで出て行ったの」
流れるラジオのパーソナリティーが愉快に笑っている。街灯と二十四時間営業の店の灯りが私たちを照らしては流れて行く。
怖かったのだと父は言った。初めて聞いた父の弱音だった。
「分からなかったんだよな、何が原因だったのか。誰が悪いのか。俺かもしれないって思ったとき、帰れなくなった」
どことなく震えたような声だった。
誰が悪かったのだろう。考えてみると、一番悪いのは誰だったのかよく分からない。私かもしれない、と思った。そもそもの原因は私にあるのかもしれない。あの電車にさえ乗れていれば、何も起こらなかったかもしれない。そう思ったとき、背中から冷や汗が噴き出て、一瞬体が熱くなる。
考えれば考えるほど思考はマイナスになって行く。誰が悪いかなど、ただの予想に過ぎない。けれども私たちは、勝手に罪を背負う。自分の間違いばかりに気を取られ、周りを見る余裕をなくし、言葉少なに自分の世界に入り込んでしまう。その負のループの中に私たちはいる。
「みんな悪かったよ。みんな、何か間違ってた。だからお父さんだけじゃない。お父さんだけが責められるわけがない」
母の顔が浮かんだ。
「お母さんは、昔に戻りたがってるよ」
「うん」
「お姉ちゃんも、私も」
「俺だって戻りたいよ」
思い出すのは幸せな記憶ばかりだ。小学生の頃の私が屈託なく笑う光景がやけに輝いて見える。思い出すという行為は辛かった。
「戻りたいね」
「迷惑かけてごめん」
「みんな同じだよ」
信号が赤に変わる。赤信号に照らされた父の顔に、涙が流れたのを見た。知られたくないのか、父は拭おうとしない。
「前見えるの」
思わず笑ってしまった。どうしてこんなにも頑固で臆病なのだろう。
信号が青に変わり、車がゆっくりと動き出す。家に向かっていた。

雨の籠

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校　一年
籠夜月都

「空って、涸れないのかな」
彼女の言葉はいつも唐突だ。普通の人が考えもしないようなことをポンっと言う。しかし彼女のそんなところが案外好きな自分も大概なのかもしれない。
「……どうだろうね。急に雨が全く降らなくなるのかも」
君の言動みたいに。
そう言うと彼女は心底可笑しそうに笑った後そうかもね、と小さく微笑んだ。その顔はいつもの快活さが鳴りを潜めるような儚さを持っていた。

――僕は忘れていたのだ。彼女は僕の言葉は大抵信じること。そして、彼女が変な質問をする時は変なことが起こっていることが多いのも。

ジメジメした教室。しとしとと外は雨が降りしきり、いつもは部活動生で賑やかな校庭には誰もいない。代わりに体育館から声が反響していた。

わずかに体が汗ばみ制服がまとわりつく。冗談でも爽快とは言えない気分だ。目の前の彼女もブラウスがまとわりついているらしく、時折体を揺らし顔を顰めている。
「前さ、空は涸れるかって話したの覚えてる？」
そう言えばそんな話を聞いた。いつもの変な話と流したことまで思い出す。あの時、君はどんな顔をしていたか。見ていた筈なのに妙にそこだけ抜け落ちている。
「うん、してたね」
「お前は流してたけどな」
バレていたらしい。彼女は大抵鈍いのに、偶に思い出すように鋭くなる。そういう時は誤魔化しても無駄だ。
「で、それがどうしたの」
「あー、いや。夢じゃなかったんだよなって」
ますます意味が分からない。彼女は一体何が言いたいんだ。
「……いつも可笑しいけどいつも以上に可笑しいよ、疲れてるの」

――あの、雨に溶けて行ってしまいそうな笑み。変だなと何故気づけなかったのか。普段の彼女はもっと豪快に笑うのに。

「……言いたくないなら別に良いけど。なんかあったら頼れよ」
幼馴染なんだしさ。

「ありがと、相変わらず優しいよねえ。それで彼女いないのまじで信じらんないわ、皆見る目ないなー」
相変わらずこの子はこういうことをさらっと言う。一体誰のせいだと思っているのか。
「まったく……茶化すなよ」
にがーい顔をしていたんだろう、彼女は声をあげて笑った。
「だって、仕方ないじゃん。こんなこと言えるわけないじゃん」
彼は呆れたような苦いような顔で教室を出て行った。一人になったはずの教室。だが私の目は明らかにもう一つの人影を捉えている。いや、人ですらないのかもしれない、というか確実に人じゃないだろう。彼の目には多分、映っていなかった。
初めは目視できなかった。何かいる。何か見られてる。遠くから観察されているような感覚が嫌に残る。最初はストーカーかと思ったが家も、学校中も、登下校中もとなると流石に話が違う。その話だけ聞いたら聞いた十人に九人は警察よりも病院を勧めるだろう。誰にも相談もできず、放置する他無かった。
それから一ヶ月程するとそれが視界の端に映り始めた。何かが動いているのが、何かが存在を主張しているのが分かった。でもその姿を捉えることはできない。振り向いても、手を伸ばしてみても、何も触れないしそもそも何もいない。この時点で私は相手が人間ではない可能性を認め始めた。
「……一体何がしたいの。『雨が』どうかしたの」
それは何も答えない。時折思い出したかのように『雨が』と呟くのだ。男とも女とも言えない声で、ボソリと。
外は相変わらず雨が降っている。さっきよりも雨足は強まっているようで窓のさんに当たる雨粒が大きく跳ねた。
帰り道ふと気付いた。
彼女と話してさっきよりも強くなった雨を黒い傘で受け止めながら少し早足で歩く。
――彼女は今日、傘を持っていただろうか。
今朝は雨がたまたま止んでいたから少し、いやかなり単純な彼女のことだ、持ってきていないかもしれない。今から雨脚はもっと強まると通知が入る。踵を返しかけ、しかしさっきあんな別れ方をした後だ。別に何かしてしまった訳でもないが少し気まずい。
……まあ、流石に梅雨の時期で連日雨なんだからいくら彼女でも傘を持っているだろう。そう思い切り進行方向を再び自宅へと向ける。通知通り少し強くなった雨の音を聞きながら、さっきよりも早足で歩いた。
ぽたり、と雨が止んだ。
夏かと思うようなカラリとした暑さで湿気もない。だが今日はまだ六月の中旬、梅雨の真っ只中のはずだ。しかし、一

週間分の天気予報は連日の晴れを伝えている。雨雲レーダーをどれだけ動かしても画面に雨雲の表示が出ない。テレビではどのチャンネルもどこかの教授だとかいう髭のおじさんやら専門家だとかいう白髪交じりのおばさんやら、が深刻そうな口調で話している。子供向けの番組だけが、いつも通りよく分からない着ぐるみみたいなマスコットが子供たちと踊っていて、それがすごく空々しく見える。チャンネルを変えて映ったのは、今度は雲の掛かっていない日本列島と所在なさそうに立っている気象予報士だった。外は季節を間違えた蝉達が騒がしく鳴いている。それも相まって何処か他人事のような、異世界かお話の中の様に現実味がない。

そのままぼんやりとテレビを眺めてはっと今日も学校であることを思い出す。急すぎる暑さで頭が勝手に夏休みだと錯覚したんだろうか。バタバタと支度をして、既に熱い鉄板と化したアスファルトを歩く。真夏でさえこの時間はまだ多少涼しかったはずだ。テレビがどこもかしこも異常事態だ何だと騒いでいた理由がようやく理解できた。雨が降らないどころかこんな強さの日差しが日中ずっと続くなど人間でも干上がってしまいそうだ。植物なんかひとたまりもないに違いない。ジリジリと焼肉の気持ちを味わいながら学校へ向かう。通学路も昨日までは皆中間服だったのに今日は半袖がかなりいる。朝ぼんやりしていた時間に夏服を出しておけば良かった、今日は帰ったらまず夏服を出さねばならないだろう。

「おはよー！」

スパンッという音と共に元気そうな彼女の声がした。一拍遅れてやってきた背中の痛みに顔を歪めながら振り返る。予想通りそこにいたのは彼女だ。暑さなど大して感じていないかのような顔にこいつは昔から暑さには強かったなと思う。汗をあまりかかない割には強い。

「元気だな……あっつい……」

「そんなゾンビみたいな声出さない！　まだ朝だよ」

「朝なのにこの暑さやばいだろ……どうなってるの」

「ほーらあと少しで学校だよ～頑張れ～」

返す気力すら尽きてしまい、よたよたしながら残り僅かな学校への道を歩く。横で騒ぎ立てる彼女をいつもなら窘めるが当然そんな体力もないので放置である。ようやく学校に着いた僕らにさらなる地獄が待っていた。

「クーラーが点かない？」

僕達の声が同時に響く。そりゃそうだ、こんなに暑いのにクーラーが点かないなんて流石にきつい。

「そうなんだよ、清掃が終わってないからダメだとか言ってさっき放送がかかってた」

「待っっっって何それ」

「掃除とかいいから点けてよ！」

実は彼女にも暑さは効いていたようである。二人揃って呻きつつドサリと自席に着く。どうせ席も隣り合わせなので話題は自然とこの天気の話になる。

「なんで急にこんなに暑くなったんだろうね」

「……さあね、私に聞かないでよ」
「今の沈黙は何、どうかしたの」
「いや別になんでもないけど」
「分かった」
「え」
「あんまりにも暑いからバテたんでしょ」
「そ、そうそう。ちょっと疲れちゃってさー」
やっぱりか。さっきからなんだか様子が変だと思ったんだ。
あれだけ暑ければ彼女でも軽い熱中症くらいにはなるだろう。
「無理せずに水分取りなよー」
「あ、うん」
　近くの席の男子生徒が死んだような顔で入ってきて、そっちに気を取られた。話しているうちに、彼女が教室から姿を消したのにも僕は気付かなかった。

「これ、あんたがやったの」
　屋上へ続く階段、その扉の近くで私はやつに問いかける。ここは人が全く来ないので内緒話にはもってこいの場所、その意図をやつが理解したのかは分からないがなんとなく付いてくるだろうと思ったのだ。やつの顔は見えない。いわゆる面布というのだろうか顔に布を貼っているのだ。その布と同じ色の黒い着物と髪がなぜだかとても不気味に見える。しかしそれだけだがこいつが今までいつの間にか近くにいたやつだろうと分かった。まあ、着物で学校にいて誰も何も騒いでいない時点で今まで通り私以外の人には見えていないんだろうというのも当然あるんだけど。
「何か言えば」
　そして今そいつはだんまりを決め込んでいる。これが喋れないからなのか、ただただシカトしてるだけかが分からない。
「少なくとも私のせいではない」
「いや喋れるのかよ」
「何か言えば、と言ったのはお前だろう」
「いやそうだけどさ」
　なんだかとても偉そうな態度である。今まで黙っていたくせに偉そうである。
「まあいいけどさあ……それでさっき言ってたのどういうこと」
「さっきの、とは」
「少なくとも私のせいじゃないってやつ。つまりあんたのせいではないけど、犯人が分かってるってこと？」
「犯人とはまた大層な言い草だな、小娘が」
「さっきから態度がでかいんだわあんた！　そこまで言うならまずそっちが名乗りなさいよ」
「それも一理あるか。私の名は……」
「名は……？」
「ない」
「ないのかよ！　なんで溜めたの」
「私の名はない。だが仕えているものならいるし、その方は

御名があられる」
「誰よ」
「人には善女龍王などと呼ばれていた」
「いや本当に誰」
「勉強不足だぞ小娘。もっと本を読め本を」
「まさか人外だと思われるやつに勉強不足を叱られるとは思わなかったわ。余計なお世話だ」
「主君はな……」

「雨乞いの神様？」
　僕は思わず返した。朝の時間、図書委員の招集がかかっていた。なんでも図書室の掲示を変えたいんだとか。その資料探しで雨に関する蔵書を漁っていたら、仲の良い男子の委員に声をかけられた。
「そう。室町時代とかにも雨乞いとかして実際に雨が降ったんだってさ」
「へー、でもあくまで伝説でしょ」
「それがいくつもそういう話が残ってて、ほら、金剛峯寺ってあるじゃん？　そこに祀られてるんだって」
　手の中の本をパラパラしながら軽い口調で言う。よく知ってるなと思いつつその本を覗き込んだ。
「女神なの？」
「いや、そうとは限らない。というか伝承では蛇の姿で現われたなんていうのがほとんどらしいよ」
「蛇」
「そう、蛇。なんかでっかい黒い大蛇の頭の上にちょこんって金色の小さな蛇が乗ってるっていう話が多い」
「想像したらかわいいな……」
「かわいいか？」
「それ金色の方が善女龍王なの？」
「多分。黒い大蛇の方は従者なんじゃないかって説」
　なるほど。じゃあこの子の掲示は、その善女龍王とかいう神様の話にするのか。そう思っていると、彼はぱたんとその本を閉じてしまった。
「あれ、それ使うんじゃないの」
「いや、使わないよ」
「なんで」
「雨が降らなくなるのはなんか法則があるらしい。で、その雨乞いをするには当然生贄がいる」
　その本の表紙を指でなぞりながら彼は呟くように言う。
「雨乞いに必要な生贄は、男でも女でも構わない。でも、善女龍王が選んだ子には勝手に雨の字が入る」
「勝手にってどういうこと」
「そのままの意味。あらかじめ別に名前を考えてたとしても、気がついたら『雨』の字を入れてる。雨が降らなくなる年に、丁度いいくらいの年齢になりそうな子が対象になりやすい」
　あれ、と思った。丁度いいくらいの年齢とは、やはり若者ぐらいということだろう。名前に『雨』が入る子はあまり多

くないだろう。僕の知り合いにも一人しかいない。
「選ばれてる子は雨が降らなくなってたら見つかり次第連れて行かれる。でも知らなかったら見つかりにくいんだ」
「なんで」
「啓蒙ってやつだよ」
俯いていた彼がスッと顔を上げた。その顔は恐ろしくなるぐらい「無」で思わずゾッとする。何かに取り憑かれたかのようにスラスラと語り続ける。
「もしも名前に『雨』が入っている人がこの話を聞いたらどう思うかな。少しでも一瞬でも、真逆自分なんじゃって思うんじゃないかな」
「思う、かも」
「少し話は変わるけど、家に幽霊とかがきた時に家に招き入れたらダメだって話は知ってる？」
「あ、あの『チャイムとか鳴って向こうに何もいなくても開けちゃダメ』ってやつのこと？」
「そう。それと同じで知らなければ入っては来れない」
啓蒙とはそういう意味か。知らなかったことを気付かせること。掲示なんてしようもんなら、まさにたくさんの人に知らせることになる。
「でも」
「え、何」
「……もう遅いけど」
最後、彼がなんて言ったのかがよく分からなくて聞き返そうとしたら、遠くから先生の集合の声がかかった。彼は何事もなかったかのようにサッと踵を返して行ってしまった。
「へぇー」
そんな神様がいるんだ。
「へぇとはなんだ。わざわざ教えてやったんだからもっと感謝しろ」
「だからすごく偉そうなのよあんた、まあでもありがとう」
途端に胸を張り腕を組む。表情は見えないが絶対今こいつドヤ顔してる。横にドヤッという文字をマンガみたいに入れたくなったところでふと気付く。
「でもさ、なんでそんな凄い神様の従者だっけ？　がわざわざ私のところにくるの」
そこだ。こいつの正体は大体分かった。その善女龍王とかいう神様がいるのも、それが雨を司るのもなんとなくだが分かった。じゃあ、なぜそんなのが私の側にいる。自慢ではないが私は生まれてから一度も幽霊だとか怪異だとかの類を見たことはない。そういう話こそ好きだが、縁はなかった。母はそういうの強いなんて話も聞いたような気もするが、詳しくは覚えていない。
「まだ分からんのか」
「何が。言っとくけど私頭良くないから言わなきゃ分かりませーん。さっさと教えて欲しいな」
「さっき私のことを偉そうとか言いおったが小娘も大概だ」

「口は遺伝的に悪いからね」
「……遺伝的、か」
「それで。何が目的で私をストーカーしてたの、従者さん？」
「ストーカーとはなんだ、あと従者さんもやめろ」
「注文が多いこと。じゃあクロでいいや」
「私は猫か何かか？　まあ、名前はどうでもよいのだ」
「やーいクロスケー」
「喧しい！　話を自分で振っておきながら遮るな、馬鹿者」
　ちょっと茶化しているとすぐキレた。と言っても、飼い猫がちょっとフシャーって威嚇してるくらいの迫力しかない。どちらかと言うとかわいい。
「小娘を監視していたのは見定める為だ」
「人を許可もなく監視するやつのことを現代ではストーカーっていうんだよ、覚えときなクロ」
「さっきから口を挟むな、最後まで聞いてから意見は述べてくれないか」
「はーい」
「で、だ。小娘、名前は」
「は、私の？　逆に知らずにストーカー紛いのことしてたの」
「ただの確認だ。そんなわけなかろう、小娘じゃあるまいし」
「謂われもない暴言吐かれてるんだが」
「いいから早く答えろ」
「なんか腹立つなあ、まあいいけど。私の名前は……」

「あれ」
　彼女がいない。授業開始のチャイムが鳴ったというのに彼女の席は空いている。さっきまではいたはずだが僕が図書室にいた時に保健室にでも行ったんだろうか。やっぱり体調を崩してしまっていたのかもしれない。あれでいて意外と優等生な彼女がサボる可能性は大分低い。
「ねえ、この子どこ行った？」
　彼女の後ろ、僕の斜めにいるクラスメイトに声を掛けたが知らないという。誰に聞いても同じ答えしか得られない。なぜだかいやに胸騒ぎがする。しかしその時に担当の教師が入ってきて授業が始まってしまった。
「起立」
　まあどうせ一時間程度経ったら帰ってくるだろう。

「帰って来ないな……」
　三時間目も終わりに近付きお腹が空いてくる頃になっても、隣の彼女は帰って来なかった。流石におかしい。保健室登校ではない限り三時間も保健室にいることはできない。
「どこにいるんだろう」
「誰が」
「うわぁ」
　いつの間に立っていたのか。彼女が真後ろにいた。
「いつ帰ってきたの、大丈夫？」
「今さっき。別に体調はなんともないけど」

「は、ってことはそれ以外に何かあるの」
「いやなんともない。ただのサボり」
ふと彼女の顔を見る。何か、変だった。こっちを見ているはずなのにどこか目が合わない。虚空を見つめているような瞳だ。彼女もこんな顔ができるんだな、なんて場違いなことを考える。いやそんなこと言ってる場合か。
「どうしたの。何かあったんじゃないの」
「ねえ」
「何」
「空ってさ、涸れると思う？」
「は」
「答え、教えてあげよっか」
「答えって……そんなことあるはずがないだろ、何言って」
「不正解。あるんだよ」
「あるって、空が涸れるってことか？　流石に冗談だよな」
「冗談ね。そうだったら良かった」
「ちょっと、どういう意味？　何が言いたいの」
「今日は、体調悪いからもう帰るの。話は今度」
「は、そこまで思わせぶりに言っといてまた今度って……」
すると彼女がスッと声を潜めた。いかにも帰る用意をしているように見えるが、近くで見ると分かる。あれは筆箱の中をかき回しているだけだ。ガチャガチャ、というペン同士がぶつかる音に紛れて彼女の小さな声が聞こえる。
「今は時間もないし人目もある。必ず直接話すから、待って」
なぜ彼女がそんなに人目を気にするのかは分からない。でもそこまでするならそうする必要があるんだろう。彼女の真似をして、次の時間の教科書を取り出しながら小声で「分かった」と答えた。すると彼女は勢いよく筆箱のファスナーを締めた。今度こそ本当に帰る準備を始めたようだ。
「よしっ、じゃあね」
「はやっ」
「だってプリントと筆箱放り込むだけだし」
「……宿題は」
「病人にお勉強させようって？」
「仮病の間違いだろ。今度授業のノート見せるよ」
「まじで？　ありがと」
「だから宿題は自分でやれよって意味だよ」
「と言いつつ、困ってたら教えてくれるんでしょ」
知ってるよ、とでも言いたげな彼女の顔は相変わらず小憎らしい。でもそんな顔で笑うのも毎回僕を頼るのも嫌じゃなかった。本当に僕はこの子に勝てないらしい。
「どこに行くのか知らないけど気をつけて」
ちょっとした仕返しでさっきからなんとなく気付いていたことを言う。体調が悪くなさそうなのは見れば分かる。だが彼女は帰る、と言っている。今からどこかに行く予定なんだろう。彼女の両親は共働きだし、家に一度帰って着替えたってバレはしないだろうから。横で息を飲む気配がした後、ふふっと笑い声がした。つられるように顔をあげる。

本当に柔らかく、幸せそうに笑う彼女がいた。思わず見とれていると彼女の後ろの時計が目に入った。

――十一時四十二分

「んなことしてる場合か！　あと三分で授業だよ」

「えっマジだ。んじゃ行ってきます」

鞄を引っ掴み、サッと踵を返す。スタタタッと忍者か何かのような動きで教室から姿を消した。相変わらず行動が早い。しかし、その早さが故に、彼女はだいぶ早とちりなところが昔からある。

「変に空回りしないといいけど」

僕の独り言は丁度鳴ったチャイムにかき消された。

「それでついて来いって、どこに行くのクロ」

「やはりその呼び名はどうにかならないか。その辺の野良猫にでもなったようだ」

「どうでもよいのだって言ってたのどこの誰だっけ」

「くっ……」

「それで、どこなの」

「もうじき着く。大人しく付いて来い」

「はーい」

いい加減疲れてきたので大人しく付いて行く。一度家に帰り着替えて電車に乗り、と既に遠いところまできたように思う。もうほとんど今自分がどこにいるのか分からない。ちなみに、やはりクロは他の人には見えないようで駅の改札を抜ける私を不思議そうに見ていた。当然無賃乗車である。いや実態がないからいいんだろうが、なんだか私だけお金を払い続けている。三回目の電車賃を払いながらため息をついた。

「ここから少し歩くぞ」

「歩くの？　目の前山しか見えないんですが」

「その目の前の山に登ると言っているんだ」

「えー山登るならそう言ってよ。スカートじゃないからまだいいけどさあ」

「いいなら文句を言うな。さっさと歩け」

ほんと偉っそうなやつ。疲れた様子も見せずスタスタと歩いて行く背中を睨みつける。ここまでくると最初気配だけで静かだった時代が少し恋しい。でもここで置いて行かれるのもなかなかに癪なので、せっせとついて行く、ということを一時間近く続けている。

「ていうか待って、普通に山険しくないか」

「この程度で音を上げるな、軟弱者め」

「自分は半分浮いてるようなもんなのによく言うわ」

本当に腹立たしい。目の前でスケートか何かの如く、平行移動するクロが言うことでは少なくともない。文句なら自分も歩いてから言えよ。

さっきよりジトッとした目でやつを睨みながら登っていると、ふと記憶が蘇った。なんだろう、なんかここ見覚えがある気がする。いや山とかどこも同じようなもんだよな。どうせ宿泊学習とかで登った山と勘違いしてるだけだ。家族で山

登りなんかしたことないし。
「ねえ」
「なんだ」
「クロはどこまで知ってるの」
「私の仕事はあくまであの方の従者だ。その質問に答えることはしない。いや、できない」
「できない？　なんか引っ掛かる言い方するね」
「いい加減黙れ。ここからもっと険しくなるぞ」
「今より？　まじで？　じゃあ待って最後に一つ聞かせて」
「……なんだ」
最後、と言ったからかクロが立ち止まり振り向いた。そこそこ真面目に聞くつもりはあるらしい。
「私はここにきたことがある？」
顔は見えない。でもなんか驚いたように見えた。
「クロ」
「記憶力の悪い小娘にはついて行けない。真面目に聞こうとした私が馬鹿だった」
「おいどういう意味だよ、さっきより当たり強くない？」
既に背を向けてスタコラ歩きだしているクロに言い返すが、当然聞いちゃいない。ちょっとは聞く気があるかも、なんて思った私も馬鹿だったようだ。しかし、さっきの答えだとやはりこの山にきたことがあるのだろう。ていうか、
「きっついな……！」
「だから言っただろう。余計なことを言って無駄に体力を減らしたのはお前だろう」
「ちょっと」
「さっきからおしゃべりが随分多いから、余裕があるのかと思えばそういうわけでもない」
「おーい」
「生意気な口ばかり利くし」
「いやあの」
「今度は何だ。何か言いたげにちらちらしおって」
「クロの後ろ、ずっと誰かいるんだけど」
「は？　ってうわっしゅ、主君」
クロの後ろにいたのは、幼い少女だった。幼いと言っても十二歳くらいで言うほど幼くはないのかもしれない。だけどなぜだか幼い印象を受けた。
「我のお気に入りを虐めておるのか、お前は」
この見た目でまさかの一人称「我」ですか。なんというか釣り合いが取れていない。
「い、いえそういうわけでは……」
「ほう、つまり先程聞こえた罵倒は我の聞き間違いと言う訳か、成程なあ？」
最後の方ノンブレスである。どっから見てもお怒りな様子の少女（仮）はクロを容赦無く問い詰める。さっきまで尊大な態度を取っていたクロはしょんぼりしている、ように見える。正直スカッとしたがなんか可哀想に見えてきた。
「あの、クロ、いやその人は私に色々教えてくれて、なんだ

けど私の理解力が足りなくて……」
　いやそもそもクロ人じゃないじゃん。え、なんて言えばいいんだこれ。一人めちゃくちゃ狼狽えていると少女は私の意図を汲んでくれたようだ。ふう、とため息をつくとクロをジロリと睨み上げた。
「此度はこの娘に免じて許すが次はないぞ」
「はい……」
　なんとかなったようではあるがまだしょんぼりしている。なんか大型犬が飼い主に怒られた時みたいになってしまっている。あれというかさっき主君とか呼んでた気がする。つまり待ってこの子は、
「神様……？」
　二人がふとこちらを見た。その目は何かを探るようでもあり請うようでもあって。言ったこっちが困惑するような様子だった。
「一応確認するが娘、名は」
「ウザク」
「何と書く」
「雨が咲くって書いて雨咲」
「なるほど。しかしお主、よく母と似ていると言われんか」
「えっと、私のってこと？　よく言われるけど」
　唐突に何の話だ。クロもそうだったが人外とは総じて会話が通じないものなのか。通じないと言うか会話が成り立っていない。
　私の困惑がばっちり顔に表れていたんだろう、少女（神様？）がクスリと笑った。
「ゆっくり説明しようではないか、此奴の不足分もな」
　クロの方を軽く睨んでそう言った。

「おはよ」
　目の前の最早見飽きた背中に声を掛けた。相変わらず真夏日のような日差しが照りつける朝。汗を吸いやすい夏服は既にかなりベッタリしている。正直もう帰りたい。
「え、あぁ、おはよ」
「まだ体調悪いの」
「なんで」
「いや、普段とテンションが違いすぎるじゃん。自覚ないの」
「あのさ、今日の一時間目サボってもらっていい？」
「なんで」
「昨日言ってた説明がしたいから。案外時間がないみたい」
「時間がないって……」
「んじゃ体育館裏に一時間目の時間きてね～」
　言うなり速度を上げて行ってしまった。というか文だけ聞くと決闘か何かの言い方だ。彼女らしくて一瞬笑いかける。だが、彼女の時間がないという言葉を思い出して背筋が冷えた気がした。とりあえず待つしか、ない。
「それで、どういうこと」

「まあ、順を追って話すけど一言でまとめると、魅入られてたから連れてかれるよってこと。今は猶予期間」
「魅入られたって、何に。連れて行かれるよって……」
「だーから順を追って話すって言ってるでしょ。まずね、気に入られたのは私のお母さんだったみたい。たまたま行った山で怪我をした『神様』を助けたんだってさ。んで、その時には私がお腹にいたもんだから、その名前にある文字を入れることで目印にしたんだと」
「もしかしてその文字って、『雨』？」
「何、知ってたの」
「最近それに近い話を聞いたばかりだったから」
　図書室で聞いた話に似ているのだ。……あれ、
「誰に、聞いたんだっけ」
　あの時僕と話していたのは誰だ。図書委員に仲がいい人なんていたか。大して仲良くもないのにあんな話をするか？　そいつの顔すら思い出せない。『何』だったんだ？
「なんかわかんないけど話進めるよ。んで、まあ何の為かって言うと雨を降らす為。涸れた空を蘇らせる為。その生贄みたいなもんらしい」
「生贄って……！　なんでお前じゃなきゃ、雨咲じゃなきゃいけないの」
「雨咲だから、だよ。雨が咲くなんて雨乞いには丁度良い名前じゃん。まあ、気に入られた時点で逃れようもないし」
　あまりにもあっさりした態度に腹が立ってくる。でもここで怒ってもなんにもならない。抑え込んで、聞く。
「いつなの」
「何が」
「言わなくたって分かるだろ。その猶予期間はいつまでだって聞いてるの」
　スッと目をそらす彼女。まさか、
「今日じゃ、ないよな。まさかな」
「そのまさかです……今日のカタワレドキって言われたんだけどいつのことだか分かる？」
「夕方のことだけど、知らずに約束したの」
　あんまりにも適当すぎないか。
「そんな感じ。あとは夕方まで最後の学校を謳歌するよ」
　狙いすましたかのように鳴るチャイム。踵を返して軽快に去ろうとした背中が止まった。
「君は、晴陽は悪くないから。晴れた陽射しも好きだけど、雨は降らなきゃ困るから。それだけの話だよ」
　なんで、そんなことを言うんだ。なんで自ら犠牲になろうとするんだ。なんでもっと早く言ってくれなかったんだ。
　言いたいことはたくさんあった。でも喉の奥がカラカラに乾いて何も言うことができなかった。そのまま遠ざかる背中をただ眺めていた。
「本当に良かったのか」
　屋上でぼんやりと遠くを眺めていた。見なくても分かる、

クロの声だ。話している間は離れていてと言ったのに。
「覗いてたの？　龍王様に言いつけてやる」
「既に叱った後だ、心配はいらん。それにあの小僧も大筋は理解しているはずだ。なかなかに賢いようだったからな」
「あ、いたんですね」
どうやらクロのそばに龍王様もいたらしい。しかし今の言葉の意味を知りたいところだがちらり、と目を向けてもスンとしている。これは教えてくれない時の顔だ。諦めるしかない。
「まあ、あれで良かったと思う」
「……そうか」
静かに返された言葉を自分にも教え込む。そうだ、あれで良かったんだ。だってあれ以上話してしまったら晴陽もこの件に巻き込むことになる。それは、嫌だ。絶対それだけはしたくない。私が嘘を言ったと知ったら怒るだろう。でも、それでいいのだ。
「愛だな」
クツクツと龍王様が笑う。うるさいですよ、なんて返しながらふと思う。
「さあ、往こうか」
私はあなたの側にいることはもうできないけれど。せめて君の未来が明るいものでありますように。雨の上がった空のように。晴れた日の陽射しのように。
「はい、往きましょう」

音がした。水が、落ちる音。草木に当たって跳ねる音。
――雨だ。
僕以外の窓側の席の生徒がそれに気付き声をあげる。休み時間のざわめきの中でもその感嘆の声は大きく響いた。生徒のほとんどが窓から外を眺める中、違和感に気付く。
なんで、雨が降っているのか。雨咲の説明なら今空は涸れている状態だから降るはずがなかった。生贄を、雨咲を連れて行かれない限り。
「まさか夕方って嘘だったのか！」
教室を飛び出す。行くあてなんかないのに、分からないのに、走る。ただ走る。少しでも空に近いところに。
屋上の鍵は、開いていた。普段は閉まっているし鍵は職員室で管理されている。視線を落とし、ソレは目に入った。明るい茶色のアメリカピンだ。先の方の塗装だけが剥げていてどこか不自然で。
『スパイかっこいい！』
『ねえねえ、私もピンで鍵開けられるようになりたい！』
小学校の頃にスパイのアニメが流行って、彼女もその主人公の真似をしていたっけ。それで何回も家の鍵を壊しかけ、なんでか僕も一緒に怒られて。
「できるようになってたんだな……」
扉の外は違う世界かのように大量の雨がコンクリートに叩きつけられている。遠くでチャイムが鳴る。まるで彼女の形

見か何かのようにピンを握りしめて、泣いた。

『本日の最高気温は三十七度、最低気温は……』

蝉の声が喧しく響く。あれから季節は巡り八月になった。結論から言うと僕以外に雨咲のことを覚えている人は一人もいなかった。天気は何事もなかったかのように例年通りの梅雨に戻った。異常気象だ何だと最初は皆騒ぎ立てたが、それもいつかは忘れられて行った。あの後、図書室にも足を運んだがあの時の『彼』が持っていたはずの本はなかった。それにそもそも図書委員の男子は僕だけだったということに後から気付いた。

「ねえ、君のいた雨空は今日の空よりずっと明るかったよ」

もう少し早く気付いていれば。もっと彼女の話を聞いていたら。後悔は、してもしきれない。

「どうせ聞こえないだろうけどさ」

好きだったよ。

誰にも届かない告白は、真っ青な空に吸い込まれて行く。届かなくていい。雨の籠に囚われた君が笑うことができますように。曇り空に差した晴れ間のように君の心を照らすものがありますように。

夏の大空の向こうで君の笑い声がした……気がした。

私の中の普通

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校　一年
竹之下真鈴

今日も朝五時にアラームが鳴る。私はアラームを止めて、眠い目をこすりながら、起き上がった。洗面所で顔を洗い、次に向かう先はキッチンだ。

冷蔵庫に貼ってあるスケジュールを見ると、今日の日付のところに「奏太お弁当」と私の字で記されている。そこで、今日は保育園が年に数回設けているお弁当の日であったことを思い出す。

ということは、今日は朝ごはんだけでなくお弁当も作らなくてはいけない。作るとは言っても、冷凍庫を開け、お米と冷凍食品を取り出し詰めていくだけなのだが。

次は、家族が食べる朝ごはんを作る。食パンを一人一枚分ずつ焼き、お湯を沸かし、コーンスープの粉に注ぎ、完成。三人分テーブルに運んで、時計を見るともう六時半を過ぎている。急いで彩葉と奏太を起こしに行く。でも、一回では起きてくれない。今日は三回目でやっと起きた。

三人でご飯を食べる。彩葉と奏太はよく喋る。そのおかげで、まったく箸が進まない。

「ごちそうさまでした」

食べ終わった、そう思ったときにはもう、時計は七時半を指している。小二の彩葉は自分でなんでもやりたい時期。自分で身支度を済ませると、元気よく、

「行ってきます！」

と言って家を出た。

奏太は私が全部手伝っている。奏太の身支度が整ったら、私は私服のまま歩いて保育園まで送る。そのときに、何人もの制服を着ている同級生とすれ違う。奏太を送り届けて家に帰ると九時前である。お母さんはまだ部屋で寝ている。部屋にラップを被せておいた朝ごはんを運ぶ。それから、朝ごはんの食器を洗う。

これで、朝するべきことは終了。時計は十時前を指している。

今度は、自分の身支度をして、重い足取りで学校に向かう。学校は二時間目の授業をしている。教室の扉を恐る恐る静かに気づかれないように開ける。だが、やはり、音でバレてしまいクラスのみんなが私を見る。みんなは、「ああ、また河井だ」という顔をしている。先生も、

「また、おまえ遅刻か」

と言う。私は、

「はい、寝坊してしまいました。すみません」

といつもの決まり文句を言って席に着く。

授業中はほとんど寝ている。友達もいない。いわゆる、「ぼっち」である。休み時間は席に座って、寝るか本を読んでいる。かといって、私はいじめられているわけではなかった。空気と同じようなものだった。

今日も六時間の授業が終わった。みんな楽しそうに、部活の話をしたり、放課後遊びに行く話をしたり……。

そんな中、私は帰る準備を済ませると、一番に教室を出て、保育園に奏太の迎えに行く。保育園から奏太と二人で家まで歩いて帰る。

家にはすでに学校から帰ってきている彩葉がいた。彩葉はゲームに夢中で私たちが帰ってきていることに気づいていない。

お母さんの部屋を覗いてみると、朝置いていったご飯は全部ではないが食べている。しかし、また寝ている。食器だけもって、静かに扉を閉めた。

午後は朝よりも忙しい。まず、洗濯物を取り込んで、たたんで、洗濯機を回して、それを干して晩ご飯の材料の買い出しに行って、晩ご飯を作る。それを三人で食べて、お母さんの分は部屋に運ぶ。食べ終わったら、二人をお風呂に入れる。ついでに自分も入って、上がったら、二人の学校の宿題や明日の準備を見る。そして、二人を寝かしつける。

そのあと、お母さんの部屋に行って、晩ご飯を食べているか確認する。

部屋の扉を開けると、お母さんは起きていた。晩ご飯も食べていた。

「大丈夫？　何かほしいのある？」

と聞くと、お母さんは静かに首を横に振った。

私は夜ごはんの食器を持って部屋を出た。

みんなの夜ご飯の食器を洗って、「やっと終わった」と思ったときには、もう、二十四時を回っていた。

私はそのまま、ベッドに倒れこんだ。

「こんな日常がずっと続いていくんだろう」

そう私は思っていた。

私は、「今日もいつもと何も変わらない一日になるんだろうな」と思いながら、登校した。いつも通り、今日も遅刻で。

でも、今日はいつもとは違うことが一つだけあった。

それは、昼休みのこと。自分の席で本を読んでいると、クラスメイトの男子に話しかけられた。確か、早川くんだっけ？

「おまえ、なんでいつも遅刻してくるんだよ」

予想外の言葉に驚く。そのうえ、集中して、本を読んでいる途中に話しかけられるの好きじゃないのに。驚きと少しの怒りが重なり、ついぶっきらぼうに答えてしまった。

「え？　だから、いつも寝坊って言ってるじゃん」

「それ、うそだろ」

もっと、予想外の言葉に驚く。

「え？　なんで？」

「毎朝、見かけるから。弟と一緒に歩いてるの」

正直、私も同級生に気づいていたから、同級生も私に気づいている人がいるかもしれないとは思っていた。しかし、気にも止めていないと思っていた。

「あーそうだね。弟を保育園に送ってるから」

「お母さんは？」

はーその質問か。中学生が弟を保育園に送迎することってそんなに変なことかな。私はその質問に答えるのがめんどくさくてつい無視してしまった。

今日は八月三日。二年前の今日、私たちの生活は一変した。

その日は、ずっと楽しみにしていたお父さん、お母さん、私、彩葉、奏太の五人で海水浴に行く日だった。海に着くと泳いだり、砂でお城を作って遊んだり……とても楽しかった。

たくさん遊んで少し休憩したくなっていた頃。彩葉が、

「かき氷食べたい！」

と言った。奏太が、

「僕も！」

と言った。するとお母さんが、

「じゃあ、買ってくるね。柚葉もいる？」

私は、

「うん！」

と言った。そして、お父さんは、

「お母さん一人じゃ大変だから一緒に行ってくるね」

と言い、それに続いてお母さんは、

「柚葉、彩葉と奏太をしっかり見ていてね」

と言った。

私は彩葉と奏太を見ていたつもりだった。しかし、つい砂遊びに夢中になってしまっていた。

「お待たせ。かき氷だよ」

そう言って、お母さんとお父さんが戻って来たときに奏太はいなかった。お母さんが、

「あれ奏太は？」

確か奏太は海の浅いところで遊んでいたはず……だから、溺れたりなんて……。

「あの、海に浮いているの奏太じゃない？」

とお父さんが言いながらもう、海の中に飛び込んでいた。お母さんは急いでライフガードに連絡して、奏太のもとに向かってもらった。

そのとき、私は遠くにいる奏太を見ていることしかできなかった。その時間はとても長く感じた。

一時して、奏太はライフガードに救助された。お母さんが念のためと思って奏太に着させていた、ライフジャケットのおかげで幸い命には関わらずに済んだ。

しかし、一向にお父さんが戻って来ない。ライフガードも必死で探してくれた。どれくらいの時間がたっただろうか。

お父さんは心肺停止の状態で発見された。

離岸流に飲み込まれてしまったのだった。

私は全部私が悪い。私が奏太を見ていなかったせいだと思

い大きな責任を感じて、悲しさよりも申し訳なさが上回って、涙も言葉も出なかった。

これから、私はどうすればいいんだろう。どうしたらみんなに許してもらえるだろう。

お母さんも「柚葉のせいじゃない」と言ってくれた。でも、責任を感じて仕方がなかった。

お母さんは自分が頑張って少しでも元通りの生活に近づけるように私たちを元気づけてくれた。

でも、そんなお母さんも長くは続かなかった。持病の貧血がどんどんひどくなって、次第に寝たきりになってしまい、家事もできなくなってしまった。

私だってお父さんが亡くなって悲しいけど、こんなときに私以外誰も家族を救える人はいない。そして、私が前を向かないといつまでも家族はこのままだと思って私はいつまでも、悲しまずに家族のためにも、そして何よりお父さんのために前を向こうと決めた。

親戚や近所付き合いもほとんどなかったため、それからは私が一人で彩葉と奏太の世話、家事、お母さんの看病をした。

それは、もちろん簡単なことではなかった。でも、今のこの家族の状態やお父さんを亡くしてしまった責任を考えるとこれぐらい全然たいしたことではなかった。

お父さんを亡くしてしまってからのこの二年間。私が家族のお世話をしてきた。もう、これが自分の中で当たり前になっていた。だから、「なんで自分だけがこんな大変なことをしなくちゃいけないんだろう」とか「もう家事なんてしないで友達と遊びたいのに」と思ったことも今まで一度もない。

最初は慣れなくて大変なこともあった。何をすればいいのかもわからない状態だった。それでも、一日はあっという間に過ぎて行く。その一日一日を必死に生きた。自分のことだけではなく家族のことを考えて。

お母さんは貧血で働くこともできないので、収入がない。なので、今までの貯金や母子家庭がもらうことができる児童手当だけの貴重なお金を節約して使った。

そんな生活を送り始めて今日で二年が経つ。

八月三日なので夏休み。「夏休みは学校がないからいつもよりゆっくりできる」と思ったら大間違い。夏休みは彩葉と奏太が家にいるため、昼ごはんを作ったり、二人の面倒を見ないといけないのでいつもより忙しくなってしまう。その隙間時間で宿題を片づけてしまう。

そんな夏休みはあっという間に終わる。もう明日から二学期が始まる。

そして、今日は始業式。いつも通り遅刻して始業式をしている体育館へ向かう。その足取りは重い。校長先生が話をしていて、寝ている生徒もいるのが目に入る。静かにできるだけ気づかれないように自分のクラスの列の一番後ろに座った。数分ぼーっとしていたら遅刻してきたおかげで校長先生の話は終わった。こういうときは少しラッキーと思う。

そのあとは教室で係決めが行われる。人気のある体育委員や文化委員はジャンケンになるのでそれは避けて、なぜかいつも人気のない給食委員に手を挙げた。給食委員はクラスで二人。すると、進行をする学級委員が「一人、二人……二人いるから決まりだね」と言った。私より前の席の人で手を挙げている人はいなかったから、もう一人は私より後ろの席の人なのだろう。まあ、仲が良い人もいなければ、嫌いな人もいないのでもう一人は正直誰でもいいのだが。それより、いつもはジャンケンで体育委員や文化委員になれなかった人たちが給食委員をするというぐらい人気がなく残る係なので、一発で二人いて決まったことが意外だった。

約三〇分くらいですべての係が決まった。その後は、クラスの係ごとで集まって、活動内容を確認したり、目標を決めたりする。もう一人は誰なんだろう。その疑問を持ったまま、給食委員が行くべき机の場所へ向かった。

そして、そこにいた給食委員のもう一人は早川くんだった。

私は、早川くんと目を合わせることもなく席に着いた。しかし、活動目標を決めないといけないため、何も話さないというわけにはいかないなと思っていると、早川くんが、

「これ」

と言って、給食委員の活動内容が書かれた紙を渡してくれた。と、いっても私は給食委員の常連なので活動内容は知っている。だが、何も知らないかのように

「ありがとう」

と言って、受け取った。私は、それを読んだふりをした。早川くんもその紙に書かれた活動内容を読んで、読み終わると、

「活動目標どうする？」

と言った。二学期の間給食委員で活動する上での目標を二人で決めて紙に書かなくてはいけない。

「うーん。何でもいいよ」

本当に何でも良かったので、つい投げやりで、人任せな答え方をしてしまった。

すると、早川くんは、筆箱からシャーペンを取り、活動目標を書く紙に「二人で協力して活動する」と書いた。私は何でもいいと言って置きながら今の私たちにはぴったりな目標だなと思った。これは私が心の中で思っていただけのつもりだった。しかし、気がついたときには、もう声に出ていた。

「いいね」

すると、早川くんはとても驚いた顔をして、そして嬉しそうに、

「えっ！　そうかな？　ありがとう」

と言った。この前は私のことを「おまえ」とか言ってきたくせに、今日は「ありがとう」とか言ってきた。この差は何なのだろうと思いつつ、早川くんの笑顔で私の心も少し明るくなった気がした。

自分が無意識に「いいね」と言ってしまっていたこと、早川くんが驚いてそして嬉しそうにしていたことも全部想像し

ていなかったことが一瞬に起こって頭が混乱した。
何か少し自分の中で気持ちが変化したんだと思った。急に、この間の早川くんに問われた質問に答えたくなった。あのときは、絶対に答えたくないと思っていたのに。
「うん。あのさ、この間の質問のことなんだけど……」
「えっ。あ、遅刻のこと？」
「そう。それ。なんか急に答える気になったから。少し長くなるかもしれないけど、それでも聞いてくれるんだったら」
「うん。聞く」
早川くんは、そう小さな声で言うと丸くなっていた背中をピンと伸ばすように座り直した。それを見て私も無意識に座り直していた。
それから、私は、お父さんが亡くなったこと、そしてそれからのことをすべて早川くんに話した。
話すのはとても緊張した。話している途中でやっぱり話さないほうが良かったんじゃないかとも何度も思った。話すのを途中でやめようかなとも思った。でも、最後まで話しきった。
何で自分が最後まで話したのかは自分でも分からない。でも、話し心地がとても良かった。ずっと、相槌を打つわけでもなく、静かだけれど心から私の話を聞いてくれている感じがした。
話し終わって、早川くんが口を開くまでは少し間があった。
「話してくれて、ありがとう」
私はこの一言を聞いて「話して良かった」と思えた。
話しただけだったけれど少し心が軽くなった気がした。
「また、何かあったら話してね」
「うん」
話したことで私の生活が楽になって、遅刻しないで学校に行けたり、自分の時間が増えたりするわけではない。心のどこかで助けてくれる人を求めていたのかもしれない。しかし、私の生活を助けてくれる人より、心を軽くしてくれる人を求めていたんだと思った。
生活も楽になったらもっといいかもしれないけれど、今まで自分でしていた家事を私たち家族のことを何もしらない人にしてほしくない気もした。
だから、きっと静かに話だけを聞いてくれる早川くんみたいな人を求めていたんだと思った。
数日経って、早川くんが話しかけてきた。私のような人のことを調べてくれたらしい。
「ヤングケアラー？」
「うん。本来は大人が担う家事や家族の世話を日常的にする子どものことを言うんだって」
私みたいな人に名前があることに驚いた。今までずっとこの生活が普通だと思っていたから。
「調べてくれてありがとう」
「うん。僕もできることがあったらするから何でも言って」
「うん。ありがとう」

早川くんに出会ったことで私の生活が大きく変わったわけではないけれど、話ができる人に出会えたことで今までより前向きな気持ちになれた。

家事や家族の世話が大変だけど、学校もただ行くだけじゃなく、楽しみを見つけてみようと思った。

リッテン・フリッカ、ラプトール

鹿児島実業高等学校　三年
上川路亮太

完全無欠で順風満帆な家庭に生まれ落ちたとは口が裂けても言いたくないけれど、叶わない夢を見ることが不幸なことなら、わたしはその点にだけ関して、自分が幸せだと思える。寧ろ思わせてほしい。小学生にもなっていない奴が何を言っているのだ、ガキはガキらしく可愛らしい夢を見られるうちに見とけなんていう言葉が間違っているとは言えないし、傍から見ればわたしなんて、ただのこましゃくれた早熟気取りのガキに過ぎない。けどそれだけを気にしていたら、わたしに夢を見させなかった家に生まれたわたし自身が悪いように思えてしまって、酷く惨めな気持ちになる。この惨めさはどうにもできない。こどもが転生する先を選べるという風説が本当なら虐待なんてそうそう起こらないし、そうでなければ相当熾烈な来世争いがあって、わたしはそれに負けたのだろう。三つ子の魂も百まで変わらないというのに、悪しき売り手市場もあったものだ。

それか、単にわたしに先見の明がなかっただけかもしれない。

なんにせよ無様だ。

だからわたしは夢から目を逸らしている。夢を見られないのではなく、見ないのだと言い聞かせるように。見ても益体のない張子のような夢を直視しないように。最たるものを例に挙げるとすればそう、白馬の王子様とか。

顔が佳く、優しく、裕福で、救世主的で、洗練されていて、女性の扱いがうまく、突然現れて、でも出会った瞬間には自分のことを気に入っていて、窮地に挫けず逆境に負けない強さがある。

理想的すぎて空恐ろしい。逆に言えば、一般に想起される「理想」を恐ろしいまでに注ぎ込み、投影したのが白馬の王子様なのかもしれない。遠く異朝をとぶらえば、白馬に乗った男という概念の起源は、イングランドの伝説の王、アーサーに求められるという。遠い国の遠い時代の発祥のものがここ日本で人口に膾炙しているのは、ディズニー映画の影響が大きいと聞いたことがある。白雪姫然り、オーロラ姫然り、灰被り姫然り、有名な物語のお姫様は総じて一国の王子様に救われている。日本ではその手の物語に、またディズニー映画に全く触れ合わない女児の方が珍しい。幼少期に抱いた憧れは、ともすれば長いこと心の中に居座り続ける。

わたしのような人間――大して世話を焼かれなかったような人間を除いて。そういう意味でもわたしは夢は見られないし、見ようとも思わない、ようにしている。それで困ったことも今のところない。

勿論世の女性が皆そういう完璧人間を待ち続けているとは流石に思っていないし、何ならディズニー映画でさえ、最近は完璧人間を登場させていないという。『アナと雪の女王』のハンス王子も、上っ面が綺麗なだけの残念な人として描かれていた。時代が変わって、頼りないものに頼るぐらいなら、自分の力で幸せでも何でも掴み取れという意思でも隠されているのかもしれない。

しかし、いやそれだけに。軽自動車の後部座敷に寝転んでいたわたしに――パチンコ店の駐車場に一人取り残されたわたしに、車の戸を開け、

「良ければなんだが、少し……どこか遠くに行かないかい？」

と言った男を見たとき、驚きとおかしみを感じずにはいられなかった。

そのわたしを攫いに来た男が、白くも王子でもなく、真っ黒の詰襟に身を包んだ少年だったからである。

驚いたし内心笑いはしたが、警戒心が無い訳ではない。いくらませていると言っても所詮五歳児だし、幼稚園にも保育園にも通っていないわたしに社交性がある道理などない。そもそもこの男が余りにも怪しい。普通、他所の車の扉は開けるものではないし、言葉遣いこそ遠慮がちだが妙に泰然としている。しかし、開ける寸前には三度のノックがあったし、しゃがんで目線を合わせると来た。

紳士か、変態か。それとも変態紳士か。

厳密に言えば、少年かどうかも断言できない。子供にしては大きく見えて、大人にしては小さく見える。詰襟を着ているので中高生だろうか。いや、それともそういう趣味の社会人かもしれない。そうならわたしの命はない気がする。

少年か、青年か。それともそういう人か。ここまで考えたところで、詰襟が急に口を開いた。

「小学生男子が少年と呼ばれていることを考えると、僕は青年になるのかな。いやそれだとポパー的に正しい表現じゃあないね。反証できないと科学的とは言えない。うーん、必ずしも科学的である必要はないのかな。しかし短絡的に考えて第二次性徴と重なるとしたら、まあそりゃ青年期だよね。安心してくれ、僕は怪しい者じゃあない。いや、怪しい者じゃないというのが逆に怪しいというものかな。そうなら君は僕を怪しんで戴いても構わない。十分に怪しんだ先には、信頼が残っていると思うんだ。せめてもの信頼醸成のために、僕のことを少しばかり申し上げておこう。この際どうでもいいことかもしれないけど、僕は検洛口白浪（しらくちしらなみ）という、近くの高校の三年生だよ。良ければ白浪と呼んでほしいかな」

言葉を選んで言えば、圧倒されてしまった。選ばずに言えば、ドン引きしてしまった。間違えたことは言ってないのかもしれないのに気持ち悪さが拭えない。話し方にはどこか余裕があるのに、学校で習ったことを家でひけらかす小学生のようなガキ臭さがあるように感じられた。

ここで車の扉を閉めれば、もうこの詰襟とは関わらずに済むだろう。そうした方が穏やかな一日を過ごせるだろうことは確実である。

しかし、何故かわたしはその気になれなかった。こいつ、白浪を邪険に扱う気にはなれなかった。どうしてかはわからない。九月の茹だるような残暑が、わたしの感覚や判断力を鈍らせたのかもしれない。知らぬ間に白浪の話術に取り込まれてしまったのか、歳下に話しかける様子を哀れんでしまったのか。それとも、わたしが白浪そのものから何かを感じ取ってしまったのか。

「土曜授業があると思って家を出たんだが、家を発った後に休みであることを知ってね。残念な話だ。そのまま自転車で走っていると、偶々近くを通りかかって窓が空いているのが見えて、近付いたら君が見えたんだ。つかぬことを訊くけど……親御さんは？」

最後は恐る恐るといった風にわたしに問うた。わたしは「あのなか」とパチンコ屋の方を指差した。白浪は、「まぁ、そうだよね……」と呟いてから、

「気に障ったら申し訳ないけど……素晴らしい親、とは言えないのかな」

と歯切れ悪く言った。大して気にはならなかった。少なくとも「最も歴史ある職業って売春なんだってね」だとか「チョウチンアンコウに生まれたかったーそう思わない？　思わないの？　夢ないやつだわぁ」だとか言う母親は素晴らしい母親ではない。父親に関しては消息もわからない。今更知りたいとも思わない。

白浪が漕ぐ自転車の、後ろの荷台に乗せられた制鞄の上にわたしは乗っていた。自転車は快調に道路を進んでいて、若干強めに当たる風が涼しかった。

ただ一点だけ、致命的な瑕疵があった。いかんせん煩いのである。

「さて、個人的な見解で恐縮だが、思うに俗にいう為人というものは、『好きな本』『好きな曲』『好きな言葉』で大まかに掴めるような気がするんだ。殊に曲に関してはある北欧の大学が調査をしていてね、地域が違っても、好きな曲と性格には、同様な関係性があると結論付けられているんだ」

「……そうなんだ」

とか、

「熾烈な来世争いの熾の文字というのは、確か天使九品の最上位、熾天使の熾なんだよね。熾天使はあっても烈天使はないというのは、不公平な気がしないかい？」

「……しないかな」

とか、

「物語の展開に起承転結ってあるけど、米国では最初に諸々の説明をしてから、上げて落として、最後にまた上げるっていうシンデレラ曲線に沿って作るのが主流らしいよね。アナ雪とか。あれ、アナ雪は違ったかな？　日本ではつかみで魅

せる作品が多いらしいから、アメリカ人には我慢強い人が多いのかな」
「……どうだろう」
とか、他にも様々。未だこの状況に慣れないわたしとは対照的に、白浪は話し続けないと死んでしまうと言わんばかりにぺらぺらと口を動かし続けていた。行き交う人が何ごとかという風にこちらを向くのでその度に居た堪れなくなる。幸いわたしには目もくれないが、絵面が絵面なので、いつ通報されてもおかしくない。
実際、見ようによっては有罪である。
交差点を幾つも通り過ぎて、自転車が停まったのは砂浜だった。聞けば、ウインドサーフィンの聖地との呼び声高い海水浴場らしい。石碑の台座に座ると白浪は、今度はこの砂浜の魅力や、何かに悩んだときはここに来て元気を貰うこともあるということなどをべらべらと話した。
道中とは違い、どうも話の内容がうまく頭に入って来なかった。それに、目の前の景色が綺麗だという事実は理解できても、あまり素直に認めたくない気がした。
わたしはこんなもんだと割り切っても。白浪はわたしとは違うと心の中で唱えても。白浪はこうやって羽を伸ばしているのか。伸ばせているのか。行き場の無い恨み言のようなものに意識を向けないようにするほど、却って振り解けなくなってしまっていた。寧ろ、思い出したくないものまで湧いて出て来てしまった。
冷たい水の中でもがくわたしと、その隣で青い顔をしながら、わたしと遠くの岸を睨め付ける誰か。その誰かがわたしの背を力任せに押して、わたしは岸の方へ投げ出されて、視界が黒くなる。
数少ないわたしの外出の記憶であるが、決して心地良いものではなかった。断片的で粗末で、他人事のような記憶だった。このときからだ、今のような生活になったのは。
羽を伸ばせなくて辛いなんて泣き言は言いたくない。心の癒しが何にせよある、という白浪が狡いだなんて盲目的なことも、言ったところで何にもならない。白浪には白浪なりの日常があって苦労があって懊悩がある。けど。
少なくとも話している最中の白浪の顔は、本当に幸せそうに見えた。何にも囚われていないように見えた。
喧しく、でも楽しそうで、満ち足りていそうだった。
羨ましいと思った。
我ながら安直だ。
「まあ、安直ではあるよね」
背筋が凍りついた。知らずに口に出てしまったと思い、動悸が早くなるのを感じた。
「『月が綺麗ですね』は夏目漱石の名訳があるから成り立っているのであって、派生語にそういう逸話がある訳じゃあないからね。『寒いですね』が『抱きしめてください』に至っては最早我が儘だし、『海が綺麗ですね』なんてさ」
貴方に溺れています――海が、人殺しみたいじゃあないか。

心底安心、はできなかった。そうだ、段々思い出して来た。わたしを助けてくれたあの人は、確かあのときに亡くなっている。海で人が亡くなっているのは間違いではない。年に何人波に捕われることか。

あのとき、周りの人は「一人でも生き残ったのだからよかったんだ」と言った。けどその目は「何でお前なんだ？」とも語っていた。

何故助けた方が、罪もない人が、善いことをした人の息が止まったんだ、と。何故かなんてわたしに教えて欲しい。

ふと白浪の方を見て、何となく拍子抜けしてしまった。窮地に立たされたかのような張り詰めた表情をしていたのだ。

そんな顔して悩むことがその程度か。

「うーん、海というより、波なのかな。人殺しと言うか、人攫いと言うか」

だから何だ。言葉を捲し立てて、転がして、それで満足か。これ以上の理不尽を、他人に降りかかる理不尽を聞いて、それ以上の顔ができるのか。

「おっと、歳下に気遣われてしまうのも形なしだ。気にしないでね、これも思いの詰まった名前なんだ。次はどこに行こう？」

わたしの中で何かがぷつんと切れた音がしたような気がした。これ以上、白浪の憩いの場など堪能していられるかと思った。白浪は晴れがましく伸びをして、へらへらと笑って立ち上がっていた。

「しらなみはさ、たのしそうだね」

「え？」

白浪は意表を突かれたようにこちらを振り向いた。

「しらなみはさ、いまいったことがいちばんのなやみなのかな。だったらさ、わたしはなんなのかな」

「悩みか。悩みは尽きないよ。目下学業に励まなければならないし、でも勉強の他にもやりたいことはある。健康維持には一日七千歩というけど運動不足も酷いと言われているし、将来どうなるか、どうしていいかも考えられてないし――」

「そのていどでしょ」

「人の悩みに優――」

「ゆうれつないならこのよはもっとうまくまわってる」

白浪は息を飲んだ。絶句していた。まるで正体を見誤っていたことに気付いた化け物に、慄くような表情だった。

同じ目だった。「何でお前がそんなことを」の目、「何でお前が？」の目だった。頭から離れない、わたしを突き刺す、責める目だった。

白浪が何かを言いかけた。押し寄せる波の音が無性に気色の悪いものに思えた。

「しらなみはすきなほんでひとがわかるっていってた。わたしはろくにほんをよめてないし、おんがくなんてほとんどふれられないし、ましてやめいげんなんてきいたこともない。……わかってほしいわけじゃない。なぐさめてほしいわけじゃない。いまにはかんしゃさえしてる。でも、しらなみには

わからない。じぶんのせいでだれかしんだこと。なぐさめられながらせめられたこと。じぶんがいきのこったことそのものがきもちわるくなること。もちろん、こんなのがわたしだけなわけがない」

だんだん息が苦しくなって行くような気がした。我慢して、喉を絞り出すように吐き捨てた。

「どうせこんなふこう、どうせさがせばはいてすてるほどでてくる。どうせありがちでちんぷっていわれる。それでも、それでもあんただけには、わかったようなくちをきいてほしくない！」

数秒経って、白浪がやっと口を開いて言った。

「ああ、何も言わない。本当なんて本人にしか解らない……でも、待ってくれ。こんなこと言うのは変だってのは自分が一番解ってるが、君は……君は、誰なんだ？」

意味が解らなかった。ただ腹が立った。

「なに？　じぶんのなまえもいえないとおもってるの？　わたしは――」

そこで言葉が詰まった。わたしはこの質問に答えられなかった。わたしは自分の名前が判らなかった。

わたしは誰だ。そもそもわたしをパチンコ屋に連れて来たのは誰だ。本当に母親か。ならどうして、一番恨まれて恨んでいる肉親の顔を思い出せない。

わたしは誰なんだ。

自分が何者か判らない。自分が内側から虫喰いになるような恐怖だった。呼吸がしにくくなって、悪寒がした。冷や汗が背筋を流れて、意識が途切れた。

途切れる間際には、またしても「何でお前が」の目線があった。

知らない部屋の知らない椅子に座っていた。それに知らない若い女性もいた。

「お、貴方はどちらかな」

髪の毛が真っ白なその人はそう言った。

どちら？

「どういうこと？　あなたはだれ？」

「くははは、まあうん、貴方だよね。貴方のことはおーちゃんとでも呼ぶかな。私は検洛口白梅（しらくちしらうめ）だ、白梅とでも呼んでよ」

「おねえさん？」

と言うと、白髪の白梅は「うん」と頷いた。

「白浪の姉だよ。この白い髪は、尊敬する人物の模倣、学業に関する決意みたいなものだよ。知識に敬虔で、知識欲に素直でありたいっていう感じかな」

大きな本棚と机と鏡台ぐらいしかものが無かったが、壁には所狭しと張り紙がしてあった。何故か周期表と北欧神話の世界樹の図解が隣り合わせになっていた。

「しゅうきひょうとくとゆぐどらしるがならんでる……」

「繰り返し見ると頭に入り易いらしいからね、これは結構良

い考えだと思うよ」
何となく、わたしは虚勢を張った。
「あなたは、ざんねんびじんのふれんずだね」
「意外と辛辣!?」
そこそこ傷付いていたので少し申し訳なくなった。白梅が思い出したように言った。
「で、本題に入る訳だけど」
「なんのようがあるの？」
「白浪に酷いことされたでしょ」
「ずっとしゃべってた」
寒気は引いたが、確かに自分のことが判らないという恐怖も無くなってはいなかった。
「うんうん、白浪は緊張すると口数が多くなるからね。ただでさえ話が長いのに。さっきまでのことを、ざっくりでいいから話して欲しいな」
できるかな、おーちゃん。と笑いかける白梅に、わたしは話してしまえば楽になるかもしれないと思い、洗いざらい話した。聴き終えた白梅は、
「ふむ、ドン引きだね」
と言い放った。
「白浪も人のこと言えないね。これも舌禍のうちだよ。……しておーちゃん。真実を知りたい？」
「知らざあ言って聞かせやしょう、だね。まず気になる点の復習、の前に鏡を見てほしいな」
真意が掴めなかったが、大きな鏡台の前に立った。
白浪がいた。
わたしはどこにも見当たらず、鏡には白浪だけが映っていた。
「どうして？」
酷い目眩がした。見間違いかと思って頭を振って目を擦って何度も見返しても、何ら変わることは無かった。紛うことなく白浪だった。
「おれがあいつであいつがおれで、とはまた違うんだけど」
あくまで推論だけどね、と白梅は続けた。
「熾烈といい、シンデレラ曲線といい、海といい、やけに見透かすような言動じゃなかったかな？」
「……これでみすかしたことになるなら、ひとのこころはがらすざいくよりすみきってる」
「くははは、それもそうか。ならこう問うよ、何で君はそんなに物知りなのかな？」
「しってたらわるいの？」
「貴方がとは言わないけど、この場合理に適わないな。その知識はどこから手に入れたのかな？」
「ばかにしてるの？　どこからなんて――あ、あれ」
「貴方が言ったんだよ。本にも音楽も碌に触れてないって」
白梅はにやにやと笑っていた。わたしの脳で、これ以上聞いたらどうにかなってしまうと危険信号が鳴ったが、逃げら

れはしなかった。
「おしえてもらった」
「一体誰に？」
「……それは」
　危険信号が次第に大きくなるのが分かった。
「母親でも父親でもないのは貴方が一番知っていると思うな。海での思い出に関しては、助けてくれたのは父親だよね。そのときから母親との今の生活になっているなら尚更。それに、テレビも見たこと無いだろうに、あのアニメの言い回しは知っているというのも面白いな。私は白浪と観たけどね」
　一息吐いて、
「まだあるよ。まず貴方が車内にいたとき、何で後部座敷に寝そべっていた貴方を白浪は見つけられたんだろうね？　鍵がかかってなかったとしても、何で車の警報が鳴らなかったんだろうね？　快調に進む自転車の荷台に乗せられて、何で五歳児が振り落とされず、涼しい顔でいられたんだろうね？　何で周りの人は幼女を連れ去る白浪を見逃していたんだろうね？　そもそも何で、口を聞いてもいない段階で、開口一番『どこかに行かないかい』なんていう無責任なことを言えたんだろうね？　探せばまだあると思うよ」
「有り体に言うなら貴方は、白浪の白浪による白浪のための人格、舞台装置。その喇嘛（ラマ）教でいうタルパみたいなものが、白浪と言葉を交わすうちに成長し、あたかも自律しているかのように振る舞うようになった。まああれでも白浪も、前は色々苦労していたんだよ。縋りたくなってしまうよね」
　頭がうまく働かなかった。白梅は目の前の矛盾を暴くのが楽しくてたまらないというような笑みを湛えていた。最早意味を失った最大音量の信号は、いつの間にか聞こえなくなっていた。
「存在理由に関して自覚が無いというのも、珍しい症例かもね。精神科医ではないから確かなことは言えないけど、役目を終えた副人格は、いつの間にか出て来なくてなるとか」
　自分が何者か判らなかった。それは自我同一性以前の次元だった。
　わたしは一端の人間ですらなかった。何もかも嘘で作り上げられた偽物だった。「見られない夢は見ない」なんてほざいたのが馬鹿みたいだ。
　夢を見られないのではなくて、わたしが白浪の白昼夢だったんだ。夢が、夢を見られる訳が無いじゃないか。
　人はいずれ夢から覚める。どんな夢も、いつの日か、いつの間にか褪めてしまう。夜明けに道路が冷めていくように、無かったことになってしまう。忘れ去られてしまう。
　結局わたしの苦悩とわたし自身は、単なる戯言に過ぎなかった。
「思い悩んでいるとこ悪いけど、私はここで退出するよ。後のことは白浪に話してもらおう。――白浪！」
　白梅はそう言って部屋から出て行った。私の顔が勝手に鏡

の方を向いた。何かに沈み込むような感覚があった。
「全部話すよ」
鏡の中の白浪が言った。

白波賊（はくはぞく）と言えば盗賊のことだし、白浪物といえば盗賊を主人公とした一連の世話者だけど、僕は人に何かをあげられる人になりたかった。してあげられる人になりたかった。人はお互い様だと言われるけれども、互いに敬い助け合い――をいつでも誰でも実践できる訳じゃあない。それでも悩みや困りごとは誰にでもやってくる。僕は誰かが悩んでいるとき、困ったとき、話を聴いたり、手伝ったり、一緒に悩んだり、そうやって誰かを支えたかった。
誰かの支えになりたかった。
でもね。
自分に身近で、自分が手伝える程度の悩みで、自分が助けても不自然じゃあない人。そんな都合のいい存在が現れることなんてなかった。今思えば当たり前のことなんだよ。
助けたいなら、助けるに足る人望が無ければね。
僕は僕のことを宣伝できなかった。支えになりますと公言できなかった。結局のところ、大志を懐く小心者だった。
そもそも可笑しな話だよね。助けられる人を待つ。それは、誰かが不幸に見舞われるよう祈るようなものだ。酷さがわかるだろう、誰か困り果てるのを待っていたんだよ、僕は。
何が善人だ。人の風上にすらも置けない。

いや、これだけならまだましだった。僕一人の問題だったから。傍から見れば「検洛口白浪（しらくちしらなみ）は屑である」というだけのことで、僕という人格においてのみ終始する話だったんだ。
だったはずなのにね。
僕は「かわいそうな人」を待ち望んでいた。待ち望んで待ち望んで待ちに待った結果、君を作ってしまった。捏造してしまった。殆どの人が哀れむだろう、言葉を失うであろう、「かわいそうな人」を拵えてしまった。
とは言え、深刻な栄養失調とか、不治の病に侵されているなんてことにはできなかった。僕が見ていて耐えられないと思ったんだ。
君には父がいない。理由は病死でも離縁でも何でも良かった。一つ作れなかった理由がある。どうしても造形が僕に似てしまうんだ。自分勝手に倫理観に蓋をしていながらも、心の中では既にこう思っていたのかもしれない。
僕が君を痛めつけていたようなものだと。君がかわいそうなのは僕のせいでしかないと。
かわいそうな君を作ってしまった僕こそが、本当の「かわいそうな人」だったんだよ。
君を哀れんだ僕こそが、どうしようもなく哀れな人間だったんだ。

自嘲するように薄笑いを浮かべながら白浪は、「勿論、赦し

てもらおうなんて思っていないし言わないよ」と言った。「言わない」と言うあたりが、白浪自身のいう「かわいそうな人」ということなのかもしれないと思った。

赦すかどうかなんて考える気には到底なれなかった。訥々と話しながら次第に歪んで行く白浪の顔を見て、何となくだが、わたしと白浪は同類なのかもしれないと思った。体格差があって、考えも嗜好も一致することは最早ない。それでも。

悔しさから悲しさから逃げて夢から目を逸らし続けたわたしと、自分の弱さに見合わない夢ばかり見て現実に向き合わなかった白浪。二人はどこか、根っこの方が似通っているのかもしれない。自らの成長した未来のこと、幾らかは変えられるかもしれない可能性を、見て見ぬふりし続けた、同じ「かわいそうな人」なのかもしれない。

同類なら、わたしは白浪を赦せる立場になんていないと思った。もしもいるなら降りてやる、そんな仰々しい立場。

赦してなんかやらない。もっとつまらない、もっと陳腐な終わりを拵えてしまおう。わたしは白浪の方を向いて言った。

「ひとつ、いうことをきいて」

「根性焼きでも膾に叩いてもいい。僕にできることなら何なりと言ってくれ」

「よかった。じゃあ」

わたしをころして。

わたしは満面の笑みで言うことができた。

「何、だって」

自嘲と後悔で歪み果てつつあった白浪の顔が、驚きに染まった。

「しらうめさんがいってた。やくめをおえたじんかくは、いつかはきえるって。しらなみが、わたしはおやくごめんだってせんげんすれば、もともとそんざいりゆうのよわいわたしは、いるひつようのないわたしは、やくめをまっとうできたことになる。ううん、はたすやくめがなくなる。これでしらなみは、わたしをわすれられるの」

白浪は動揺を隠しもせずに反駁した。

「何を、何を言ってるんだい。虫だって殺せない。あまつさえ君を殺すなんて」

「わたしをはんごろしにしたのはしらなみ。ちゅうとはんぱなしらなみのさくひんは、しらなみがしまつしてよね」

「それは……そうだ、その通りだ。でも」

「でも？」

「でも……もう僕には無理なんだ。本当に、本当に勝手なもんだ。暫く君と一緒に過ごして、僕が君をなかったことにするには――情が移り過ぎてしまったんだ。愛着が湧いてしまったんだ。笑ってくれ。どうしようもない、エゴイストだ」

「えへへ、ほっとした」

「へ？」

わたしは、安心していた。白浪が予想通りのことを言うことに。そして信じられないことに、わたしがこうやって予想を立て、目標を立てて、ある意味希望を持って喋っているこ

とに安心していた。
「やっぱりしらなみはしらなみだった。できないのはわたしもわかってた。だから」
「なら何で」
尚も食い下がる白浪を半ば無視して、言い切った。
――これからも、しらなみといっしょにいさせて。
「……ふはははは……何てこった」
生まれてからこの上なく爽快な気分だった。無理もない。この上なく喧しい人が、この上なく「してやられた」という顔をしているのだから。
「かなわないゆめやきぼうは、みられない。でも、かなうゆめならみてもいい。しらなみがしぬぐらいまでは、しぬのはあとまわしにしてもいい。やくそくしてほしい。わたしがしらなみとさいごまでいられること。どこへでもいっしょにいくこと。……これが、わたしのさいしょでさいごのもくひょう、ううん、ゆめになること」
白浪はもう、破顔一笑の見本のような表情になっていた。
全く、喧しい人だ。
「喜んで。誠心誠意、徹頭徹尾、万難を排して君と苦楽を共にすることを誓おう。いや、それだけじゃあつまらない。僕も僕で、やっぱり君が必要らしい。これから互いに敬い助け合おうじゃないか――支え合おうじゃないか！」
「きゅうにきもちわるくなった……」
わたしは心底穏やかに、落ち着いて安堵の溜め息を吐いて、二人で笑い合った。

Sky Blue Spring

鹿児島実業高等学校　一年
松　元　莉　乃

深空が学校に来なくなった。

中学三年に上がってから、病気になったから二ヶ月程入院すると聞いた。入院中は二週間に一回は茜と一緒に見舞いに行っていた。夏休みが始まり、オープンスクールや受験勉強で忙しくなり、結局見舞いに行かずに休みは終わってしまった。

入院中、深空は二学期から確実に学校に戻れると言っていた。常に点滴をしていたが、見たところ元気そうだったし、深空のことだから、と心配はしていなかった。

二学期が始まって、一週間経ったが、深空は学校に来ない。先生は深空について何も言わない。ついに、茜も来なくなった。今、教室ではいつも独りだ。

俺の友達は少ない。小学校では、いじめっ子だった。何度呼び出されようと、親が呼ばれようと、いじめをやめることはなかった。それなのに、小学四年生の時、何も知らない茜が転校してきて、すっかりいじめるのをやめた。更生したと言うのだろうか。いじめていた奴にもちゃんと謝った。クラスでは、孤立した。

それからしばらく経ったのに、汚名はいつまでも残り、俺について回る。小佐川中はいくつかの小学校から生徒が集まる。中学に上がれば、少しは収まるだろうと考えていたが、そんな考えは甘かった。初めは「みんな仲良く」みたいなノリで、話しかけてくれたが、だんだん離れていった。同じ小学校だった奴が何か言ったらしい。結局残ったのは、茜と、昔の縁でなぜかずっと一緒にいる深空、それだけだ。

一緒にいてくれるのに、どうしても憎らしい。彼らと一緒にいるときは特に、この考えが頭から離れない。

彼らは俺とは違う。彼ら自身の世界の主人公だ。俺の世界の主人公もまた、彼らだ。俺はそのエキストラに過ぎない。

俺は深空みたいに金持ちの優等生ではない。茜みたいにみんなから好かれている訳でもない。他人と比べることで、どうしようもない気持ちを満たしている。そう考えると、いじめも、そういう気持ちのやり場を作るためにやっていたのだろう。昔からそういう考えをしてきた為に、己の人生を悲観的に見る癖がついてしまった。

こんなに憎らしく思っているのに、本人には悟られないように隠して、気を遣って、本当に阿呆らしい。そして、近くに居なくなったら孤独を感じて、本当に、阿呆らしい。

中学最後の体育大会が終わった。彼らは来ない。先生は二人について何も言わない。不登校の奴は他にも少なからずい

るし、そいつらが先生の話題に上がったのも数える程で、そう考えると深空たちが話題に上がらないのも無理もない。
　茜の家は帰り道にあって、ある日の帰りがけにふらっと寄ったことがある。ドアチャイムを鳴らし、しばらく待ったが、一向に出てこない。居ないのかと、引き返そうとした時に初めて家の中からバタバタと音が聞こえた。茜の家の立て付けの悪い引き戸がガタガタと鳴く。
「あ、大和くん……」
　普段整えてある髪は伸びている上にボサボサで、元々綺麗だった顔はやつれて、目の下には濃い隈がある。最後に会ったのはいつだったろう。あまりの変わり様に言葉が出なかった。
「久しぶりだね、元気だった？」
　他人の心配をしている場合ではないと思うのだが、彼は優しい。他人の心配ばかりするのには慣れっこだ。
「元気、心配ない」
　彼は、いつも通り屈託の無い笑顔を見せた。それが聞けて何よりだ、という顔で。
「ごめんね、家の中には入れられないんだけど……今から時間ある？」
「全然大丈夫」
「立ち話じゃなんだし、少し歩こう。準備してくる」
　茜の「準備」には少し時間がかかる。見た目も、性格も、女子みたいだ。もちろん名前も。転校してきたとき、名簿に乗っている神前茜の名前を見て、誰が男だと思っただろう。教室に入ってきたズボン姿を見てクラス中の男子が落胆したものだ。彼にも彼なりのプライドがあるらしく、女子みたいだとか言ったら、嫌な顔をされるが。
　しかし、早く戻ってきた。白いオーバーサイズのパーカー、七分丈のジーパン、スニーカーソックスと青いスニーカー。髪の毛には櫛を入れたようで、ボサボサでは無くなっていた。以前のようではないが、顔の血色はいくらか良くなった。
「行こう」
　急かされて道路に出た。どこに行くのかはわからないが、彼の足は俺の家である団地を示している。
「最近、学校はどんな感じ？」
「いつも通りだよ」
「そっか。姫乃ちゃんと夢乃ちゃんも元気かな、また会いたい」
　姫乃と夢乃は、俺の妹、双子だ。
「元気すぎて大変だ。またうちに来ればいい」
「今度お邪魔しようかな」
　なんなんだろう、いつもと違う。茜との会話に違和感がある。
「……深空さんは、あれから来た？」
「来てないな」
　茜は自分の話をするのを明らかに避けている。無理に詮索するのは野暮だろう。聞かれたことを答えるだけに留める。

「……そっか」
沈黙。何を話せばいいかわかっているのに、わからない。さっき自分で詮索するのは野暮だと言ったのに、何があったか聞きたい。学校に来いと言いたい。無理をしてでも、学校に来い、と。
「それで……」
また沈黙。茜はおしゃべりだ。普段は話が途切れることがない。それでもって、相手が話したそうにしていれば、口をつぐむ。コミュニケーション能力の塊だ。しかし、今は話に脈絡がなく、すぐに途切れていく。何を話せばいいか迷っている。さっきから感じていた違和感、これがきっとその原因だ。こっちからも話をしないと、場の空気に殺されてしまいそうだ。
「夕妃姉ちゃん、今どうしてるかわかるか？」
「夕姉？」
医大に通っていると聞く茜の姉ちゃんは、前まではよく遊んでくれた。頭が良くて、サバサバした性格の夕妃姉ちゃんは、茜の家の母親的存在だった。今は医大に通うため、どこかの街でひとり暮らしをしているらしい。
「元気だって言ってたけど、少し心配だなぁ。バイトのお金をこっちにたくさん送ってくれるんだけど、夕姉の遊んだり買い物したりする分がなくなりそうなくらいなんだよ、だから……」
「夕妃姉ちゃんが仕送り？　こっちから出してるんじゃないのか」
「あっ……」
茜が立ち止まった。慌てて口を閉じる。思わず痛いところを突いてしまったみたいだ。
「そう、そうなんだ……」
大きなため息をつき、またゆっくり歩き始めた。
「パパがね、ああいや、お父さんが」
そう言い直さなくてもいいだろう。茜が父親のことをパパと呼ぶのは、ほとんどの同級生が知っていることだ。
「無理に言わなくても」
話を遮る。
「ここまで言っちゃったんだ、大和くんも最後まで知らないと気持ちが悪いだろ？」
それはその通りだ。だからって、茜が俺に全てを話す義務はない。まぁ、好きなようにやらせよう。話して楽になるのなら、その方がいい。
「お父さんが、ちょっと調子が良くなくて、長く仕事を休んでてね……」
茜の家は片親だ。茜が小さい頃に離婚したのだという。だから、少し前まで家事は茜と夕妃姉ちゃん、それから茜パパで分担していたようだ。今は二人で分担となるのか。で、茜パパの調子が良くないのなら家事は茜が一人でやっているのだろうか。俺は普段家事なんかしないし、どれだけ大変か分からないが、大変なのは大変だろう。

「それでね、あ……ごめん、やっぱりここまでいい？」
「ああ」
「礼恩がよく来てくれてたんだけど、この間体育大会もあったから忙しそうでさ。大和くんが来てくれて嬉しかった、ありがとう」
　茜とは別クラスの礼恩は、コミュニケーションを広く持たない。でも、茜と一緒にいる姿はよく見かける。髪を伸ばしていて、運動神経抜群で、体育委員会の委員長をしていて、茜と時期は違うが、同じ転校生で、とにかく不思議な奴。考えると、茜が呼び捨てで呼んでいる奴は、礼恩だけだ。なんなんだろうな、あいつは……。
「じゃあ、また！」
　その声にハッとして振り返ると、茜は元来た道を走って行ってしまっていた。気づけば、目の前には団地が立ち並んでいた。

　授業をろくに聞かず、ただ自分の存在意義について考えていた昼下がり。病んでいるようだが、これが病まずにいられるか？　だんだん考えるのも面倒で阿呆らしくなってきたので、考えるのをやめる。五限目、進路指導の授業。もうそろそろ高校を決めなければまずい。茜は週に二、三日来るようになったが、今日はいない。深空は相変わらず来ない。あれ……そういや、二年の時、深空は県内トップの私立に行きたいとか言ってなかったっけ？　どうするんだろうあいつ。家を訪ねたいとはつくづく思っているが、茜とは違い、家が反対方向な上、かなり遠い。あまり行く気にならないというのが本音だ。そもそも俺が茜や、深空の家に行く義務も意味も自分でつくっているだけで、別に行く必要はないのでは？　秋特有の暑いような肌寒いような気候にやられて、頭が上手く働かない。そろそろ高校決めないとなー、と口に出しても、誰が応えてくれる訳もなく、この時彼らの家を訪ねる意味を思い出す。
　今日はこの五限で終わりだ、部活も引退した。今日行くことにしよう。
　深空は自転車で登校していた。この辺は高低差が激しい。行きはいいが、帰りが上り坂だらけだ。部活を引退してからも体力づくりには励んでいたからさほど問題ではなかったが、相当ハードな通学路だ。自然が多いわけでもない、アスファルトに覆われた道を行く。地面からの照り返しは、体育大会の時とさほど変わらずきつい。
　深空の家は迷路のような住宅街の一角にある。入り組んでいる道にはやきもきする。まあ、深空の家は方向音痴の奴でも一目でわかるくらいでかい。門があって、池があって、そのほとりには異様に白くてリアルな像がいくつか立っている。思春期でなくても、なんだか目を逸らしたくなる。玄関の上には大きなバルコニーがある。深空の部屋はそこだ。裏にまわると車庫があり、四台は入ると深空は言っていた。普段は軽自動車が一台止まっている。門の横にある、「Otonashi」と

書かれた今どき珍しい表札を確認し、インターホンを鳴らす。応答したのは深空ではない。
「通用門は空いていますよ」
やっぱりこの答えが返ってくる。大きな門の隣にある通用門の鍵が空いていることは知っている。いつでも入っていいと言われているが、それをするのは忍びない。通用門を通って玄関扉まで行くと、扉が開いて、中に招き入れられる。靴を脱ぎたくなるが、その必要はない。
「深空さんなら部屋にいますよ。呼びましょうか、部屋に行きますか？」
よかった、退院はしているようだ。この人は深空の家の家政婦の長谷川さん。最初に深空の家に来た時は本当にびっくりした。家政婦なんか、アニメやドラマの中の存在で、実際にいるとしても、同級生の家にいるとは思わない。長谷川さんは、見た感じ五十歳くらいで、どう言えばいいだろう、ふくよかな女性、と言えばいいかな。髪の毛を低い位置でまとめて、格好も上品だ。うちの母親とは恥ずかしくて比べられない。平日ならいつもいる人で、掃除とか炊事とかをしてくれるらしい。こんなふうに物腰が低くて、優しい人だ。
「あ、いや、部屋に行きます」
「そうですか」
「深空の部屋わかるんで……」
長谷川さんは聞こえなかったのか、そのまま深空の部屋に向かっていった。

深空の部屋は二階、日当たりがとてもいい。広さは、普通だが、ものが少ないからとても広く思えた覚えがある。
「深空さん、お客さんですよ。準備ができていたら……」
「すぐ行きます。応接室ですか？」
部屋の中から聞こえる深空の声はいつも通りだった。低めの安心できる声。茜のように元気がないわけでもなく、本当にいつも通りの声だったから、安心すると同時に、少し腹が立った。
「いえ、ここにいらっしゃいますよ」
「え、えぇ？　どういうことですか？」
深空が狼狽える声が聞こえる。くぐもった声が少しずつ大きくなって、扉が開いた。糊でパリッと仕上がった白いシャツ、黒いスキニーパンツ、靴ではなくて、ふわふわしたスリッパを履いている。扉の近くに小さな靴箱がある。すぐに俺を見つけて言った。
「わお！　大和、よく来たね」
こんなに元気そうなのはなんだか拍子抜けというか、内心イラッとした。元気なら学校に来いよ、口からこぼれそうになったせりふを飲み込む。
「お菓子を持ってきましょうね」
長谷川さんが言ったが、深空が、
「私の部屋にお茶も菓子もあるので大丈夫です、ありがとうございます！　さあ大和、入れよ！」
と、嬉々として言う。深空の一人称について少し補足する。

深空は男子だし、なんだか、男子って言うのも似つかわしくないほど大人っぽい。言ってしまえば、男性の方がしっくりくる。背が高くて細い枝みたいだが、俺から見たら、その辺を歩いている高校生か大学生みたいな背格好なのだ。俺も背は高い方だが、深空には及ばない。さっき長谷川さんに声をかけられた時に応接室がどうとか言っていたのは、よくは知らないが、応接室で大人の人と話をする……だったかな、まあそんな感じのことはあるらしい。中学に上がっていきなり一人称が私になったことはびっくりした。その前は普通に「僕」と言っていたからな。イメチェンかとひやかしたら、「ちょっと癖が出て……」と言葉を濁していたのを覚えている。どういうことだろう。一週間くらい「俺」になったこともあるのだが、似合わなすぎて、深空が「俺」と言うたびに俺と茜が笑ってしまって、気を悪くしたようだ。

深空から同じようなもふもふしたスリッパを出され、白い運動靴からそれに履き替える。

「かばんを貸して、こっちに置いておこう」

言われるがままに差し出す。俺のかばんは小さな棚の上に丁重に据えられた。

「座ってて、お茶を淹れるから待っていてくれ」

そう言って、深空は紅茶を淹れる準備を始めた。深空のテンポに流されているのを感じつつ、なるようになるかと楽観視している自分がいた。

大きな窓は白いレースのカーテンで覆われていて、直射日光が入らずに光だけ通していた。時々カーテンがふわりと揺れ、涼しい風が部屋に流れる。白い陶磁器のティーセットにお湯を注ぐ深空の手は優雅だ。紅茶は苦手だが、彼のおかげでかなり詳しくなった。

「……退院おめでとう」

社交辞令くらい、俺にもわかるさ。深空は、茶葉をポットに入れる手を止めて、嬉しいような悲しいような、どっちつかずの笑みをたたえて、ありがとうとだけいった。話が進まない。出来るだけサラッと流すように聞いてみる。

「学校、来ないのか？」

「……そうだね。行けない、かな」

軽めに聞いたつもりだったが、やはり聞かなければよかったと後悔した。深空は、今度は手を止めずに応えたが、明らかに悲しげな笑顔をつくり、声のトーンは落ちてしまった。

「どうしてだよ、行ってみないとわからないじゃないか」

深空はゆっくりとガラスポットの蓋をして、砂時計を逆さにした。そして大きく息を吸った。

「わかりきってるさ、そんなの。一学期中一回も顔を出さなかったのに、なんで行ってみないとわからないなんて言えるんだ」

深空は普段の様子からじゃ想像できないほど饒舌になった。いや、普段も俺よりは話すが、自分の話をしようとしない、そもそも聞いたこともない。だから、こんなに自分を曝け出すような喋り方には、驚きどころか、恐怖さえ感じた。

深空は前から完璧主義とまではいかないが、失敗を好まない……ほとんどの人が好まないが、失敗することに対してかなり抵抗がある。準備は万端でいたかったのに、準備してきたことが無に帰してしまった。ダメージは相当だろう。

立て続けに話をされ、深空と話している時にこんな経験はなかったから、びっくりした。もうほとんど話の内容を覚えていないが、要約すると、深空は夢を諦めた、ということらしい。

ずっとうるさく喋っていた深空が、急に黙り、ふらりと数歩下がり、そのまま後ろのベッドに身を投げ出した。肩で息をしているところを見ると、深空からしてもかなり喋ったんだろうな……。荒い息をおさめようと、腕で顔を覆いゆっくりと深呼吸している。何をぼうっと見てるんだ、俺。深空は病み上がりなんだぞ、労わるとか、長谷川さんを呼ぶとか、できることは……できないよなぁ、自分が原因で取り乱した人を労わることができるような高度なスキルはない。悪戯に声をかけてもっと状況を悪くするのは得意技だ、妹たちが証明する。長谷川さんがどこにいるかなんて正直わからない。この家はデカすぎて全貌を知らないからな。

「……ごめんよ」

結局為す術なく、ぼうっと真っ黒になった紅茶を見ていると、深空がボソリと言った。

あんな大声を出す、大声というか、叫ぶというか、そういう声を出している深空に驚かされたと思ったら、今度は、こんなになよなよした態度をとる深空にも驚かされた。なんでそんなに情緒不安定なんだ。

深空のどうしようもなさにだんだんイライラしてきた。どうしようもなさなんか俺が言えることではないが、俺ではなく、深空がどうしようもないことに腹が立っているのに気づいた。

「……」

何か言ってやろうと口を開いたが、その何かが思いつかずに吐いた息だけが空中を独り歩きする。

いきなり深空がベッドから起き上がった。いつ流したのかわからない涙を拭って深空が言う。

「付き合いづらいだろ、私なんか。不快に思ったならすぐに離れて大丈夫だから」

これは帰れと遠回しに言っているのだろうか。わからない。

「そんな言ったって……これからどうするんだよ」

「さあ、どうにでもなるよ。ならなかったら、野垂れ死にするだけだろうし」

投げやりに言われた。

堪忍袋の緒が切れるとは、こんな感じなんだろうか。体が勝手に動いた。自分でも何を言っているかわからないが、何かを吐き捨てながら自分の行動にはっきりと気がついたときにはもう遅かった。勢いがついた手はコントロールが効かず、狙いを外すことなくベッドのふちに座っていた深空の左頬に鈍い音と共に命中する。前まで、人を殴ってもこんなに生々

しくなかった。深空を殴った直後は、その生々しい感触に驚いた。よく平気で人を殴っていたな。その後、少しずつ自分のやってしまったことを理解して恐怖を覚えた。恐怖は後悔に変わり、深空の顔を見ることができなくなって、棚の上の鞄を取り、勢いのまま深空の家を後にした。

それから、深空を殴ったこと、深空に謝らずに帰ってしまったことを、後悔したが、深空の家に出向くことはできなかった。俺は中学皆勤の目標をあっさり捨てて、二日間ズル休みをした。深空がすぐには学校に来ないことはわかっていたが、万が一来たときに合わせる顔がなかった。

喧嘩っ早い性格は、時間をかけて直したつもりだった。すぐに手が出る癖は、なくなっていると思っていた。いじめについては反省した、確かに反省したはずだった。それなのに、いとも簡単に友人を、親友と思っていた人を傷つけたものだ。

小学生の頃、いじめをやめるよう指導した先生は、俺に痛みを知れと言った。単純に殴られた痛みだけじゃない、痛みにはいろいろある、と。すっかり忘れていた、いや、覚えてすらいなかった。何年前の身に入らなかった話、指導を受けた覚えもない話を、どうして今頃思い出したのだろう。鉛を飲み込んだみたいに体が重くなった。

俺も、他を殴ってばっかじゃなかったさ。殴って殴られて、まるで少年漫画みたいな生活をしていた。同じように喧嘩っ早いやつと毎日のように喧嘩して、いつも怪我をしていたのを覚えている。怪我をして、めちゃくちゃ痛かったのも覚えている。だから、痛い、という感覚は知っているものだと思っていた。

また、ため息が出る。テレビも電気も点けずに、居間の卓袱台に突っ伏したまま、どれだけ経っただろう。急にドアチャイムが鳴る。父親も母親もまだ仕事中、妹たちも小学校に行っていて、家には一人きりだったから、家の中は静かで、ドアチャイムはとても大きな音と感じられた。ふと時計を見る。三時半、妹たちが帰ってきてもいい時間だ。でも、帰ってきたのなら、チャイムを鳴らさなくても良いだろう。もしかして、鍵を忘れて家を出たとか……。それか、通販でも届いたかな。思案しながら玄関へ向かう。開けたドアの向こうにいたのは、

「やっほ、大和くん」

「……茜？」

何をしに来たのか、茜がそこにいた。クリアファイルを押しつけられた。

「はい、今日配られたプリント。これが週報、学級通信、それと社会の授業プリントと理科のワーク。今週の宿題は宅習二ページと、そのワークの十六番と十七番、それといつも通り日記……あとなんだったっけ？」

茜が一息に説明して、急に階上を見上げる。俺の家は団地の三階で、その上は別クラスの、自称茜親衛隊長、宮崎綾の家だ。ひょこっと階段のザラザラした手すりから顔を出した。きっと一緒に話しながらここまで来たのだろう、宮崎が知る

はずのない別クラスの宿題を把握していた。いや、学年統一の宿題か。
「社会の厚物！　来週末までに地理を終わらせて提出！　あんなの、絶対終わらないよー」
「あーそれ本当に忘れてた！　僕も終わらないかも」
くしゃくしゃと頭をかきむしる茜を見て、宮崎が「茜くんカワイー！」と……いつも通りだ。
「大和くん、皆勤賞目指してるって言ってたから、ここ二日心配したんだよ。でも、元気そうでよかった！」
「言ったでしょ、バカは風邪ひかないのよ。どうせ、ズルなんでしょ」
労る茜、貶す宮崎。茜が、皆勤賞の話みたいな小さな話を覚えていることはいつもの事だからさほど驚かなかったが、宮崎は全部お見通しみたいに言っていて、あながち間違ってはいないから内心ドキッとした。
「ズルで二日も休むかよ」
対抗して、嘘じゃない嘘を言った。
「それに、俺バカじゃねーし、お前よりは頭いいわ」
追い討ちをかけてみる。自分にブーメランが刺さった気がする、バカじゃないのかと自問自答する。バカじゃなければきっと、感情に身を任せて友を傷つけたりしないだろう。
悟られないように宮崎の顔を見ると、みるみる真っ赤になっていった。
「あーもう！　あんたってやつは……！」
それだけ吐き捨てて引っ込んでしまった。
「……大和くん、それ、僕にも大ダメージが」
苦笑いする茜。やっぱりいつも通りだ。
階下が騒がしいと思ったら、夢乃と姫乃まで帰ってきてしまった。階段は大混雑になってしまった。
「あかねくんだー！」「なんでいるの？」
「大和くんにプリント届けに来たんだよー」
「えーありがとうねー！」
姫乃が母親の真似をして言う。
「やまと、おれいしなさい！」
夢乃まで……。ここで、確かにありがとうとかなんとか言っていないことに気づいた。ただ、夢乃に言われたあとにするのが、兄として情けないような小っ恥ずかしいような気持ちになった。しかしここでしっかりと挨拶をしなければ、しなかったで、兄としての面子がずたぼろになる。
「あ、ありがとう……」
かっこよく面子がどうとか言ったくせに、こうやってもごもごするのはどうなんだろうな。
「どういたしまして」
茜が応える。いつものふわふわした、花が飛んでそうな笑顔だった。
「それじゃあ僕は帰るね、また月曜日に！」
「ああ、またな」
夢乃と姫乃を家に入れながら、階段を降りていく茜を見送

る。ドアを閉めようとしたそのとき、茜が階段を駆け上がってきて言った。
「来週から冬服移行期間だから半袖着て来たらダメだってこと、言い忘れてた！」

月曜日の朝、しっかりと起きて食卓に向かう。
「大和おはよう、調子はどう？」
母親が声をかけてくる。先週の二日間、理由を聞かずに休ませてくれた母親には感謝だ。もっと親孝行しないとな……とは言うが、母親に対して、だ。
「まあまあ」
父親も妹たちも起きてきて、いつも通りみんな揃って手を合わせる。これがうちのスタイルだ。今日の朝食は食べ飽きてしまったスクランブルエッグ、スープと白飯。黙々と食べる父親、ボロボロこぼす妹たち、それを片付ける母親。それを見ながら食べる俺。
「……はぁ」
意図しないため息が出てしまった。
「あー、やまと、ためいきしたー！」
「ためいきすると、しあわせがにげるって、ひめのともだちがいってたよ」
「じゃあ、ゆめがやまとのしあわせたべとくね」
夢乃が空中を掴んでそれを食べる仕草をする。ふっと笑ってしまった。昨日から思っていたが、嵐の外はいつでも晴れているんだろうな。

月日は過ぎ、中学最後の文化祭も終わってしまった。俺と茜は劇の裏方をした。大道具を運んだり、舞台裏で茜が役者と喋っているのを傍観したり、傍観していただけなのに意識高い系女子に叱られたり、礼恩に睨まれたり、劇の間はそんな感じだった。深空はもちろん来ていなかった。
一年は地域の伝統や魅力についての創作劇と決められている。二年から学年で選んだ演目ができる。二年の劇はなんだか道徳めいていてあまり面白くなかった。三年のは、去年の劇の続編である。去年はというと、ミュージカル好きの先生が中学生でもできそうなミュージカルを少し書きかえてくれた、その脚本を使った。それをいたく気に入った主人公役が、そのミュージカルの原作に続編があることを知り、今年は役者有志みんなでその脚本を一から書いたのだ。役者有志の数は多くなく、新規の有志もほとんどおらず見知った顔だったため、前回と同じ役があるなら配役は同じにしようと、話は進んだ。しかし、重大な問題が発生した。深空のことである。深空は去年の劇で、キーマンである謎の男を演じた。深空の演技はとても上手く、劇の初めの語りかけで客全員を物語の中に引き込んだ。演劇に詳しくない俺が言うんだから本当だ。謎の男は、続編でも登場する。役者たちは決断した。彼の席を開けておくことにした。ギリギリまで待って、それでダメだったときは他がそれを演じる。俺は裏方だから知らなかっ

たが、台本はかなり前に先生から渡してあったそうだ。用意周到だな。結局深空は来なかったから、そのほかの奴が演じたが、皆が何か足りないと思ったことだろう。演じた本人も、ということだ。その演じた奴は、去年も劇に出ていて、そのときの役は当たり役だった、らしい。去年の自分とも、深空とも比べられて、どう思ったのかは知らないが、俺だったら演じ切れないな。そもそも舞台に上がりたくないが。

そのこと以外は、誰かが少しせりふを間違えたくらい。そして大団円まで。去年と同じように感動をそそる形で終わった。

めざとい奴らはいるものだ。劇が終わった後、何人かの同学年の生徒が客席の一番後ろの端に走っていった。なんだろうかと思いつつも、裏方として、劇の後始末をしていた。そこに、生徒会の副会長が声をかけてきた。小学校が同じだった副会長は、俺とはそうでもないが、深空と仲がいい。なぜかはわからないが、俺にも構ってくる。

「おい、原、行かないのか？　深空が後ろに……ほら、今もみくちゃにされてるぞ」

指差す先には、もう何人もの生徒が群がっている真ん中に頭ひとつ抜けている深空の姿があった。あいつの人気の良さがよく分かる。近くには長谷川さんが立っている。長谷川さんが俺の視線に気がついて、微笑んだ。その表情だけで、無線みたいに長谷川さんからのメッセージが受信される。――深空さん、怒ってなんかいませんよ、早くこっちに来てはどうですか？

俺は、今すぐにもそこへ行きたかった。ためらう気持ちも少し、いや、その気持ちのほうが大きかった。副会長は早く行けよ、と言う顔で俺を見ている。なんて涼しい顔をしているんだスクールカースト上位め。

「……あとで行く。ここの片付けしなきゃな」

「どうしたんだよ、照れてるのか？」

副会長を無視し、片付けを再開すると、副会長は肩をすくめてどこかに行ってしまった。

ある程度時間が経ち、深空の周りが静かになったことを確認し、そっちへ歩いていった。深空は怒っていないかもしれないが、自分のしてしまったことを後悔している気持ちは、深空に謝らなければ拭えない。深空は、近づく俺にすぐに気づいた。

「大和！」

いつも通りの晴れやかな笑顔。久しぶりに見た制服姿。決心はついているつもりだったが、深空の目の前に立ったらやっぱり口籠もってしまった。反射的に顔を伏せてしまう。

「あ、あのさ……えっと」

深空は俺の肩を二回優しくたたいた。顔を向けると、深空は少し微笑んだ。と思ったら、すぐに真面目な顔になった。

「……殴ったね、親父にもぶたれたことないのに！」

深空はとても演技が上手いっていう話はしたが、これは演技なのか、本心なのか本当にわからなかった。せりふはふざ

けているのだが、顔と声が本気なのだ。でも、そのおかげで、つっかえていた言葉がスルッと出てきた。
「あぁ……それは、本当にごめん」
深空は、急にいたずらっぽい笑みを浮かべた。それで、すぐに堪えられなくなったのか、大声で笑いだした。笑いすぎて、目に涙がたまるほど笑っている。迫真の演技だったとわかったけれど、こっちは誠意を持って謝っているのに、という小学生みたいな気持ちになった。
「笑ってしまってごめんよ、そんな顔するなって」
深空は俺のむっとした顔を見て、よけいに笑っているみたいだ。そう考えると、そんな顔をしていることが、本当に阿呆らしくて、俺もめいっぱい笑ってやった。
「本当にありがとう。君は私を救ってくれた」
ひと笑いして、息を整えてから深空が言った。
「え？」
「過言とかじゃないさ、君が私をここに連れてきてくれたんだ」
どういうことか、なんとなくわかった。別に聞く必要などなかったが、あえて、というか、思わず聞いてしまった。
「怒ってねえのか？　俺が怖いとか、嫌いになったりとか……」
「まさか！　そんなこと、私が考えると思ったのかい？　それなら少し心外だなぁ」
深空はオーバーリアクションで、がっくり肩を落とした。
それから、穏やかな表情で付け加えた。
「大和がその……人をいじめてたことはもちろん知ってる。あの頃に、君の友としてそれを止められればよかったかもしれない。……後ろを振り返っても何も変えられないね」
それからまたにやっと笑って言った。
「大和が私を一発殴ったことくらい、いつかはされてもおかしくなかっただろ？」
悲しくなった。確かにそうなのだ。俺にそのつもりはなかったが、その通りだったのだ。顔に出たのだろうか、深空が慌てて言った。
「ごめん、今のはふざけた。本当はね、その時は怖かったし、痛かったよ、めちゃくちゃにね。大和が私を傷つけるなんて思っていなかった。ひどい思い上がりだよ。私は大和がいじめっ子だったことを知ってるけれど、それを直そうと努力してたことも知ってる。大和が私に手をあげた事実は変えられないけれど、それと同時に、私が大和にそうさせるくらい嫌な奴だったんだろうなって。もし、今も私のことを不快に思うのなら、ぶん殴ってくれても、離れてくれても構わない、前と同じように」
ゆっくり、言葉を選んで話す深空を見ながら、少しずつ内容を噛み砕いていく。何度も何度も俺が深空を殴ったという事実を突きつけてくるのはどうしても居た堪れなくなったが、正直に話してくれる深空に向き合って話を聞いた。
「でも、私も努力したんだ。これからも努力し続けるつもり

だ。それで君が私と行動を共にするのを嫌だと思わないのなら、ぜひ私と一緒にいてほしい。……私は寂しがり屋だからね」

最後で少し笑ってしまった。

「何、深空が寂しがり屋だって？」

「君も、だろ？」

また二人して笑い出してしまった。

「ずるいよ、二人だけで楽しそう。僕も混ぜて！」

気づくと、茜も近くに来ていた。深空が言う。

「茜はさっきまでずーっと私を独り占めしていたろ？」

「そんなの覚えてないもんね！」

そんな茜を見て、深空はまた吹き出した。今日の深空は何かあったらすぐに笑う。箸が転んでもおかしいらしい、とは言っても深空は男子だぜ。

そうやって雰囲気に流され、久しぶりに三人で笑いあった。ひとしきり笑ったところで、担任の先生からいつまでバカ笑いしているんだと水を差された。閉会式を始めるぞ、と。周りはまだ式を始めるには騒がしかったが、始めるらしい。閉会式のために深空とまた後でと一時の別れを告げた。茜がそそくさと行ってしまってから、深空は俺の身長に合わせて少しかがんだ。そして、俺の耳だけに入るような低い声で言った。

「本当にありがとう。君の言う通り、私は恵まれているね」

俺、そんなこと言ったっけ。

席に座り、閉会式の開始を待っていると、体育館にアナウンスが入った。

「まもなく、閉会式を始めます。生徒の皆さんは、席についてください」

その声は、深空の声だった。深空のよそいきボイス、二年の頃まで毎日のように聞いていた、校内放送の定番。そもそも少ない放送部男子だったが、アナウンスを担当していた男子部員は深空だけで、そのことでも有名だったし、校内の人気者だった。しばらく深空の放送がなくなったことも校内に知れ渡っていた。だから、そのアナウンスを聞いた周囲の生徒もザワザワとそれについてうわさし始めたから、かえって騒がしくなってしまった。だんだん静かになっていったのは、生徒指導の体育教師が舞台袖に絶対に生徒の目に入るように立っていたからだ。

そして始まった閉会式は、そのまま深空アナウンスで進行した。なぜあるのかわからない生徒会長の話と、校長先生の講評を聞いただけで、イレギュラーは起きなかった。

閉会式は終わり、何度目かの学年全体写真を撮った。もちろん、深空を入れるためだ。深空は、例の謎の男役をした生徒に、衣装であるマントと、仮面、帽子を着けさせられていた。遠慮していたようだったが、結局折れてその格好のまま写真を撮った。俺の目線が遠い理由は、深空が真ん中に、俺は端にいたからだ。人気者すぎる。茜はここぞとばかりに周りの役者を押し退けて深空の隣にいた。俺も勧められたが、

そんな勇気はなかったな。

その写真は、あんなに遠慮していたとは思えないほど役のオーラを出した深空、その隣のいつも通り元気な茜、それから、昔みたいに自然な、満面の笑みの俺が写った。もちろん他の同級生も写っていたが、俺にはその三人が際立って見えた。見返すと、同じような笑みがこぼれた。

ただ幸せが在らんことを

鹿児島情報高等学校　三年
村山伊緒

君がいれば、私はそれだけで生きていける。
わたしだって同じだよ。きみの隣なら、息ができるの。

空港から乗り継ぎを繰り返し、最後に乗った古びたバスを降りて、馴染みのない土地の地面を踏んだ。未だ私の知らない匂いのする街は、陽光に照らされ潮風に吹かれながら、慎ましく佇んでいる。まだ春を名乗るには早すぎるような風の中に新しい生活の気配を感じて、なんだかワクワクした。ガラガラと重たい音を立てるキャリーケースには、生活するのに必要最低限の荷物（飛行機に乗せる際には『heavy』の札を貼られた）が入っていて、私の人生の蓄積そのものである大量の本や小物は、業者が送ってくれる手筈になっている。すぐに搬入できるように、置く場所を決めておかねばならない。新居の間取りを思い浮かべながら、私は細い歩道を歩いた。

きっかけは、きみだったかな。

あの時は学校も違ってしばらく会えない日々が続いて、それでもなんとか連絡を取り続けて、対面で会う友達よりも仲良しだったよね、わたしたち。懐かしいね。離れて過ごした日々はちょっと物足りなくて、でも遠いきみを思う時間もそれなりに楽しかったかもしれない。薄情かな、こんなふうに思うのは。でも、きみにだってわたしと違う進路を取ったからこそ会えた友達がいるでしょ？　そう、わたしの知らないきみを知ってる、ずるい人。あぁ、怒ってるわけじゃないよ、大丈夫。わたししか知らないきみもいるってこと、ちゃんと知ってるから。

それで、なんだっけ。そう、思い出話。うちは家も厳しくてさ、寄り道するのも外食するのも親の許可が全然おりなくて。高校生なのに全然自由がなくて、ほんと嫌になっちゃった。きみと会うのにも『部活の自主練だから』とか色々理由をつけて、なんとか誤魔化して遊んでた。バレたら怒られるな～って、結構怖かったりもしたかな。謝らなくていいんだよ、きみが悪いわけじゃないから。悪いのはあの時の両親たちと、嘘ついてたわたし。きみとどうしても会いたくて、怒られるようなことしてたのがいけないの。怒られたことはあんまりないけどね。というか、わたしに合わせて会いに来てくれてたきみには感謝してもしきれないよ。親とか部活のせいで何回ドタキャンしたかわかんないもん。ごめんね。それでもわたしと一緒にいてくれて、あの時わたしを離さないでいてくれて、ありがと。

バス停から数分、道が悪すぎてそろそろキャリーケースのキャスターがやられるんじゃないかという頃、ようやく目的地に着いた。目の前にあるのは、整えたばかりと思しき庭木の並ぶ一軒家。つい二ヶ月ほど前に借りた借家だ。ここに辿り着くまで、準備や計画期間も含めて実に四年弱。長かったような、短かったような。いざ目の前にしてみると、短かったように思う。何件も候補地を選んで、値段や交通の便、第一の希望である『海の見える場所』を満たす物件を絞っていき、ついに辿り着いた希望通りの家。契約を結んでからも、何度も下見に来た。扉を開くその瞬間が楽しみだ。

玄関先には前の住人が置いていったつるバラのアーチがあり、とても可愛らしい。隣家の大きな庭の付属品に見える二階建てのこの家は、思い描いていたよりは少し大きいようだったけれど、大きい分には困ることもそんなにないだろう。掃除が大変なくらいだろうか。海の近くというのと、もう一つの希望『景色のいい大きな窓』を兼ね備えた中で、貯金と相談した結果、ここが一番だった。

一つ呼吸をしてから、大家さんにもらった鍵を鍵穴に差し込む。ワクワクしながらひねってみると、何故か全く手応えがなく、私の決意は空振りに終わった。鍵は開いていたようだ。まだ引っ越しの荷物も届いていないからっぽの家に泥棒など入るはずがない。鍵は私が持っているこれだけではないのだし。あまりにも拍子抜けで気を取り直す気になれなかったので、そのままドアノブを握り、新居の扉をゆっくり開けた。

待つのってすごく辛かったよね。わたしなら、心細くて寂しくて、どうしてこんなに待たせるのって、全部きみのせいにしてたかもしれない。でも、きみは違った。連絡も遅くて会える約束も破ったわたしを、きみは待っててくれた。あの夜、言ってくれたことを、本当に現実にしてくれた。わたしはきみにちゃんと返せたのかな。全部、やってもらっちゃった気がするんだ。だから、今回こそはきみのためにできることをしようって思ったの。今度は、わたしがきみを待とうって。うまくいったかな。

扉を開けた先には、履き古されたスニーカーが一足、綺麗に並んでいた。重たいキャリーケースを持ち上げてドアの段差を越え、扉を閉めた後、靴を観察する。中が冷たいことから推察するに、脱いでからしばらく経っているようだ。　家の中からは、風の音がする。キャリーケースを玄関に置いたまま音のする方へ、私は廊下を進んだ。

どの夜だったかな、きみと夢の話をしたの。会えないままきみと過ごした夜が多くて、どれかわかんなくなっちゃったけど、確かそのうちのどれか。そうそう、コンクールが終わって一段落した頃だったかも。そうだったそうだった。暇な

のに全然遊びに行かせてもらえなくて、きみに愚痴ってた夜だ。懐かしいなあ。

ちょうどわたしがなんか色々どうでも良くなっちゃう時期で、進路とかも決めなくちゃならなくて、親に言われた学校に行くの嫌だけど、でも結局そうしか生きられないって。授業中に居眠りしてたのをみんなに笑われたのも、どうでも良いことなのにそれだけで心が空っぽになって、ふとした瞬間に、「あ、きみがいない」って思っちゃって。全部嫌になったんだ、って話をした時。今思うとすごくめんどくさい人だね、相手させちゃってごめんね。え、気にしてない？　そう言ってくれるとちょっと楽になる。ありがとう。

きみの返事を待たずにわたしが愚痴を垂れてたら、きみが言ってくれたんだよね。『私と君は椅子を二つ並べて、小さな家で幸せに暮らすんだ』って。誰に言うわけでもないけれど、みんなに向けたような力強い宣言。チャットで話してるのに後ろから抱きしめられたみたいな気持ちになって、わたし、とっても嬉しかった。それで思わず送ったんだ。「それじゃあ、きみの隣はわたしだけの指定席だね」って。そしたらきみは『もちろん』なんて送ってくれるから、わたしは夢が溢れて止まらなかった。

「海に近いところがいいな」

『小さなおうち、小さな部屋で過ごしたいよね』

「そうそう。風通しも良くて、外の景色は起きてすぐにカーテンを開けたら、大きすぎるくらいに見えるの。雨の日は雨の音を聞きながら、風が強い日は風が泣く音を聞きながら」

『時に趣味について語って、クイズ番組の珍解答を笑って、ニュースの世界情勢を他人事みたいに眺めながら、素朴なご飯を食べて』

「時々昼まで寝ちゃって、そろそろ起きなきゃなーなんて言いながら二度寝して」

そんなふうに言ってたら、きみの方も止まらなくなってたよね。願いが、想いが、小さな機械の中でごった返した。

『電気もつけないで、窓からさす自然光をカーテン越しに感じながら、本を読んだり絵を描いたり、趣味に興じるんだ。光の強くない時間に縁側にお茶を出して、のんびり日向ぼっこするのもいいね。冬は帰り道にコンビニで肉まんとか買って、少し行儀が悪いけど歩きながら食べるんだ。肉まんの湯気と白い息が重なって』

「風に髪が靡いているところで隣に並んで、小さな子供が遊んでるのを見下ろしたいな。その子たちに便乗して、ストローで作った即席セットでシャボン玉飛ばしちゃったりして。干してた洗濯物を風に飛ばされて、慌てて取りに行って、その後二人で大笑いして」

『私はクッキーを焼こうかな、得意だよ。焼き上がったら君と二人、お揃いのマグカップで温かい飲み物と一緒に食べるんだ』

「体にいいものも悪いものも、きみと食べたい。色違いの歯ブラシも、お気に入りのおやつを詰め込んだ箱も、ペン立て

も、わたしたちだけの世界。使う目処のたたなかった油絵具を引っ張り出して、白いTシャツを買ってきて色を塗ってみたりしたいな。子供みたいなこともたくさんしたい。大人みたいなことだって。初めて飲むお酒は、きみと二人で分けて飲むの」

『それ素敵。きっと私の方がお酒強いよ。だらだらと朝まで喋り続けて、結局どこかで寝落ちして、日が高くなってからシャワーを浴びる。どこに行くわけでもないからって変な柄のシャツを着て、残ったつまみとお酒で喉を潤すんだ。そうやって、不健全を嗜みながら午後に溶けたい』

「そうだね。全部一緒にしなくても、お互いが近くにいることに安心しながら過ごしたい」

心からそう思ってた。思ったことが溢れてた。親にもクラスメイトにも言えなかったわたしの大事な思いは、言葉になってきみのところに落っこちた。

「どうか、穏やかな昼下がりをください」

小さなわたしの願いでこの会話が途切れて、一分くらいした頃に、きみが言った。

『ねぇ、今までのこれ、本にしたいくらい良くない？』

わたしもそう思ったから、そうだねって返したね。だって、口をついてでた願いは、本当に欲しかったものだったの。きみと過ごす、穏やかな日々。夢で終わっちゃ嫌だね、なんて言いながら、その後はどうしてみんな私たちの邪魔をするんだろうって、たくさん悪態ついたよね。二人で吐き出した願いはすごくあったかくて。遠いきみを思う気持ちを、寂しがってたわたしの心を、きみが包んでくれた。

この家に出会うまでに一番大事な宣言を、私は忘れない。この家にいると、本当に成し遂げたんだなと何やら感慨深いものまで込み上げてくる。廊下を進む足取りは軽い。間取りはもう頭に入っている。覚えてしまうほど見取り図を眺めたからだ。あの宣言の記憶には今までも、そしてこれからもきっと、代わる物など現れない。だから高三の時、あの夜。私は君の元に走ったんだ。

「なんかもう、全部嫌になっちゃった」。そう呟いた通話越しの君の声に、何も考えず家を飛び出したことを、私は今でも覚えてる。君が周りに押し潰されて息苦しい思いをしているんだ、私が助けず誰が助けるんだと、何の根拠もなしに心の底から思った。青臭い正義感に駆られてひっかけたサンダルは走るのに全く向いてなくて、後で靴擦れの痛みに泣くことを知りながらも止まらずに走った。夜で車通りも少なかったから、横断歩道の赤信号も全部無視した。夜風の冷たさも街路樹のざわめきも気にしないで走れた。ただ、下手くそな呼吸を繰り返す喉が、ひどく痛んだ。

遊ぶ時は私が君を家に呼んでたから、君の家の場所は正直覚えていなかった。なんとなくの感覚を頼りに、入り組んだ団地の細い道を懸命に駆けていく。そこらじゅうから夕飯の匂いがして、お風呂場からと思しき反響した声が響いて、早

いところはポツポツと電気が消えていく中、私は一人で走っていた。ポケットに突っ込んできたスマホはチカチカ光っていただろうけど、普段からマナーモードにしたままの私はそれに気が付かなかった。仮に気付いたとして、君以外の誰からの連絡なんて、この時の私が受けたとも思えないが。走り続けた足はもう棒のようだったし、喉も肺も脇腹も痛かった。それでも止まれなくて、あやふやな記憶を道標に走っていた。

だから、大きな家の二階の窓から顔を出す君の顔を見た時は、安心感なのか何だったのか、急に足から力が抜けてアスファルトに膝をついてしまったんだ。

「な……なんでここにいるの!? ちょ、ちょっと持ってね、今そっち行くから……!」

びっくりする君を見て、あぁ、文字で、通話で、あんなに言葉を交わしたのに、久しぶりに顔を見たな、生の声を聞いたな、なんてぼんやり思った。ちょっと酸素が足りてなかった。でも、君が窓辺を離れて向こうに行こうとしたから、呼吸もままならないまま私は叫んだ。

「待って！」

「え？ なに、どうしたの？」

君は止まってくれた。二階の窓から身を乗り出して、私の話を聞こうとしてくれた。その厚意に甘えて、私は二、三度深呼吸をした。

「大丈夫？ どうしたの？」

君が心配そうに声を上げる。私は、君に言葉を届けるために、大きく息を吸った。

「……しよう」

「え？」

「あの夜の、あの夢を。現実に……叶えよう、私と。小さな家で、君と私。二人で」

あらん限り、全力で叫んだ。実際は掠れて声にもなっていなかったかもしれない。自分では言い切ったつもりだったがどうだったのか。君は黙ったまま、しばらく窓辺から動かなかった。しかし、私がもう一度息を吸って言葉を継ぐ前にそこを離れた。その瞬間、私は人目も憚らず、道路に大の字になった。ああ、君はどうして何も言わずに行ってしまったのだろう。呼吸が荒すぎて聞き取れなかったのかもしれない。酸欠なのか、眠気なのか、視界がだんだん狭くなっていく。後頭部から伝わる古いアスファルトの感触は、硬くゴツゴツして、冷たかった。

「……君と、叶えたい」

掠れた声で、誰に言うでもなく呟いた。届けたい相手はもう、そこにはいない。いつまで経っても呼吸が落ち着かないから、息が苦しい。もうこのまま目を閉じてしまおうかな、と思った、その時だった。

「わたしも！ わたしもきみと叶えたい！」

間近で声がした。道路に投げ出したままの右手が、ふわりと温かい何かに包まれる。緩慢に首を動かせば、倒れたまま

の私の横で君が泣いている。
「一緒にいたい。海を眺めながら日向ぼっこするの。風に吹かれながら夢を語るの。意味わかんないクイズの答えに大笑いしながら夜を明かすの。全部全部、きみと！」
大声で叫びながら、子供みたいに泣きじゃくっていた。驚いたがそれよりも、君を抱きしめてあげなければと思った。君の涙を拭わなければと思った。声をかけて、背中をさすらないと。しかし、下手くそな呼吸が声を出そうとするのを押し退けて、まだ足りないと酸素を求め続けていた。
「親とか学校とかクラスメイトとかそんなのどうでもいい。わたしはきみと一緒にいたい。わたしの世界にはわたしときみだけいたらいい。きみの世界にはきみとわたしだけいたらいい。もう全部、全部きみとのために生きていたい！」
泣き叫ぶ声が、住宅地にこだまする。普段から良く通る君の声が、私たちと世界を切り離していった。
「目……腫れるよ」
私がやっとのことで出せた声はか細く、だいぶ的外れなことを言っていた。疲れて指すら動かしたくなかったけど、力を振り絞って君の手を握り返した。
「そんなこと気にしなくていいよ。きみが見えればわたしはそれでいい」
君がだいぶ思考が振り切れたことを言っている。そういえば、君は一つリミッターが外れると、とんでもないことを言う人だったな、なんて、頭の片隅で思った。段々と呼吸が落ち着いてきたので、ゆっくり体を起こす。君は部屋着のまま飛び出してきたようだった。それは私も同じだったが。
「ねえ、あの話を現実にしようって、ほんと？」
私が起き上がったことで少し落ち着いたのか、君は涙を拭いながら私に問いかけた。
「もちろん。そのために、ここまで走ってきたんだから」
「走るの、嫌いって言ってたのに」
「君のためなら、なんでもできるから。ね、あの夢、叶えよう、今から。私と」
決意を表すために、私は右手を差し出そうとした。しかし手が砂まみれだったので、そのまま服で拭いた。それが面白かったのか君が笑って、同じように右手を服で拭った。
「うん。わたし、叶える。きみと。どんな形になっても、きみとならできるって思う。約束できるよ。絶対、誰にも邪魔させない」
そして私たちは固く、握手を交わした。大人にも友達にも邪魔できない約束の握手は、手に砂が残っていたようで、少しちくちくした。
「あの夜さ、大声出したせいかうちの親とか近所の人がいっぱい出てきて、めちゃくちゃ怒られたんだったよね」
風の音の発生源はリビングだった。まだカーテンのついていない眺めの良い大きな窓は開け放たれて、家中に風を送っている。私の足音に気付いたのか、窓を開けた犯人がこちら

に話しかけていた。
「君が大きな声で私への愛を叫ぶからでしょ？　私は声も出せないくらい疲れてたんだから」
「何それ、わたしの愛が大きすぎたってこと？　もー、世界の許容範囲が狭すぎるだけだよっ」
　風の吹き込む窓辺に君はいた。外に足を投げ出して、こちらに背を向けている。
「早かったんだね。南の島から帰ってきた気分はいかが？」
「日差しがあんまりキツくなくていいね。ほら見て、わたしこんなにこんがりしちゃった」
　振り向いた君は、本当にこんがり焼けて帰ってきた。四年前は不健康なふうに真っ白で、いかにもインドアって見た目だったのに。
「きみはあんまり変わらないね。引きこもってた？」
「失礼なこと言わないの。私は室内仕事が多いだけですー」
　海と空、窓の四角に切り取られたふたつの青を我が物顔で背負って、君は私を揶揄う。しばらく会わないうちに君は世界を手に入れたのか、窓の外の景色とよく馴染んで見えた。君はあの夜のあと、親の勧めたように沖縄の大学へ進学した。ここで反抗するのは得策ではない、と腹を括ったのだという。私も専門学校への進学が決まっていたため、それぞれにバラバラの進路をとることになった。
「変わらないね、きみは。わたしの帰る場所でいてくれる」
「今度は君が私の帰る場所になってくれるんでしょう。まったく、結構覚悟決めて鍵開けようとしたのに。開いてて拍子抜けだったんだけど」
「お、じゃあドッキリ大成功だね。慣れないこともしてみるものだー」
「ドッキリにしては雑でしょ、驚きの方向が違うよ。そういう謀は私の芸風だからね」
　二年制の専門学校を経て、就職してから二年間。君が大学を卒業するまで、君のいない四年間を過ごした。離れている間も毎日のように連絡をとって、時には私が君のところへ行き、君が私のところへ遊びに来たりもした。そういう旅行の計画期間もまた、君を思う時間として私は楽しんだ。君もそうだといいなと思う。
「んー、わたしとしてはもう技を盗んだつもりだったんだけど。やっぱり策士はきみの役割だったか」
　頭をかきながら、君は立ち上がる。歩いて行った先には、大きなキャリーケースと一緒に楽器のケースがあった。中には、君と何年も連れ添ったホルンが入っている。
「何事も適材適所でしょ。私は君みたいに絵を描いたり演奏したりできないよ」
「ふふふ。わたしは策士じゃなくて楽師だったか。仕方ないなあもう、ここで一曲凱旋の音を響かせちゃうぞー」
「まだ何も片付けてないでしょう。ドッキリとやらに満足したなら荷解き始めるよ。大騒ぎするのはその後」
「はーい」

のそのそと動き出したら、私たちは空っぽの家の中、最低限の荷物と二人、ここに根付く準備を始める。
「今日は一緒に寝ようよ、ここに布団敷いてさ」
「引越し初日っぽい、採用。でも床で寝たら体バキバキになるんじゃなかったっけ？　薄い布団で大丈夫？」
「大丈夫大丈夫、その痛みも愛として受け入れる」
「明日後悔しないならいいよ、好きになさい」
なんか冷たい！　と叫ぶ声を聞きながら、私も荷解きのためにキャリーケースを取りに玄関まで戻った。
土間に並んだ靴は二足。君のスニーカーと、私の履いてきたブーツ。それが異様に愛おしくなって、スマートフォンで写真を撮った。引越し記念、そして夢が叶った記念。記念ばかりだ。床を傷つけないよう、キャリーケースを持ち上げてリビングに戻った。
「見て、この毛布。実は小学生の時から使ってる」
扉をくぐれば、さっきまで何もなかったはずの床に荷物をぶちまけた君が、少しくたびれた毛布を掲げて笑っている。荷解きが下手なのは変わっていない。沖縄から本土に旅行に来た時もそうだったなと思った。
「何、長年連れ添った毛布に嫉妬しろって？」
「違うよ！　けどそれもいいな」
「ぶれぶれじゃん。その柄はいいと思うよ」
「そうでしょ、可愛いペンギン。あったかい毛布なのに柄がペンギンってところがお気に入り」
ところどころ摩耗して色が薄くなっている毛布は、使用者がどれほど大事に長く使ってきたのかが見てとれるようだった。心なしかペンギンの笑顔も嬉しそうな気がする。伸びてデザインが歪んでしまっているだけかもしれないが。
「そう。まだ寒いし、あったかそうね」
「え、一緒に被る？」
「自分のがあるので謹んで遠慮させていただきます」
「さっきからなんか冷たくない？」
「そんなことないよ。さ、照明もまだ届いてないし、明るいうちに家具の場所も見当をつけておきたいから、毛布と戯れるのも後だよ」
私はキャリーケースの中からいくつか掃除用具を取り出した。ハウスクリーニングが済んでいるとはいえ、まだ汚れている箇所はあるかもしれない。押入れの中とか、シンクの下とか。それが気になるうちはゆっくり休めない性格なのだ。
「じゃあ凱旋の演奏は!?」
「それも後だってば。明日からどんどん荷物が届くんだから準備しないと」
立ち上がって、リビングと同じ空間にあるキッチンへ向かおうとする。すると、後ろから何かに抱きつかれた。何かも何も、この家には君と私しかいない。
「ちょっと、どうしたの」
「どうしたのじゃないよ、何でそんなに急いでるの？」
「なんでって、明日には荷物が届くからって言ったでしょ。

やれることはやっておかないと」
　そう言ったけれど、君は腕の力を緩めない。久しぶりに会ったにしても、今日はなんだか強情だ。何かやりたいことでもあったのかな。
「今日は急がない方がいい？」
「だって、急がなくていいんだよ。遊びに行くな、電話するなって怒る親もいない。課題やれって言ってくるリマインダーもいない。帰りの飛行機に間に合わないからってわたしを帰らせる時間の縛りもない。少しくらい、一緒に楽しいことして過ごそうよ」
　抱きつかれているせいで顔は見えないが、おそらく君は下唇を噛んで、拗ねたような顔をしているだろう。そんな気がする。確かに君のいうことにも一理あるが、私は後顧の憂いを絶っておきたい。
「掃除だけ済ませちゃダメかな」
「だめ。だってわたし、考えてたんだよ。きみより先に家に着いて、出迎えて驚かせる。これは成功したでしょ。そしておしゃべりしながら荷解きして、わたしの演奏聞いてもらおうって。懐かしんでもらおうと思ったのに」
「君の演奏なら、ＣＤ持ってるから毎日聞いてたよ」
「そうじゃない！　ねえ、わかってて意地悪してるでしょ」
「そんなことないよ。……わかった、じゃあ今日は掃除もしない。君のしたいことに付き合うよ」
「うん、絶対そうするべき。最初の一日くらい、やりたいことだけしなきゃ」
　掃除は一応やりたいことだったけどな、という言葉は飲み込む。優先順位ははっきり決まったのだ、私は君を第一に扱おう。
「じゃあこっち戻って待ってて。わたしはちょっと音出しするから」
「うん、眺めてる。まだ明るいし、ここはご近所さんもそんなにいないから、好きに吹いて」
　私は毛布の塊に腰を下ろす。君は広げた荷物の中からガタガタと楽器ケースを引き摺り出して、キラキラ輝く相棒を取り出した。細い管を幾つも動かして楽器を調整しつつマウスピースだけに息をいれると、ぷ、と少し間抜けな音がする。荷物を広げまくっていた時とは裏腹に、楽器に触れる時の美しいくらい繊細な手つきが、私は好きだった。しばらくぷーぷーやったあと、君は楽器に命を吹き込んだ。後ろ向きの楽器のベルから、軽快に音が飛び出していく。
「ん、今日は調子いいかも。あんまり好きじゃないリップスラーもすらすらいけちゃうや」
　調子良く音階をのぼったりくだったりして、楽器と息を、マウスピースと唇を慣らしていく。
「変わらないね、私の好きな音」
「そこは『上手になったね』って褒めてくれるところじゃないの？」
「私は随分前に辞めちゃったから、もう良し悪しはわからな

いよ。でも『好きな音』なのは変わらない」
「確かに。やっぱりそっちの方がいいね！」
君はすぐご機嫌になる。無邪気で、結構ちょろくて、子供みたいで、可愛い。
「よし、もう吹きたいから音出し終わり！　さぁさぁきみのところに帰ってきた、凱旋の一曲だよー」
バルブのレバーをガチャガチャ動かしながら君が言う。
「何を吹いてくれるの？」
「うーん、きみとの思い出の曲も色々あるけど、今回はわたしの今の気分。即興曲だね！」
「じゃあ聞けるのは一回だけか、心して聞かなきゃね」
「録音してもいいけど、今日はしないの？」
「ううん、今回だけの特別として、思い出にする。たとえいつか忘れちゃうとしても、そういう思い出って、なんかいいじゃない」
「たしかに！　なら、なおさら忘れられない一曲にしてみせるよ」
しゃんと背筋を伸ばし、君はホルンを構えた。今は、私のためだけに。
「きみのために吹くから、ちゃんと聞いててね」
「もちろん。どんな曲なのか楽しみ」
すぅ、と深い息の音がして、演奏は始まった。のびやかな前奏は、再会とこれからに向けての喜びのファンファーレに思える。息をするたびに膨らむ体が、演奏に合わせて自然と揺れている。何小節か過ぎると、マーチのような軽やかなメロディに変わった。マーチの中でのホルンは大抵伴奏の裏打ちばかりだが、旋律も似合うなと思った。これはこれからの生活を夢想する感じだろうか。
進んでいくと、今度は楽しく駆けていくような連符が始まる。流れるように指を動かして、途切れることなく息を吹き込んで、スラーもスタッカートも散りばめられた、飽きることのない旋律。私だって君を飽きさせたりしないよ。楽しみにしててほしい。
連符の最後の音を勢いよくのばしたと思ったら、メロディは少ししっとりした感じになった。雨の音に耳を傾けるような、静かな音。弾けるような金管楽器のイメージとは違うけれど、これもいい。そういう時間も君と過ごしたいね。
ゆったりとしたメロディが、少しずつ刻まれていくと思った時には、また軽やかな旋律がやってきた。二拍子かな、これは。スキップするみたいな弾む感じが楽しい。私も自然と体を揺らした。演奏している君も笑顔に見える。短い音も時々あるけど、これは……シャボン玉みたいかな。やりたいねって話もしたっけ。落ち着いたら用意しようか。
即興曲は君の思い。それが私と重なって、やりたいことがたくさん溢れてくる。それは多分、これから暮らしていくこの家の中にもたくさん広がっていて、これからの私たちを包んでくれる。そんな気がする。君もそう感じてるんじゃないかな。だって、ほら。

音が伸びていく。どこまでも、どこまでも。指は軽やかに動いて、何をしたって全然苦しくない。自然と深く吸った息を力強く吹き込んだら、相棒はそれに応えてくれる。そんな感覚は久しぶりだった。ここは決してホールじゃないし、観客だってたくさんはいない。でも誰よりも聞いてほしい、何よりも大切なきみがそこにいる。それだけで、なんだってできそうだった。ねぇ、分かる？　わたし、きみのために吹いてる。今、きみのために存在してる。これがどれだけ素敵なことか。この心地が、どれだけわたしを生かしてくれるか。ううん、わからなくてもいい。ただわたしのそばにいてくれればいい。ね、きみも同じ気持ちかな。どうなのかな。そういう思いも全部、音に乗せた。音にした。

気持ちをそのままメロディにした即興曲は、終わりが見えない。だって、きみへの気持ちに際限なんかないの。止まらないよ、どうしようか。やめてって言われても難しいかも。こうなったら力尽きるまで続けるしかないよね。息が切れて苦しくなるまで。口の中が鉄の味になるまで。唇が痺れて喋れなくなるまで。視界がぼやけたって続けるかもしれないから、そうだなぁ。とりあえずはマウスピースの圧で歯が痛くなるまでかな！

「いや、それは流石にやりすぎだよ。今日は一旦、この辺で終わりにしようね」

考えてる間も溢れる思いを音にしていたら、笑いながらきみが手を叩く。もしかして痛そうな例え話まで音になってたかな？　やり過ぎる性格が出ちゃったな。

きみからストップがかかったので、緩やかにメロディを切り替える。終わりに向かうような、それでいて盛り上がりの雰囲気を少しだけ残した旋律が、メリーゴーランドの終わりのように萎んでいく。それが悲しいものにならないように、なるべく明るく未来への希望を滲ませるように曲を終えた。唇はすでにジンジンと痺れていた。楽器を下ろすと、控えめな拍手が聞こえてくる。

「素敵な演奏だったよ、私のためにありがとう」

そうそう、本当にきみだけのために吹いたんだから。素敵の一言じゃちょっと物足りないけど、今日はこの辺で勘弁してあげようかな。これからまた何回もきみのために吹くと思うから、その時にまたたくさん感想聞かせてよ。きみのおかげでわたしもいいもの吹けてすっごくスッキリした！　というのを視線で伝える。わたしは吹いてすぐは喋れないタイプなのだ。でもきみなら分かってくれてるよね。だって、よかったねって笑ってるもん。

「こんなにいいもの聞かせてもらったら、私からも何か返さなきゃって思うよね」

ふいにきみがかばんを漁り出す。わたしのために何か用意してくれたのかな。楽器のクールダウンとツバ抜きを済ませて、わたしはきみの前に座った。

「本当は今夜か明日渡そうと思ってたけど、はい。おかえり

なさいの気持ちも込めて」
　そう言ってきみが出してくれたのは、抱いて眠れそうなくらい大きなクッションだった。柔らかい色合いと丸っこい形状がとても可愛い。
「えっ、これすごい、ていうかどこから出てきたの!?　四次元ポケット……!?」
「驚くところそこかぁ、残念ながら四次元ポケットはまだ発明されてません。ラッピング自分でやる代わりに、圧縮したまま持ってきてたの。君が準備してる間に開封して、毛布の中で戻してた」
　毛布の塊の中に座ってたのは意味があったんだ！　てっきり、寒いのか毛布が好きなのかと思ってた。やっぱりきみは策士だなぁ。なんて触り心地のいいクッション。
「ありがとう、大切にするね！」
「うんうん、私の代わりに抱いて寝るといいよ」
「そこはきみを抱きしめさせてよー」
　わたしがきみに飛びかかって、二人して毛布の中にダイブした。二人分の毛布はわたしたちを柔らかく受け止めてくれる。
「アクティブだな……。頭ぶつけなくてよかったけど」
「ごめんごめん、愛が溢れた」
「まぁいいけどね。あげたクッションを一瞬で投げ捨てちゃったことも見逃してあげましょう」
「投げ捨ててないよ！　一旦、一旦置いただけだから」
「はいはい、明日からは大事にしてね」
　毛布に埋もれた中で、きみがわたしの頭を撫でてくれた。心地よくて、こんな時間がいつまでも続けばいいのにって思う。
「なんか、幸せって感じするね」
「まだ一日目とすら言えないのに、気が早いよ。これからが本番なんだから」
「一瞬一瞬の気持ちを大切にしたいのー。明日になったらまた明日の幸せを感じるんだよ」
「感受性が強くてなにより。私もそう思う」
　温かいきみの体温が好き。柔らかいきみの手つきが好き。優しいきみの声が好き。知的なきみの言葉が好き。きみのことが好き。隣にきみがいてくれれば、何があってもきっと大丈夫。そんな気がするんだ。きみもそうだといいな。ね、どうかな。そう思って、きみの腕の中からきみを見上げた。何かを察したきみが口を開く。
「君がいたら、多分幸せに暮らせるな。家に帰ったら君がいると思ったら、コンビニでスイーツとか買っちゃうかも。一人だったらあんまり買わないからなぁ。あれ、近くにコンビニあったっけ」
「コンビニはあるよ、歩いて十五分のところに」
「はは、夏にアイスは買えない距離だねぇ」
「食べながら帰っちゃえばいいよ、途中で公園なんか寄ってもいいね」

「お、いいこと言うね。私もそう思う。夏になったら早速やってみようか」
「夏を待たなくても、明日だっていいよ」
「まずは一つずつね。そうだ、あの時やりたいねって言ってたこと、全部書き起こしてリストにしたでしょ。あれも壁に貼らなきゃ」
「そうだった、まずはあっちか。アイスは最後に書き足そうか」
　口をひらけばやりたいこと。目を閉じれば叶えてるビジョン。耳をすませばきみとわたしの笑い声。それは幻聴か。わたしたちには輝くような未来が待ってる、それだけは確実。これからわたしたちは一緒に遊んで、一緒に食べて、一緒に眠って、一緒に苦労して、たくさん喧嘩して、その分だけ仲直りして、また一緒に笑う。喜怒哀楽も悲喜憂苦も山も谷も全部、きみと一緒に。ようやく訪れた穏やかな昼下がりを噛み締めながら生きていく。それがどれだけ幸せなことか、どれだけ難しいことか、今までたくさん味わったし、これからもっと痛感することになると思う。それでもわたしは、きみと生きていく道を選んだ。きみはわたしと生きる道を選んだ。そこに後悔はないし、絶対間違いなんかじゃない。わたしたちは、幸せに。
「ねぇ君、今難しいこと考えてるでしょ。そういうのは私に任せて、君は隣で笑っててよ」
　きみが急に、わたしの鼻をつまんだ。むぎゅ、と変な声が出てしまった。ぐるぐる巡りかけていた思考が止まる。
「何するの、もう。頼もしいんだから」
「人には向き不向きがあるんだから、こういうのは助け合いだよ。ほら、思考を放棄～。得意でしょ」
「それ皮肉？　確かになんも考えたくないってわたしの口癖だけどさー」
　きみのそういうところが、好き。察しが良すぎるんだよ、もう。それに今まで何度助けられたことか。でも、うん。そうだね。
　間違いとか、なんでもいい。明日引っ越し作業が辛くてもいい。きみが隣にいるだけでいい。いまは、そう。穏やかな昼下がりには、穏やかな昼寝こそ似合う。未来のことなんか後でいいんだ。柔らかな毛布に包まれて、きみの腕の中にいられればいい。そう思ったら安心して、わたしは静かに目を閉じた。

　君が隣にいれば、私は何があっても生きていける。
　わたしだってそう。きみの隣で、息をしたいの。

生徒会選顛末記

鹿児島第一高等学校　二年
五嶋　響

ぼくの通っている高校の生徒には、ふたつの派閥があった。ぼくはどちらにも属していなかった。やつらの争いに巻き込まれるのは、ごめんだったからだ。

両極端のふたつの陣営に分かれたのは、一年生のとき、一学期末の生徒会選挙からだった。選挙には、ぼくの同級生で、犬猿の仲のRとEが出馬していた。これが争いの遠因だった。

ふたりは、考え方も、交友関係も、性格も違う。Rは優等生で、使命感が強く、成績のいい生徒からの人気がある。Eは平凡だが、まじめで明るく、友達付きあいも広い。加えて、ふたりにはカリスマ性があった。ふたりのどちらかには、この学校の将来を任せてもいいんじゃないか、とみな、言っていた。

ことに全体演説で注目を集めていたのも、このふたりだった。ふたりの演説は、ほかの候補者の無個性なスピーチよりも、力が入っていた。Rは、安心して通える学校づくりが公約だった。話がうまいわけではない。しかし、データやアンケートを基にした演説には説得力があった。Eはところどころジョークをはさみながら、熱心に校則の改正を訴えていた。

「なあ、どっちに投票する？」

全体演説が終わり、教室へ戻ったあと、友人がぼくに聞いてきた。

「いや、まだ迷っているんだよね。どっちがいいか分からなくて……」

「そうか……ここだけの話だがな」

友人がいきなり声をひそめた。

「Rには黒いうわさがある」

「なんだ、それは」

「知ってるか？　Rの家のこと。このあいだ、汚職なんかで話題になった、政治家と親戚らしいぞ。そして、ここからが本題だ……」

彼はさらに声を小さくした。

「その〝コネ〟と〝カネ〟で入学したなんてうわさだ」

結果は一票の差でRが当選した。次点で副会長になったのはE。Rの友人たちは大喜びだった。いちおうぼくも「おめでとう」と声はかけた。

それから二日経った朝のこと。上履きを履いて玄関を抜けると、生徒会室の前に人だかりができていた。

生徒会室は、学校の玄関を通り抜けてすぐのところにある。合わせて二十人ほどの生徒、先生たちが、なかの様子をうか

がっていた。
「どうしたんですか」
そう尋ねると、先輩がしかめっ面をして応えた。
「夜の間に、部屋が荒らされたらしいんだ」
これが最初の事件だった。重要な書類や備品はごっそり持ち出され、ガラスは割られ、壁には、こう落書きがされていた。
〈不正一家〉
その事件から数日経って、あるうわさが広まった。今回の生徒会選にかかわった選挙管理委員は、みな、Rに買収されていた、と。
だれが言い出したかは分からない。ただ、こういった話だけがひとり歩きした。どうやら委員たちは、Rと食事に行って、そこで依頼と口封じをされたという。
食事の行き先は、焼肉か、しゃぶしゃぶか、とにかく高級なところ。並みの高校生が行ける場所ではない。そこでいいものを食べさせられて、こう言われる。「今度、よろしくな。もし、だれかに言ったら……おれのこと、分かっているだろな？」
Rは生徒会室の件から、一月ほど学校に来ていなかった。その間、Eが一時的に生徒会長の座に就いた。
その初日、こんなプリントが配られた。
「生徒会にやってほしいことを募集します。ぼくができるだけやって、できなかった分は、あとの生徒会が引き継ぎます」
ぼくはとくに求めることはなく、なにも言わなかった。まわりは「学校新聞を作ってほしい」「壁の小さい落書きを消してほしい」とさまざまな意見を出した。
落書きは、生徒会が白く塗りつぶした。二週間に一回発行される、学校新聞も作られた。まっさらなコピー用紙に印刷されている。記事は生徒から募集し、その中でいくらか選んで載せる仕組み。Rの評判はつるべ落としの一方、Eは着実に人気を高めていた。
その一方で、Eを快く思わない人もいる。この生徒会室の一件からはじまった騒動は、Eが生徒会長の座を奪いたくて、仕組んだ事件なのかもしれない、と。ただ、この考えは少数派で、学校全体で一割いたかどうか。
Rが久しぶりに登校したときのことは忘れられない。学校新聞の、Rを非難する記事をわざわざ見せるやつもいれば、すこし席を外している隙に花瓶を机に置くやつ、かばんに落書きをするやつ……しかしRも冷静で、「弁解の場がほしい」と先生へ訴えた。
ある日の昼休み、臨時の生徒集会があった。
Rは壇上へ立つと、まずこう言った。
「このようなうわさを流したのはだれですか。ぼくは、けっして不正をする人間ではありません」
汚職をした政治家とは、名字が同じだけで、なにも関わりがない。料理屋へ連れて行ったこともない。必死にそう訴え

た。そのうち、遠くからでも分かるほど涙で顔をゆがめて、半分泣いたような声になった。

その翌朝、また生徒会室の前に人が集まっている。近づいてみると、一メートル四方ほどの巨大なポスターが貼られている。

〈うそ泣き。汚職。学校の面汚し。不正入学〉

罵詈雑言が大きく書かれ、中央には写真が載っていた。顔は隠れてだれかはわからないが、二人が焼肉屋で座っている写真だ。人物の片方には「R」と矢印が書かれている。

前日のことがあり、生徒の大半は「Rがかわいそうだ」と思ったが、なかにはまだRを疑うやつがいた。こんなことされて当然、天誅だ、なんて言うやつもいる。この写真も、本物だ、うそだ、と大きな議論になった。

これまでもすくなからず兆候はあったが、学校が「R派」と「E派」に分裂したのは、この事件からだ。

Eは今の地位を失うまいと、学校新聞に、情報の正誤にかかわらず、偏向的な記事を載せつづけた。Rをおとしめようとしたのだ。投稿するやつもやつで、むちゃくちゃな、情報の出どころもはっきりしない記事を投稿するのもいた。

あまりに記事が多いから、編集委員会を作って、彼らに任せようなんて話も出た。編集部員は一応公平に選ぶことになっていたが、全員Eの派閥からだった。

それに対して作られた、Rが編集責任者の、もう一つの新聞。「学校新聞」と名前は同じだが、コピー用紙ではなくざら紙に印刷してあった。Eのほうは「コピーのほう」、Rのほうは「ざらのほう」と呼ばれた。こちらも生徒から記事を募集して載せていたが、Eに劣らず偏向的だった。

この事件を語るうえで「党」の話は欠かせない。党が現れたのは、このころからだ。

おおまかにふたつと言っても、細かく分けるといくつもの考えがあり、その似た考えを持った生徒らが党を組んで、話しあう。連盟を組む。ただ、これは政治の党とは、だいぶ違った。

もちろん、相手との融和を図るための穏健的な党もあった。しかし、それは全体の二割程度、八割は「党」より「宗教」、「宗教」より「カルト団体」といった方が適切だった。

党はだいたい、放課後の教室や空いている部室に集まって、活動していた。彼らの使っている部屋の前を通れば、なにかを議論する声や、大声で合唱する声、さらに怒号、いろいろな声が聞こえた。

一部のカルトじみた党には、厳しい規則があった。たとえば「毎朝六時に登校して、八時まで議論する」とか「週に一回、党首に、なにかしらの謝礼を渡さなければいけない」とか――すこしでも破ってしまうと、党から追放された。穏健派は、彼らを取り込むことで勢力を伸ばそうとした。

そのうち、過激な党同士の争いが、ゲリラ的に発生するよ

うになった。しかし、R派とE派の争いではなく、同じ派閥どうしの争いが大半だった。

争いと言ってもさまざまな形があった。人質を取り「返してほしければ金を払え」ということも、会議しているところに乗り込んで行って、暴れまわることもよくあった。

生徒間で解決するだろう、と考えていた先生たちも、ここまでくると見過ごせず、ついに介入した。ふたつの学校新聞に、こんな声明を出したのだ。

「いま、RとEの徒党が和解して、この闘争をやめてくれれば、全員留年なしにします」

しかし、だれも――とくに過激派の指導者層は、争いをやめようとしなかった。もし、いま和解をしてしまえば、自分たちの地位はなくなるし、なにより目が覚めた党員が「いままで、よくもおれたちをだましやがって」と反旗をひるがえしたら、学校での立場がなくなりかねない。

そのうえ党員も、薬物中毒のように、刺激に依存してしまっていた。抗争が一種のたのしみになっているのだ。この抗争をするために学校に行っているようなもので、授業も部活も成立していない。ぼくはいちおう、授業中は板書をしていたが、たいていの人は授業も受けていない。

結果として、この声明はなんら功を奏さなかった。それどころか、一部の流派が教員たちに「宣戦布告」し、授業のボイコットをやったり、職員室で教頭を詰問したりと、学校はさらに崩壊して行った。

生徒会役員たちは、いかにしてこの騒動を鎮めるかということでいっぱいだった。しかし「成功すればいいが、失敗したら反撃を食らうことは間違いない」という葛藤があったためか、まったく役に立たなかった。

生徒会役員だけではない。学校にいる人びと、そしてこの話にかかわっている人はみな、なにかしら異常な状態にあった。こうやって、ぼくが成り行きを語っているのは、とても特殊なことだろう。

先生たちは最初こそ解決を図ろうとした。しかし、この事件にかかわった先生たちの大半は、もはや解決をあきらめ、この流れに流されることを選んでいた。先生たちも、この刺激のない日々に、ちょうど起こった闘争をたのしんでいた。挙句の果てには「〇〇党に入っているやつだけに授業をする」とまで言い放つ始末……ぼくは学校がすっかりいやになった。

近隣の家も、この状況の観察を日課にしていた。理由は単純。マスコミがこの事件を「生徒会闘争」「世紀の珍事件」とおもしろおかしく取りあげ、話題になったから、興味を持ったのだ。毎日のように学校前に記者が張り込み、ときおりカメラやマイクを向けられる。この騒動をたのしむためだけにわざわざ近所へ引っ越すものがやってくる。

学校は授業にならないし、行っていると不要な注目を受ける。ぼくはそのうち学校へ行かなくなった。

ただ――いつのまにか、ぼくもあの非日常に取りつかれてしまったのだろう。新聞やテレビの、この事件についての記事や特集は目を通していた。もちろん、事実はねじまがっているだろうが、知らないよりはましだ。

ふたりの親についても、いろいろな憶測がとんだ。この騒動について、ある社会学者が書いた本が、むやみに売れた。ぼくも本屋で立ち読みした。そのなかに「ふたりの親はいったいなにをしている」という文章があった。

言われてみれば、そうなのだ。ふたりやふたりの取り巻きが無茶苦茶しているのに、親は仲裁もせず、ふたりのやりたいままにさせている。

Ｒの家、Ｅの家は、取材陣がいつも取り囲んでいた。けれども、親が出てくることはなかった。買い物は知り合いに頼んでいたらしい。

ふたりの親が仲裁しなかったのは、もともと家族関係が悪く、このいさかいに賛同していたからではないか、とぼくは考えている。以前、Ｒは由緒ある家の出身で、Ｅは普通の家の生まれだ、と聞いたことがある。もともとＲとＥは仲良しだった、というわさもあった。

ＲとＥのくいちがいか何かが、家族関係の変化に発展して、やがてふたりは仲たがいするようになったのではないか。

もはやＲとＥ、そして彼らの友人たちが起こした喧嘩ではなく、学校内のいざこざでもなく、一種の見世物と化してしまった。いわゆる徒党には部外者によるファンクラブができて、ＲもＥもタレントのような扱いをされていた。

ＲとＥはそれぞれ番組に呼ばれた。ある番組にＲがいれば、裏番組にＥがいる。そのようなことが続いていた。

あるテレビ局が、おもしろがって、ふたりを共演させて、殴り合いになった。さらに一般人たちは熱狂して、本当にリングの上で戦わせてしまおう、という話になった。二人とも、当然勝つ気が、いや、勝たなければならないという義務感があったし、試合は実際に熱狂していた。

都内の有名な闘技場で試合はあった。満員御礼で、立ち見客や、チケットを買い占め高値で売って大儲けするやつもいる。とくに定まったルールはなし。ただ、殺すことや、ナイフなどの凶器を使うこと、噛みつくのことはなし。

試合のあいだずっと、ぼくはテレビの前から離れられずにいた。あれに勝る興奮を覚えたことはない。Ｅの猛攻にかかわらず、最終的にＲが、寒気がするほどに殴り、蹴り、痛めつけ、勝利した。しかし、Ｒは観客席からなだれ込んだＥのファンに集団暴行を受け、二人とも病院送りになった。

それ以降、ぼくは彼らに関して何のうわさも聞いていない。

ただ、ぼくが言えることとしては――大衆が彼らに利用されていたのではなく、彼らが有象無象に利用されていた。それだけだ。

世界を描く少年

鹿児島第一高等学校　一年
砂　憧　柊　時

絵が飾ってある病院の廊下で、二人の人物が話している。
「おじいちゃん。あの、緑色や青色で描かれた絵は何？」
車椅子に乗った少年が聞いた。おじいちゃんと言われた老人は柔らかな笑みを浮かべながら答える。
「あの絵は、昔ここに居た青年が描いたものだよ」
「でも、あの絵のようなもの、この世界にないよ。だって僕、見たことないもん。あんなやつ」
少年は不思議そうに絵を見つめながら言った。彼は見たことがないそのものに疑問を抱いている。
「あのようなものはわしでも、見たことがない。この世界のどこにもあの絵に似たものは見当たらん」
「じゃあ、どうして、その青年はこんな絵が描けたんだろうね」
老人は絵を見つめて言った。
「その青年が言うにはあの絵の景色を見たそうだ。どこで見たのか、いつ見たのかは教えてはくれなかったが」
「ふーん。不思議だね。その人。ねぇ、おじいちゃん。その人はどんな人だったの？」
少年は老人の顔を見た。その目は好奇心で輝いているように見える。
「じゃあ、散歩しながら、昔話をしようかね」
老人は病院の庭の方へ少年の車椅子を向けた。

この世界では、人生の長さは関係なく、選ばれた人が別の人に入れ替わって行く。そして、この世界にいる人のたった一人だけが、体が不完全な状態で現れる。
僕もその一人だった。僕は今までの中で最も体が動かせず、お世話係さんが支えてくれなければ生活ができなかった。一人ではあまり動くことができなかったから、大半の生活をベッドの上で過ごした。
ある日、本を読んでいた時、鉛筆と紙が届けられた。僕のお世話係さんが、ベッドでも絵を描くことはできるだろうから、と言って届けたものだった。人生で初めてもらったプレゼントに当時の僕は心が奪われた。
「今から実際に絵を描いてみるから、よく見ていてね」
真っ白な紙に描かれてゆく黒い線。その線は、この世界のものを真っ白な世界に写すことができた。写されたそのものはずっとこの紙に残って、決してどこかへ行ってしまうことはない。お世話係さんが描いて行く絵を僕はただひたすら見つめていた。
僕はその日から絵を描き始めた。最初はベッドや、景色と

いった身近なものを描いた。最初は手もあまり思い通りに動かせず、僕が描いたものは現実にあるものとはかけ離れていて決して上手とは言えなかった。でもだんだん、上手く動かすことができなくても、試行錯誤を繰り返して思うように描けるようになった。

そして、僕は初めて納得のいく絵を描いた。僕が欲しかったものを病室にたくさん描いた絵だった。

「お世話係さん。見てください。今日はとてもうまく描けたんです」

僕は絵をお世話係さんに見せた。お世話係さんは僕の絵を見て優しい笑みを浮かべて僕を褒めてくれた。そのことは今まで何かを自分一人でできたことはなかった僕にとって、この上ない喜びだった。

絵を描き初めてからしばらくして、僕は少しだけ丈夫な体になった。その時にはもう、絵を描くことは習慣になっていた。絵のおかげか、心の健康もよくなったとお医者様は言い、病院の庭へ出る許可も出してくれた。

「じゃあ、今日はお散歩に行ってみましょうか」

診察後、お世話係さんが言った。

「そうですね。僕も行ってみたいです」

僕が言うと、お世話係さんは、ニコッと笑みを浮かべた。

病室に戻った後、支度をした。もう病室から出ようとした時、机の上のスケッチブックが目に留まった。

「あ、これも持って行こう」

僕はスケッチブックをしっかり持って、扉を開けた。

「準備はできましたか」

お世話係さんが病室の外で待ってくれていた。

「はい」

緊張半分、好奇心半分の返事だった。

「じゃあ、行きましょうか」

そう言って、お世話係さんが僕に手を差し出した。僕は差し出された手をつかみ、歩き出した。

コツコツ、スタスタと足音が響く。一歩一歩、病院の庭に近付いて行く度、ドキドキと心臓が高鳴る。

「もうすぐですよ」

お世話係さんが言う。その声さえも普段聞いてないようなものに聞こえる。夢の世界を歩くような、本当に不思議な感じだ。

「ほら、着きましたよ」

気がつけば僕は、扉の前に着いていた。扉についたガラスの先には、色鮮やかな景色が見える。ごくっと唾を飲み込んだ。

「さぁ、行きましょうか」

僕はそっと、扉を押した。空いた隙間から風が通り抜けて行く。僕は初めて、外へ出た。

病院の庭は病室とは違い、全身に風と光があたる。

「わぁ、すごくきれい！」

目の前に広がる景色は想像した世界よりもはるかに美し

かった。
「まだ、体を動かしたばかりだから、走ったりしてはいけませんよ。それと、疲れたらちゃんと休んでね」
お世話係さんはそう言って僕の手を離した。僕は一人で歩き出した。
花壇に咲いた花。綺麗に並べられたレンガの道。背の高い木。その下にあるベンチ。病室からでは見えなかった景色だった。
かがんでよく見れば、一つ一つ違う花びらの色。ボコボコとした表面の土。そこからちょっと伸びている草。草の間を器用に通って行く虫たち。近付かなければ見えなかった。
見ることができなかった景色が鮮明に僕の目に映る。感じたこともない感覚が体に刻みこまれて行く。病室だけの僕の世界が広がった瞬間だった。
「お世話係さん。今日はここで絵を描いてもいいですか」
お世話係さんは僕を見て笑顔でうなずいた。
絵を描いている間に、気づくこともあった。綺麗に見えたレンガ造りの道も、レンガの色はそれぞれ違っている。形も完璧な四角形ではなく、少し欠けているところがある。草や花、木だって、すべて同じ色や形なんてない。
今見えている景色は、想像した完璧な世界とは違うことを感じた。少し欠けていたり、大きさが違ったりしている。それはでも、決して悪いわけではない。それは僕と似ているような気がした。

「もう時間ですよ。そろそろ戻りましょうか」
お世話係さんの声がして、もう日が暮れていることに気がついた。いや、実際は絵を描きながら気づいていたが、まだ絵を描きたかったから、気づかないふりをしたと言った方が正しいのかもしれない。
僕はこの場所で絵を描きたくて、片付けをゆっくりしていた。
「これからは、ここで絵を描きたかったら毎日こられますよ。だから、今日はもう帰りましょう」
僕はお世話係さんの方を見た。
「本当に、毎日ここにきてもいいんですか」
ニコリと笑みを浮かべてお世話係さんは「ええ」と答えた。
「本当に？　毎日？」
信じられなくてもう一回聞いてみる。
「本当ですよ。だから、今日はもう帰って、また明日続きを描きましょう」
「はい！」
僕は元気よく答えた。

次の日、また次の日と、病院の庭に行ける日には、そこで絵を描いた。病院の庭では、より近くで知らないことをたくさん見て、知って、描くことができた。
病院の庭に行くようになっていつの間にか一人で行くことが許可された。また、少しずつ体力も増え、お医者様から

は、病院の付近なら散歩することを許された。
「お世話係さん。病院の付近なら散歩してもいいって言われたんですけど、どこまで行っていいのですか」
「うーん、病院が見えるところまでかしら。例えば、近くにある公園とか」
公園か、行ったことないけどどんな場所なんだろう。
「今日は天気もいいし、せっかくだから行ってきたらどうかしら。きっと楽しいはずよ」
そうして、お世話係さんに促されるまま、今日は公園へ行ってみることにした。

公園では、子供や、大人たちも何人かでボールを使ったり、走ったりしながら遊んでいた。僕もあんな風に遊びたいな、と思っていた矢先、
「お医者様から言われたと思うけど、激しい動きはしないでね」
と、遠回しに忠告をされていたのを思い出し、おとなしく散歩をすることにした。
散歩をしながら見ていると、公園の芝生の広場でサッカーをしている子供たちが目に留まった。僕と同じぐらいの子供たちが、元気にボールを追いかけていた。僕は立ち止まってその子たちを見ていた。
見ていたら、突然、声が聞こえた。
「君も遊びたいの？」
気がつけば、さっきサッカーをしていた子の一人が僕の近くにいた。
できることなら遊びたかった。だが、僕の気持ちを止めるように先程の忠告が思い出された。
「ごめんね。僕、遊んじゃだめって言われているんだ。だから、遊べない」
「あー。じゃあ、仕方ないか。また、いつか一緒に遊ぼう！」
彼は申しわけなさそうに言った後、何事もなかったかのように戻って行ってしまった。
楽しそうな笑い声とボールを蹴る音がはっきりと聞こえる。
いいな、僕もあんな風に体を動かしてみたいな。
そんなことを思いながら、近くのベンチに腰を下ろし、スケッチブックを開いた。だが、今日は集中できずに、サッカーをしている子供たち見ていた。

病院へ帰り、お世話係さんは少し元気がない僕を心配して、飴玉をくれた。
「はい、これあげる。食べたあとは歯磨きをしっかりしてね。あと、元気を出すにはやっぱり好きなことをするのが一番よ。明日、絵を描いてみたらどうかしら」
世話係さんは去り際におやすみなさい、と優しく言って病室を出ていった。
「絵を描くことか」

机に置いてあるスケッチブックを取って、今まで描いた絵を眺める。僕が感じたままの景色が描かれている紙たち。その絵を描いていた時の気持ちを思い出しながらめくって行く。楽しかった絵を描く時間がすっと流れて行くのを感じた。

絵を眺めていた時、ふと、一枚の絵が目に留まった。それは僕が病室で初めて描いた絵だった。そこには実際の病室にはない、大きな本棚や、暖炉といった本で読んだ景色で描いた僕の理想の病室が描いてあった。

「理想の絵。理想の世界。僕の思い描く世界」

今は忘れていたが思い出した。この白い紙の世界には僕の理想をなんだって描くことができる。それに気づいた僕はいいアイデアが思いついた。

そうだ。さっきまで考えていたサッカーを一緒にするっていう想像を僕の絵の世界に描けばいいんだ。

次の日。僕はすっきりとした気持ちで目が覚めた。不思議と絵を描きたくない抵抗感はなく、むしろ早く描きたくなっていた。

いつもよりも早い時間に病院を出て、公園に着いた僕はさっそく絵を描き始めた。まだ、誰もきていなかった。昨日とは違い、静まり返った公園は少し寂しいように感じる。

僕は真っ白な紙に線を描きだした。新しいものが真っ白な世界に生み出されて行く。シュッ、シュッと描く音だけが聞こえていた。

「あ、昨日の子だ」

絵を描いていたら、前方から声がした。顔を上げると、昨日話しかけてくれた男の子がサッカーボールを持って歩いてきていた。

「くるの早いね」

そう言って、彼は僕の横に座った。出会ったばかりなのに積極的だったから、僕は少し驚いて、彼を見た。彼は僕と目があうと微笑んだ。

「絵を描いてるの？」

「うん。絵を描くのが好きなんだ」

僕は笑って答えた。

「へぇー！　すごいね」

彼は僕よりも元気で、よく通る声で言った。僕は絵に視線を戻していた。

「ねぇ、絵を見てもいい？」

彼は言った。顔を上げ横を見ると、また彼と目があった。綺麗なスカイブルーの目。

「いいよ」

僕はスケッチブックを彼に渡した。彼は「ありがとう」と言ってそれを受け取った。

彼は絵をじっと見つめていた。僕はお世話係さん以外に絵を見せたことがないから、緊張していた。

しばらく沈黙が続く。僕も彼も言葉を発さない。弱い風が

吹いて、カサカサと公園に植えてある木の葉が揺れた。
僕はじっと絵を見る彼を見ていた。僕とは違って日焼けした肌に細すぎない手足。お世話係さん以外の人と僕はあまり出会ってこなかったからか隣に座る彼を僕は不思議に思っていた。
今、彼は僕の絵を見て、何を考えているだろうか？　それを知るのは怖い気もするし、知りたいと思う気もする。
「すごい！　この絵、本物みたいで、細かいところまでしっかり描かれてる！」
しばらくしてから彼は言った。彼が見ていたのは、まだ描きかけの公園の絵。不安だったが、ホッとした。
「ありがとう」
その時はなんだか照れくさくて、少し下を向いてしまった。
「まだ時間あるし、他の絵も見ていい？」
笑顔で見つめてくる彼に僕は「いいよ」と言った。

もうすっかり公園の色がはっきりとして見えるほど明るくなった頃。顔を上げればちらほらと歩く人や、遊具で遊ぶ子が見え始めた。僕らは長い時間、絵を見ながら話をしていた。おかげで前よりも少し話せるようになっていた。
「いつのまにか、明るくなってたね」
彼も気づいたらしく、スッと立ち上がって体を伸ばした。
「おーい」
遠くから他の男の子たちの声が聞こえた。声のした方を見ると、何人かが手を振っていた。彼も手を振りかえすと「絵を見せてくれてありがとう！　またね」と言って駆け出していった。
僕は「またね」と言って、しばらく彼の後ろ姿を見ていた。
彼らがサッカーを始めると僕は絵の続きを描き始めた。
サッカーをしている彼らを見ながら、動きを観察する。普段激しく動かない僕は、彼らの動きにはとても驚いた。僕と同じ機能を持った体をしているはずなのに、動きは僕よりも俊敏で器用だ。体ってあんなに動くものなのか、なんて思いながら、動きを捉えて行く。
観察して切り取ったその一瞬の動きを、僕は紙に写して行く。ボールを蹴る姿、走る姿、ぶつかる姿。僕が体験したことのないその動き。紙に描きながら、こんなふうに動かすのかな、と考えながら描いていた。
描いていると、僕も同じ動きをしているような感じがして楽しかった。それには静止したものを描くのとは何か違う楽しさがある。

「じゃあ、また明日！」
そんな声が聞こえ、見渡すとあたりは影が多くなり、公園は昼間に比べて人が少なくなってきた。サッカーをしていた彼らも家に帰るようだった。
僕も絵を描き終えたから、そろそろ帰ろうと立ち上がった。ずっと座っていたからか、疲れたからか、体が重く感じる。

グーっと体を伸ばすと血液が巡り、心臓がドクドクと強く動くのを感じた。
ふわっと手を離して前を向く。さっきまで人がいた広場を見ると、こちらに向かってくる人影が見えた。今日喋った男の子だった。
「え？」
僕が驚いていると、遠くにいた人影はもう僕の近くにきていた。
「ハァッ、ハァッ。間に合ったー！」
走ってきた彼は、息が上がっていた。サッカーをして、しかも今走ってきたから疲れているはずなのに、彼は清々しい笑顔だった。
「どうしたの？」
今から帰ると思っていたから、なぜきたのか、僕にはとても不思議だった。
「ハァッ。ふぅ。いやー、別にたいしたことじゃないんだけど、どんな絵を描き上げたのか気になってさ」
まさか、そんなことで、とは口には出さなかったが、思ってしまった。
「どんな絵になったのか見てもいい？」
「いいよ。はい」
ここまでわざわざきてもらって、見せないことはないだろう。僕は素直に彼にスケッチブックを渡した。彼はスケッチブックを見るなり「おぉー！」と感嘆の声を上げた。
そして、絵をよく見ると、彼は言った。
「これ、もしかして、僕？」
彼が指をさした先には、僕が描いたボールを追いかける彼の姿があった。
「うん。サッカーを楽しそうにしているところを描いたの」
「え！　ありがとう！　すごくかっこよく描いてくれてるじゃん！」
彼は飛び上がって喜んだ。
「それならよかった」
僕ははしゃいでいる彼を見ながら呟いた。
「君、本当に絵が上手だね！　今度もまた見せてよ！」
クルッと彼は振り返ったかと思えば、元気に言った。
「いいよ」
もう、昨日の黒い気持ちはどこかへ消えてしまっていた。
「やったー！　じゃあ、また明日ここで会おうよ！」
眩しいぐらいの満面の笑みだった。もう、あたりはオレンジ色で、彼の日焼けした顔が夕日に照らされていた。
「うん！　また明日！」
彼は元気に手を振った。僕も彼と反対方向に進みながら、精一杯手を振った。
公園を出ようとすると、入り口にお世話係さんが立っていた。
「ごめんなさい。遅くなってしまいました」

僕はお世話係さんが待っていたのを見て、帰りが遅くなったんだと思った。
「大丈夫よ。ただ、帰り道は少し心配で迎えきただけだから。さぁ、一緒に帰りましょうか」
お世話係さんは優しい笑顔を浮かべていた。僕は怒ってないことに安心し、お世話係さんの手を握った。
「お友達ができたのね」
帰り道をゆっくり歩いていると、お世話係さんは言った。
「はい、そうなんです」
「どんな子？　何か話をした？」
「いつもサッカーをしてる男の子です。今日、僕が早く公園にきたらその男の子も早くきたらしくて、彼の方から話しかけてくれました。彼が僕の絵に興味を持ってくれたので、彼と一緒に僕の絵の話とかをしてました」
僕の話をお世話係さんは黙って聞いてくれていた。
「そうなの。なら、今日は楽しかった？」
「はい！　とても楽しかったです。絵を描くこともできて、初めて友達もできて」
僕はつい声を大きくして答えた。
「なら、よかったね。明日も公園に行く？」
「はい！　絶対行きます！」
僕が元気よく答えると、世話係さんはニコッと笑った。
「なら、今日はたくさん食べて、たくさん寝て、明日に備えようね」
「はい！」
僕は明日をまた楽しみにしながら、病院に帰った。
僕はそれからほとんど毎日、公園へ行った。
最初は早く行って、彼としか喋らない日々が続いたが、しばらくすると、彼の友達とも話すようになった。僕は彼らとサッカーとか激しい動きはできなかったけど、たまに休憩中とかに喋りながら公園を歩くことができた。
彼らとも気軽に話せるようになったある日のことだった。
「いつか、全員でサッカーをすることができるといいな」
サッカーの間の休憩中。僕は話を聞きながら、絵を描き進めていた時だった。みんなが喋っている中で誰が言ったかは分からないが、そんな声が聞こえた。その言葉はみんなが喋っている時であったというのに、全員に聞こえたようだった。
さっきまで喋っていたというのにみんなが黙った。しばらく沈黙が続く。何人か気まずそうに下を向いて、何人かは僕の顔色を窺うように視線を僕に向けた。
「そうだね。いつか、僕もみんなでサッカーをしたいな」
僕はスケッチブックから目線を上げて、みんなを見て言った。
僕のその一言で「そうだな」「そうだよな」「いつか一緒にやろうぜ」とみんなが喋り始めた。僕もその空気感に笑顔になりながら、また絵を描き始めた。
「再開するぞ！」

しばらくして、声が響き「じゃあ、行ってくるね」とみんな口々に言いながら広場に戻って行った。周りに彼らがいなくなった瞬間、少し胸が苦しくなった。僕には肌寒いくらいの涼しい風が吹いた。

「できたら、いいよね」

そのいつかを何度望んだだろうか。でも結局、体調はよくなっても、体の動きが万全に戻ることは今までなかった。僕はいつも、彼らの遊ぶところを見ることしかできない。

珍しく、今日は絵を思い通りに描けなかった。

「また、明日！」

みんなが帰って行く中、彼はいつも一人だけ、僕の方に戻ってくる。

「今日はどんな絵を描いたの？」

目を輝かせながら彼は聞いてくる。

「あ、いや、今日は」

僕は今日の絵を見せたくなくて、曖昧に返事をした。絵を隠そうとする僕に、彼は不思議そうな顔をした。

「もしかして、今日は見せたくない？」

僕は黙ってうなずいた。彼は「そっか」と短く言うとしばらく黙った。そして、考えがまとまったのか、彼はうなずいた。

「うん、そういう日もあるよね！　大丈夫だよ。また明日見せてね」

笑顔を向ける彼に、僕はまた胸が痛くなったような気がした。

「うん、また明日」

僕はそう言って、彼の後ろ姿が見えなくなる前に振り向いて帰った。

病院に帰っても、妙に落ち着かず、食欲もあまりわかなかった。心配しているお世話係さんに、おやすみなさいと笑顔で言って、今日はすぐに病室に戻った。

病室に戻ってすぐ、何かをする気力もなくて、ベッドに寝転がった。

別に前よりも苦しいわけではない。むしろ、沢山の友達ができて、好きなことができて、僕は幸せだ。

でも、ふとした瞬間に心の奥底からの嫉妬や不満が出てくる。誰も悪くない。今日だって、悪気があって言ったわけではないはずだ。なのに、恨んで、妬ましくてしょうがない。その気持ちは絶対に知られたくなくて、身勝手な気持ちのように思う。

「僕の病気が治って、サッカーをすることができたらいいな」

真っ白な想像の世界に、何度も何度も描いても、それは僕の想像の世界上の話で、実際に叶うことはない。ずっと知っていた。

そしてそれがずっともどかしくもあった。どれだけ精密に描こうが、結局は叶わない理想だって気づいていた。

ふと、窓から空が見えた。もうとっくに日は沈んでおり、

暗くなっていた。そこには月は浮かんでいないが代わりに星が無数に広がっていた。
「星……」
昔、お世話係さんから星にまつわる話を聞いたことがあった。
この星空の先には、ここに似たような生き物が住んでいる、星があるんだとか。あの見える無数の星の中にも、そんな星があるかも、なんだとか。詳しい話は知らないけど、確かそんな話をしていた。
「僕がサッカーをできる星もあったらいいな」
頭の中がふわふわしているのを感じる。目を開けると、視界はまだぼんやりとしている。辺りは見渡す限り深海のような暗闇だった。ここはどこだろう。僕はただ暗闇の中に浮いているようで地面を踏む感覚はなかった。
僕は何処へ向かっているかも分からないが、歩き出していた。歩くたびに、透明な毛布を押して行くような、不思議な感覚を体に感じた。ここは夢の世界だろうか。そんな疑問を抱えながら僕は進んだ。
「こっちだよ」
不意に僕と同じ音色で呼ぶ声がした。その瞬間、僕の視界には一点の光が見えた。それは小さくて、でも、すぐに気づけるような暗闇には眩しいぐらいの光を放っていた。
僕はその光を目指して進んだ。
「こっちだよ。こっちにきて」
進むたびに声がはっきりと近くに聞こえた。僕は明確な理由もなく、その声を目指して進んで行く。
進んで行くと、暗闇には続々と光たちが増えて行った。歩いて行く度に一つ、また一つと増えて行っているようだ。
最初の光にたどりついた時、もう暗闇には無数の光が散らばっていた。僕はこれが星空だと気がついた。これは星空の向こう側のようなそんな景色なのだと思った。そして、僕が目指して進んでいた光は青色の星になった。その星はどこか、親近感を覚えるようなそんな感じがする。
まばたきをすると、また別の景色が広がっていた。そこは近所の公園のように見えた。だが、木々や遊具の位置が違う。また新しい景色だった。
突然、トンと音がした。音のした方を見ると、サッカーボールが足元に転がってきた。僕はそれを拾い上げる。
「おーい」
ボールが転がってきた方から声がした。顔を上げると、いつもサッカーをしている友達がいた。一人が僕の方へ走ってきた。
「ねぇ、一緒に遊ぼうよ」
いつも話をしてくれる男の子だった。
「ごめん、僕は遊んじゃダメなんだ」
僕はまた下を向いて言った。
「大丈夫だよ。ここは君の世界。君がしたいと思えばこの世

界は君に応えてくれるよ。だから、ね。一緒に遊ぼうよ」
僕は彼を見た。彼は笑顔で見ている。僕が何も言えないでいると、彼は僕の手をつかんで「行こう」と走り出した。

見慣れた天井が視界に映った。夢を見ていた。僕はゆっくりと体を起こした。体を起こしても、その夢はまだ消えなかった。むしろ鮮明に記憶に残っている。
僕はスケッチブックを取り出した。ページを開くと僕は鉛筆を動かした。何か観察したものを描いたわけじゃない。だが、今目の前にあるものを描いているかのように僕の手はスラスラと紙に形を描きだしていた。

「わしが最後に青年について覚えているのは、ある日から徐々に話すこともなくなって、ひたすら絵を描いていたことじゃ」
老人は寂しそうに言った。
「何を言っても、聞こえないようになってしまって行った。最後に彼が話したのは、何の絵を描いてるのか尋ねた時だった。僕が見た世界をそのまま描いてるんだよと一言言って、もう喋らなくなったが」
散歩を終えて、老人はまた絵が飾ってある場所へと戻ってきていた。絵を見つめながら、老人は「一体、何をそんなに見ていたのだろうか」と呟いた。
「さて、そろそろちゃんとベッドで休ませないといけない」
そう言って、車椅子をゆっくり動かした。昔話を聞いていた少年はいつの間にか寝てしまっていた。
病室に戻り、少年を起こさないように移動させた。少年は起きる様子もなくぐっすり眠っている。老人はそっと少年に布団をかけて、病室を出ようとした。
老人は一冊のスケッチブックが目に留まった。それは何度かページがめくられたのか、少し分厚くなっている。老人はそのスケッチブックを手に取った。スケッチブックは開かれていて、そこにはサッカーをしている子供たちが描かれている。

「ねぇ、お兄ちゃん。この絵はなあに？」
身を乗り出して、男の子が聞いた。お兄ちゃんと呼ばれた背の高い青年は優しく答えた。
「この絵は、昔僕が見ていた景色なんだ」
「見ていたって、どういうこと？」
男の子が不思議そうに聞いた。
「うーん。なんて言ったらいいのかな。僕が、見ていた夢みたいなものかな？」
青年は、少し考えて言った。
「ふーん。お兄ちゃんすごいね。僕は夢で見た景色なんてすぐ忘れちゃう」
「僕も何で覚えていたのか、不思議なんだよね。夢のような、本当にあった現実のような。前世の記憶みたいなやつなのか

な？」
「へぇ！すごいね。お兄ちゃん、その話もっと聞かせてよ」
男の子が目を輝かせて言った。青年が「いいよ」と言おうとした時だった。
「二人とも！　サッカーしようよ」と声がした。
外を見ると、近所の友達が何人か集まっていた。
「その前に、サッカーしに行こうか」
「うん」
青年は立ち上がり、歩き出した。男の子もその後について行った。
「そう言えば、お兄ちゃん。もうサッカーして大丈夫なの？この前足を治療してもらったばっかりじゃん」
「ああ、経過も順調だし、この前って言っても、もう大分経ってリハビリも終わってるから大丈夫だよ」
「そうなんだ。よかったね。サッカーできるようになって」
「そうだね」
扉を開けると、もう友達は、先に行っていた。
「あ、もうあんなに先に行ってる」
男の子は少し怒ったように言った。
「お兄ちゃん、早く行こう。おいてかれちゃうよ」
青年は「分かってる」と言って、家を出た。家の外は晴れていて、日差しが強い。
「はやく、はやく」
男の子が走りながら呼んでいる。
青年も、男の子を追いかけて駆け出した。
懐かしいな。
空のような色の瞳でゆっくりとその絵を見ていた。そして、しばらくしてからスケッチブックを静かに閉じた。

空巣

鹿児島修学館高等学校　二年
マッサン

まるでその存在を主張するような佇まいを見せていた。大きい塀をよじ登った。塀の中には豪邸があり、堂々とした表情で構えていた。川崎はその様子に怖気づいていたが恐怖よりも空腹感が優っていた。社会から孤立して、貯金も底をつき、汚れて異臭がしている川崎に手を差し伸べる人間は誰もいなかった。

「これは仕方ないこと……」

そう川崎は自分に言い聞かせるように呟いた。豪邸に侵入しようとする理由はお金が多少減っても困らない人間を狙いたいと思っているからだ。

川崎は全面ガラス張りになっている所へ、近くにあったレンガで出来た陶器を投げた。勢いよく窓が割れた瞬間の警報音は豪邸が叫ぶようだった。川崎はこうなることを予測はしていた。しかし想像以上に大きな警報音を聞き、また物怖じした。しかし、川崎は一瞬怯んだものの、すぐに豪邸の中に侵入しようとひび割れているガラスを崩していき、その体がぎりぎり通れるような穴を作った。あたりは夜で、部屋の中も真っ暗だったせいで、自分の手にガラスの破片がいくつも刺さり血だらけになっていることさえ気づかなかった。

真っ暗な部屋の中で金品等を血眼で探した。そしてなんと運のいいことに、五分くらい探した後、部屋の引き出しを開けると高そうな時計が六個、几帳面に保管されているのを見つけた。

「やった！」

川崎は子供を抱え上げるようにその時計が入ったケースを持ち上げた。川崎は警報音の中、逃げようと窓の方へ駆け出したその時、

「動くな!!」

猟銃を構えている白髪で白髭が生えている老人と目が合った。おそらくこの豪邸の持ち主だ。ちょうど帰ってきたのだ。ここまでの豪邸なのに、メイドや執事がいない理由を体現するかのような威勢だった。

川崎は、家主が帰ってきたこと、銃を突きつけられたことに動揺したが、捕まりたくない一心で家主を突き飛ばそうとした。大砲の様な大きな音が響き渡った。家主が川崎に向かって銃を放ったのだ。幸いあたりはしなかったが、耳鳴りが酷く頭がぐらぐら揺れる感覚を覚えた。川崎は家主に殺されると確信した。

川崎は殺されるより先にと床に散乱していたガラスの破片で一番大きな物を取り、銃を構え直している隙に家主にそれ

を刺した。川崎には家主の体のどこにガラス片を刺したのかすら分からなかったが、そのまま倒れる家主を尻目に時計のケースを持ってその場から逃げていった。

…からすが鳴いた。

警察に捕まるのは思っていた以上に早かった。川崎は自分なら警察から逃れられるという根拠のない自信を持っていた。しかし日本の警察とは案外優秀なものだ。半日もしないうちに警官と出くわした。まだ警官との距離が離れていたのでその場から立ち去ろうとしたが、ほんの数十秒で捕らえられてしまった。

川崎はその時、運悪く時計の隠し場所を探していたせいで、ケースを持ったままだった。血だらけの手に時計のケース、川崎を犯人だと断定するには十分だった。いや、そもそも川崎にはもう逃げる気力が残ってはいなかった。あの時、豪邸から逃げ出した時に、すでに体力は使い果たしていたのだ。

それは川崎を取り押さえた警官にすら見透かされた。川崎は警察署に連行され、尋問を受けて知ったことだが、あの家主は腹部を突き刺され、倒れた時、打ちどころが悪く死んでしまったらしい。川崎はその言葉にまず驚いた。あのタフそうな家主が死んでしまったのだから。川崎自身そこまで深く刺していないつもりであった。次に絶望が心を蝕んだ。これで二度目の殺人を犯したのだから。

川崎は貧困の母子家庭で育った。親は毎日夜に家を出ていて、その時になんの食べ物も置いていなかった。お金など、一円たりともらったことはなかった。弁当も作ってくれなかったので、食べられなかった。先生は心配していたが新任だったこともあり、川崎の母親の態度を恐れて、何もしてくれなかった。

そんな川崎が生きていくにはもう犯罪に手を染めるしかなかった。毎日三キロ先のコンビニまで歩いておにぎりを万引きしていた。三キロ先のコンビニに行っているのはバレないようにするためだ。

しかしある時万引きが見つかってしまい、母親が呼ばれた。母親からは容赦なく殴られ顔が凹んでしまった。川崎はその時に母親を殺すことを決めた。今は力が足りないが、その時が来たらきっと……。そう毎日考えていた。

そして高校二年生の夏、川崎の母は病気で寝込んだ。川崎は毒殺することにした。毒の本を漁り散らかし、無味無臭の毒を作った。材料は市販の薬局から簡単に買えるものにした。それぞれ違う薬局で買い、その痕跡も消したように思った。母親はその毒を飲み続け二日で死んだ。川崎は復讐することに成功したのだ。

…カラスが鳴いた。

睡眠薬も入れていたため、寝ている時に死んだ。川崎はあらかじめ調べておいた母親の金庫からお金を全て持ち出し、県外まで逃げていった。

しかし逃亡から十日後の夕方に捕まってしまった。日本の治安の良さの理由が分かった気がした。川崎はその時から犯

行の殺意の強さが原因となり懲役十二年の判決が下された。川崎は怒り、言った。

「なぜ世の中は俺を見てくれないんだ！　こんなおかしい話がどこにある！」

しかしその声に耳を貸す者は誰もいなかった。

その後、なんとか刑期を終えて、出所することになったが、川崎には暮らしていけるアテがなかった。結局川崎はホームレスとなり、ボロボロの格好で細々と生きていった。

しかし、そんな中、台風による大洪水が巻き起こった。川崎は近くの体育館に避難しようとしたが、ホームレスは立入禁止と断られてしまった。どうやらホームレスは公共の施設を使用することができないらしい。しかし、川崎は、「温情はないのか!?　俺はなりたくてホームレスになったわけじゃない！」と必死に訴えたが、受付人の口から「警察」という言葉が出てきて、そそくさと退散してしまった。家の代わりに作った段ボールハウスも跡形もなく吹き飛ばされ、川崎は雨風を凌ぐ術を失った。川崎は仕方無く大洪水を凌ぐためになけなしのお金で格安ホテルに泊まり、いよいよ一文無しになってしまった。

川崎は身体中が濡れて冷たくなっていき、もう限界だと感じた時に、ふと、あの豪邸が目に入った。そして空き巣を決行したのであった。当然川崎は誰かを殺す気などなかった。川崎にとってはほとんど事故のような出来事だった。しかしそんなことは世間から見れば何の関係もない。ましてや刑務所から出てまだ一年と少ししか経っていないのに、母親の次に大金持ちを続けて殺したのであれば、今度こそ極刑を受けるだろうと思った。

そして裁判の日。川崎は裁判が始まってからずっとどうしようもなかった現状を必死に伝えていた。しかし、生活保護やホームレスの更生制度を受けなかったことなど、出来たはずのことをせずに犯行に及び、さらに二度目の悪意ある殺人と見做されて、木槌の音と共に死刑判決が言い渡された。川崎は怒り叫んだ。

「生活保護？　更生制度？　そんなの俺は知らねえよ！　誰も教えてくれなかった！　誰も俺に助け舟を出さなかった！　そんなもん俺にはどうしようもないじゃないか！」

しかし、そんな訴えも虚しく判決が変わることはなく、川崎は警備員二人に取り押さえられながら裁判所を後にした。

…鴉が鳴いた。

川崎は本を書いていた。独房の中一人で「その時」に怯えながら、自分の理不尽な状況を訴え世間からの同情を買おうとした。独房に置いてある五冊の本を参考にし、国語辞典で漢字を調べながらひたすら本を書き続けた。川崎は最後にできる抵抗をしようと、もがくようにその本を書き、一年と数ヶ月経ち、ようやく完成させた。

川崎は弁護士に本を売ってもらうように頼んだ。川崎は考えていた。（こんなに酷い目に遭っているのに、報いも無さすぎるということはないだろう。きっと死にはしないはず）だ

と。川崎は救われるはずだと信じていた。しかし、そんな期待はある日、突然の終了を迎える。本を出版して約一年後の日だった。川崎の独房の扉が開き、看守が一言「出ろ」。それは川崎に「その時」がやってきた事を告げるものだった。川崎はその言葉の意味が分からなかった訳ではなかったが（もしかしたら自分の本が早く流行り、出られるのかもしれない）という最後の希望を込めて聞いた。

「俺は死ぬのか？」

看守は川崎の目から視線を外し、コクリと頷いた。今度こそ川崎の希望が潰えた瞬間だった。川崎はその言葉を聞き、足から崩れ落ちた。そこに響くのは、ただただ虚しい沈黙だけだった。

川崎は処刑台に行くまでの長い廊下では暴れたりしなかったが、道行く警官に話しかけて謝罪やら感謝の言葉などを口にしていた。これが人間の生存本能なのか、それとも本心なのかは川崎自身も分からないことだった。そして、川崎は神父と対談し、少しの菓子を食べた。しかし最期に食べるチョコレートの味は分からなかった。

そうして一時間ほどしたら、ついに目隠しが渡された。川崎は目隠しと手錠と足枷をつけられ、警官の誘導のもと歩かされ、そしてある場所で止められた。

その上にあったロープで首を括られていよいよ川崎は自分の死を悟る。川崎の横にいた警官が言った。

「最期に何か言い残すことはないか？」

川崎は聞いた。

「……長くなるがそれでも良いか？」

警官は言った。

「五分以内なら聞いてやる」

すると川崎は急に笑って話し始めた。

「俺の親はゴミの中のゴミだった。親が俺に教えてくれたことは、酒の味とタバコの熱さと恐怖と痛みだった。その息子なんだから、そりゃあゴミが育つよな。だけどよ、お前らが一番に排除しなければならないのは、俺の親みたいなやつじゃないのか？　なぜあの時お前らは助けてくれなかったんだ？　俺が苦しんでいる時、手を伸ばしてくれなかったんだ？　お前らが放置して無視し続けていた子供が今こうなってるんだよ。俺はこの世の全てが憎い。この罪は俺だけのものじゃない。ここにいる全員が背負うべきなんだ。俺はやっぱり認めない。たとえ死んだとしても俺一人が罪を被せられたことを永遠に恨み呪ってやる」

川崎がそう告げると足元の台が開き、ロープが川崎の首を絞めた。

川崎は絶命した。警官は川崎の死亡を確認するためにその体を下ろした。そして目隠しを触った時に気づいた。

…空巣は泣いていた。

講師からの一言

自分の中の石を磨く

立石富男

今年度も八回の講座があっという間に終わったという感じである。私自身それだけ充実していたという気持ちなのだ。それは図書館担当者のこの講座に対する熱い思いを感じていたせいもあるかもしれない。ハッパを掛けられていた講座生たちもおそらく同じ思いだろう。

教室では毎年同じようなことを言い続ける。今回は「書く時には高校生だという考えを棄てる」ことを強調した。「人生経験が少ないから」とか「高校生だから」とか、そんな理由で書く姿勢が甘くなったら困ると思ったのである。創作をやる以上は私たちと同じ土俵に上がっている意識を持ってほしかったのだ。だからと言ってすぐに良い作品が書けるとは限らない。しかし心構えは大事である。心構えは目標を持つことに等しい。目標のないところに成功はない。

今年度も個性的な作品が集まった。早めに仕上げていながら何度も書き直す粘り強さ、またなかなかペースの上がらない中でしっかり書き上げてきた努力には感心した。これは貴重な体験だったと思う。この体験は必ず生きる。みんな胸を張って自分自身を褒めていい。

今後は自分の中に埋もれている石を見つけ、磨いていくことを期待したい。石が珠になるか、ただの石ころのままで終わるか、自分次第であるのは言うまでもない。

『読者を迷子にしない』

出水沢藍子

小説を書くのは料理を作るのに似ています。

まず何を作るのかを考え、必要な材料を揃え、洗ったり皮を剥いたりという下ごしらえをしてから、焼く、炒める、揚げるなどの調理作業に入る。頃合いを見て砂糖や塩を入れ、水を加えて薄め、ときには新味のスパイスを振りかけたりしながら、予定通りの逸品を仕上げます。

小説を書く時もそうです。「これを書きたい」と思いついて、すぐに書き始めては、たちまち行き詰ってしまう。題材に関する資料を読み込み、体験を思い出し、エピソードを拾い集めてと、周到な準備をします。集めた材料をどの順序で書いていったら話がスムーズにいくだろうか、言いたいことが読み手に伝わるか、しかも興味を持って読んでもらえるだろうか。構想がまとまったら、いよいよパソコンに向かう。「読者」とは、料理を食べてくれる人のこと（もちろん自分をも含めて）。「これはうまい」という声が聞きたくて、書き手は腕を振るうのです（そうそう上手くはいかないけれど）。

秋の特別講義にお招きした直木賞作家の澤田瞳子さんは、「何より大切にしているのは、読者を迷子にしないこと」と話されました。忘れてはいけません。この言葉を胸に刻み込んで、自分にしか書けない小説を、未だに隠れたままの物語を、探す旅に出かけましょう、読者を連れて！

講座の様子

開講式

講　座

閉講式

講座日程

回	月・日	曜	時間	回	月・日	曜	時間
第1回	7月10日	日	12:30～16:30	第5回	10月15日	土	10:00～16:00
第2回	7月31日	日	12:30～16:30	第6回	11月13日	日	12:30～16:30
第3回	8月21日	日	12:30～16:30	第7回	12月18日	日	12:30～16:30
第4回	9月23日	金	12:30～16:30	第8回	1月22日	日	12:30～16:30

編集後記

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集『潮音～若人の樹～』が完成しました。今回は、十五人の受講生が県内各地から集まりました。休日の午後に集う全八回の講座では、それぞれの作品を読み、議論し、考え、文学について語り合いました。先生方は、受講生の個性、作品の中の一つ一つの言葉を大切にしながら、執筆の愉しさや厳しさを、熱心に御指導くださいました。受講生は、高校生活を送りながら、締切日のある作品の創作に苦しむこともあったようです。それでも「毎回、多くの学びがある」とゼミナールを楽しみに来館する高校生達を大変頼もしく感じました。

完成した十五作品は、若者らしさがあふれる瑞々しい作品ばかりです。一方で、社会問題や若者の内面を映し出し、読者を圧倒します。講座での学びや交流、作品の完成が、受講生の自信となり、新たな挑戦に繋がることを期待します。

本作品集を上梓できましたのは、ひとえに、立石先生、出水沢先生の熱意ある御指導の賜物です。この場を借りて感謝申し上げます。

令和四年度海音寺潮五郎記念
文芸ゼミナール受講生作品集
潮音　～若人の樹～
令和五年三月
編集・発行
鹿児島県立図書館